ラスベガスびくびくゲロゲロ紀行

——アメリカンドリーム核心への酷薄旅行記——

ハンター・S・トンプソン 著　ラルフ・ステッドマン 画　翻訳: 山形浩生[1]

平成一一年七月一一日

[1] ©1971 Hunter S. Thompson, ©1999 山形浩生

ボブ・ガイガーへ

ここに書くまでもない理由で捧げる

――そしてボブ・ディランへ

「ミスター・タンバリン・マン」故に捧げる

「己を獣に仕立てる者は、一人前の男になる苦痛をうっちゃる者だ」

――ドクター・ジョンソン

目次

第I部 8
第1章 10
第2章 ビバリーヒルズのぶた女から三百ドル奪取の巻 16
第3章 砂漠で変なおクスリ……自信大揺らぎ 20
第4章 醜悪音楽とショットガン群の音……土曜夜のベガスに不穏な空気 28
第5章 取材……プレス活動をかいま見る……醜悪さと失敗 34
第6章 街での一夜……デザートインでの対決……サーカスサーカスでヤク狂い 40
第7章 偏執狂的恐怖……そしてソドミーの最悪亡霊……ナイフ一閃と緑水 50
第8章 天才的「手に手をとって世界を囲み、一発だれかが気がつくとショックが輪の全体に走る」ラウンド 60
第9章 悪魔を憐れまない歌……記者陣が拷問に？……狂気へ逃亡 66

第10章　ウェスタンユニオン介入：ヒーム氏から警告……スポーツデスクから新任務と警察からの荒々しき招待　72
第11章　Aaaaw, Mama, Can This Really Be The End? … ベガスでどん底脱出、またもアンフェタミン狂乱か？　80
第12章　地獄じみたスピード……カリフォルニア高速警察と悶着……ハイウェイ六一号でマノ・ア・マノ　86
第II部　94
第13章　96
第14章　新たな一日、新たなコンバーチブル……そしてオマワリまみれの新たなホテル　100
第15章　どう猛ルーシー……「野球ボールの歯にゼリー炎の目」　108
第16章　退行連中どもには救いなし……殺人的ジャンキーに関する考察　118
第17章　とっても危険な薬物によるひっどい体験　126
第18章　本腰入れてお仕事……ドラッグ会議開会日　134
第19章　知らなければ、学びにこよう……知っているなら教えにこよう　140
第20章　コーモン女……そしてついに目抜き通り（ストリップ）で本気の公道レース　148
第21章　パラダイス大通りで神経衰弱　158

第22章　空港でしんどい騒動……醜悪なペルーのフラッシュバック……「やめろ！　手遅れだ！　よせ！」 168
第23章　詐欺罪？　窃盗罪？　強姦罪……リネン係のアリスと荒々しきコネクション 176
第24章　サーカスサーカスへ戻る……オランウータンを探して……アメリカンドリームくそくらえ 184
第25章　旅路の果て……ホエールの死……空港で汗みどろ 192
第26章　ベガスにさよなら……「神も憐れむブタどもめ！」 200

第III部　訳者あとがき 204
26・1　時代背景 206
26・2　ハンター・トンプソンについて 207
26・3　いまのラスベガスについて 208
26・4　謝辞その他 208

第Ⅰ部

第1章

砂漠の端っこのバーストウあたりで、クスリが効いてきた。なんか「ちょっと頭がふらついてきた。運転かわってくんない……」とか言ったっけ。そこでいきなり、まわりじゅうにすげー轟音がして、空はでっかいコウモリみたいなのだらけになって、それがびゅんびゅんキイキイ車のまわりを急降下してまわってて、その車はトップを開けてオープンカーにしてラスベガス目指して時速二〇〇キロほどで飛ばしてた。そしてなんか声がわめきちらしてる。「おっとぉぉぉっ！このくそケダモノどもぉなんなんだ！」

そしてまた静かになった。おれの弁護士はシャツを脱いで、胸にビールをかけて日焼けプロセス促進中。「なにぎゃあぎゃあわめいてんだよ」とヤツはつぶやいて、目をラップアラウンド式のスペインサングラスで覆い閉じて太陽を見上げた。「なんでもない。運転、おめーの番だよ」とおれはブレーキを踏んでグレートレッドシャークを高速の路肩に向けた。コウモリの話はするだけ無駄だな。この哀れなごくつぶしにも、すぐに見える。

ほとんど真昼で、まだ先行き二〇〇キロ以上。しかもきつい道のりだろう。もうちょいしたら、二人とも完全にイカレきるのは確実。でも後戻りはできないし、休んでる暇もない。とにかく乗り切らないと。かの有名なミント四〇〇のプレス登録はもう始まってて、防音スイートを確保するには四時までにつかないと。ニューヨークのファッショナブルなスポーツ雑誌が予約の手配はしてくれて、さらにこのでっかい赤いシボレーコンバーチブルもまわしてくれて、それをさっきサンセット大通りの駐車場から借りてきて……それにこのおれはプロのジャーナリストにはちがいなく、だから病気だろうと元気だろうと、この記事を**ちゃんと取材する**義務がある。

スポーツ誌編集者はあと現金でドルくれて、そのほとんどはとっくにむちゃくちゃヤバいクスリに使っちゃってた。車のトランクはまるで移動式警察麻薬研究所もどき。ハッパ二袋、メスカリン七十五錠、強力吸い取り紙ＬＳＤ五枚、塩入れに半分詰まったコカイン、色とりどりの覚醒剤、鎮静剤、絶叫剤、爆笑剤……おまけにテキーラ一びん、ラム一びん、バドワイザー一ケース、生エーテル一パイント、アミル二ダース。

　これはみんな前の晩に、ロサンゼルス郡を狂ったように高速運転してまわってかき集めたもんだ――トパンガからワッツまで、手に入るものはなんでも買った。道中にそれだけ**必要ってわけじゃ**ないけど、いったんマジでクスリを集める気になると、まあふつうはそれをとことんまでやりがち。

　唯一おれが本気で心配してたのがエーテル。エーテルがぶ飲みにはまり切ったヤツほど、絶望的で無責任で悲惨なものってないぜ。しかもじきに自分たちがこのろくでもない代物に手ぇ出すのは見えてた。たぶん次のガソリンスタンドあたり。それ以外のものはほぼ全部、一通り試したし、いまや――そう、いまやエーテルをぐっと吸い込む頃合いだった。そして残り二百キロを、最悪のブツブツだらだらボケボケ状態で走るはめになる。エーテルやりつつ注意力を保つ唯一の手は、アミルをたくさんキメることだ――それもまとめてやるんじゃなくて、ちびちびやること。それでバーストウを時速一五〇キロでとばせるくらいの注意力をかろうじて保つ。

　「いやぁ、これぞ旅行って感じだよな」とおれの弁護士。身を乗り出してラジオのボリュームを挙げて、リズムセクションにあわせてハミングしつつ、歌詞をいわばうめき出す。「One toke over the line, Sweer Jesus… One toke over the line….」

　なーにがtoke（大麻タバコ）だ、このうすらぼけ。さっきのコウモリ見て腰ぬかすなよ。おれにはほとんどラジオが聞こえない……シートの向こう端にだらしなくすわって「悪魔を憐れむ歌」を最大音量でかけたテープレコーダをいじってる。テープはそれしかなかったので、ずっと何度も何度も繰り返しかけっぱなしにして、ラジオのイカレた対照点みたいにしてたのだ。それと、運転のリズムを保つため。一定速度のほうが燃費がいい――そしてなぜだか、それがそのときにはだいじに思えた。まったく。この手の旅行だと、ガソリン消費には本気で注意しないと。急加速なんかして、頭の後ろに血が集まるのは避けんとね。

弁護士は、おれよりずっと先にヒッチハイカーを見つけた。「あいつ、乗せてやろうぜ」と言って、おれが反論する間もあればこそ車を停めて、この山だし小僧が満面にたつきながら車に走ってきて「うわすごいなあ！　コンバーチブルなんか乗るの初めてっす！」だと。

「ほう、そうかいそうかい」とおれ。「じゃあ心の準備はできてる、よな？」

ガキは熱心にうなずいて、われわれ出発。

「ぼくらはきみの友だちだからね」と弁護士。「ほかの連中とはちがうんだよ」

やめてくれよー、こいついっちゃってるよ。「その手の話はやめやめ」とおれはきっぱり言った。「さもないとヒルでもひっつけてやる」やつは理解したらしく、にやつく。運良く、車の中の騒音がすごすぎて——風にラジオにテープだもん——後部シートの小僧には、おれたちの言ってることは一言も聞こえなかった。かな？

いつまで**正気を保てる**かな？　どっちかがこのガキに向かってべらべらべちゃくちゃ始めるまでにどんだけかかる？ここは、マンソンファミリーの最後のホームがあった、まさにその砂漠だ。弁護士が、コウモリだのでっかいエイだのが車に舞い降りてくるとかわめき出したら、こいつはそういう陰気な連想をしてくれるだろうか。そしたら——うん、そしたらこいつのクビをちょん切ってどっかに埋めちゃうしかないな。だって言うまでもなくこいつを野放しにはできない。すぐにもどっかのド田舎ナチ警察にタレこんで、おれたちゃ犬まがいに狩りたてられるのがオチだ。

しまった！　おれ、いまの**口に出してたか？**　それとも考えてただけ？　しゃべってた？　こいつらに聴かれた？　弁護士のほうを眺めると、なにごともなかったかのよう——道を見て、グレートレッドシャークを時速一二〇かそこらでとばしてる。後部シートからは無音。

この小僧とおしゃべりでもしようか。おれがちゃんと説明したら、この子も落ち着くかも。

うん、それがいい。おれはシートにもたれて向き直り、でっかくはでにニッコリしてやった……いい頭蓋骨してんな、と思いつつ。

「ところで、一つわかっといてほしいことがあんのよ」とおれ。

ガキはこっちを見つめて、まばたきもしない。歯をがちがちいわせてる？

「ねえ、**聞こえてる？**　」とおれは怒鳴った。

相手、うなずく。

「結構。というのも、おれたちがアメリカンドリームを求めてラスベガスに向かうところだってのを知ってほしいんよ」にっこし。「それでこの車も借りた。ほかにやりようがない。それはわかってくれるよな？」

相手はまたうなずいたが、目が不安げ。

「事情を一通りわかってほしいわけ。っつーのもこりゃとってもヤバい任務でね——しかも極度の身の危険も伴うし……おっと、このビールのことすっかり忘れてた。一杯飲む？」

相手、クビを横にふる。

「じゃあエーテルは？」

「え？」

「まあいいや。ずばり核心に入るとだね、二十四時間ほど前におれたちはビバリーヒルズ・ホテルのポロ・ラウンジ——もちろんパティオのとこだがね——にいて、ずっとヤシの木の下にすわってるところへ、制服着た小人がピンクの電話を持っておれんとこに来やがって『ずっとお待ちかねの電話だと思いますが』だと」

おれは笑ってビール缶をむしり開けると、そいつが吹き出して後部座席中を泡だらけにして、その間もおれはしゃべり続けた。「そんでどうしたかってぇと、そいつの言うとおりでさ、確かにおれ、その電話を**待ってたんだけど**、それがだれからかかってくるかは知らなかったわけ。おい、言ってることわかる？」

ガキのツラは純粋恐怖と当惑のお面と化してる。

おれはしゃべり続けた。「わかってほしいんだけど、このハンドル握ってる野郎は**おれの弁護士なんだぜ！**　通りで拾ったどっかのごくつぶしじゃねーの。おい、こいつを見てやれって！　おれやおまえとは見てくれちがってるだろ？それはこいつがガイジンだから。たぶんサモア人かなんかだと思うけど。でもそんなのどうでもいい、だろ？　おまえ、人種偏見ある？」

「いえそんなまさか」と相手はなんとか口に出す。

「そうだろそうだろ。というのも、こんな人種なのにこいつはおれにとって、とても価値があるのだ」弁護士のほうを見たけど、心ここにあらずって感じ。

げんこつで、運転席の背中を叩いてやった。「バカ野郎、**これってだいじなんだよぅ！　これはほんとうの話なんだから！**」車はいかれた調子で大蛇行して、直進に戻った。「首にさわんじゃねえ、このうすらバカ！」と弁護士がわめく。後ろのガキは、死んでもかまわないからいますぐ車から飛び降りかねない感じ。

雰囲気が険悪になってきてる――でもどうして？　おれは混乱していらだってた。車内のコミュニケーションはどうした！　おれたち、**バカな動物並の水準**に退行しちゃったの？

だって、おれの話はホントにほんとうなのだ。それは確信があった。そして、おれたちの旅の意味を文句なくはっきりさせとくのは、とってもだいじに思えたんだ。おれたちはほんとうにポロ・ラウンジにすわってた――何時間も――シンガポールスリングを飲んで、サイドにメスカルそしてビールをチェイサーにして。そして電話がきたときには、準備万端。

思い起こせば、チビ野郎はこっちのテーブルにこわごわ近寄ってきて、ピンク電話を受け取ったおれは無言で、ひたすら聴くだけ。そして電話をきって弁護士に向き直った。「本部から。すぐにラスベガスにいって、ラセルダっていうポルトガル人カメラマンと会えとさ。細かいことはそいつが知ってる。スイートにチェックインすれば、向こうから見つけてくれると」

弁護士はしばらく無言で、そして急に椅子の中で元気になった。「そりゃ**たいへんだ！**　もぅ**パターン読めちゃったね。**まったくとんでもないトラブルみたいじゃん！」そしてカーキのアンダーシャツを白レーヨンベルボトムに押し込むと、ドリンクの追加を注文。「こいつをこなすには、かなり法律上のアドバイスが要る。でもって最初のアドバイス。トップなしのすごく速い車を借りて、最低四十八時間はとにかくロサンゼルスを離れること」と弁護士は悲しげに首を振る。「これで週末がパァだな。だってもちろんおれも行かざるを得ないし――そのための準備も要る」

「いいんじゃない？」とおれ。「この手のことは、やるならきっちりやろうぜ。まともな装備と、手持ち現金たっぷりと――どうせ買うのはクスリと、長期記録用超高感度テープレコーダくらいかもしんないけど」

「これってどんな記事？」と弁護士。
「ミント四〇〇。組織スポーツ史上でいっちゃん金のかかったオフロードバイク＆デューンバギーレース――デル・ウェッブとかいうどっかの**ぶくぶく肥満成金**を記念したすんげえスペクタクル。こいつはラスベガスのダウンタウンどまんなかにある、豪華なミントホテルを持ってるんだと……少なくともプレスリリースにはそうある。ニューヨークの相棒がいま読み上げてくれたのよ」
「ふん、弁護士としての助言は、バイクを買えってこと。さもなきゃそんなイベントをきっちり取材できるわけないじゃん」
「いやまったく」とおれ。「どっかでヴィンセント・ブラック・シャドー手に入んない？」
「なにそれ」
「すっげえバイク。最新モデルはなんか三三、〇〇〇　エンジンで二〇〇ブレーキ馬力を四〇〇〇回転でたたき出して、マグネシウムフレームにスタイロフォームシート二つで制止重量九〇キロちょっきり」
「この仕事にはぴったりな感じではないの」とかれ。
「まーかして」とおれも肯定した。「こいつ、コーナリングは大したことないけど、直線だと邪悪きわまる代物。離陸前のF―一一一でもぶっちぎれる」
「離陸前？　そんなすさまじいトルク、扱いきれんの？」
「まかせなさーい」とおれ。「んじゃニューヨークに電話して現金調達するわ」

第2章　ビバリーヒルズのぶた女から三百ドル奪取の巻

ニューヨーク事務所はヴィンセント・ブラック・シャドウをご存知ない。それでロサンゼルス事務所にまわしてくれた——これは実はビバリーヒルズにあって、ポロラウンジから長めの数ブロックいったとこだ——でも出向いてみると、銭ゲバ女は現金で三〇〇ドル以上は差し上げられませんとぬかしやがる。そもそもあなたが何者かもまるでわかりませんし、だと。そのころにはおれは汗ダラダラ。おれの血はカリフォルニアには濃すぎる。この気候だと、まともに言いたいことが言えたためしがない。こんな汗じっとりじゃね……それに血走った赤目にふるえる手じゃ。

それで三〇〇ドル受け取ってそこを後にした。弁護士は角のバーで待ってた。「こんなんじゃ話になんねぇよ。引き出し限度無制限にでもなってなきゃ」

おれは、もちろんそうだと安心させてやった。「きさまらサモア人ったら、どいつもこいつも。白人文化の本質的な仁義ってもんをからきし信用してない。まぁったく、ほんの一時間前のおれたちゃあの腐った仕切り席にすわって、無一文で週末も打つ手なしだったのが、どっかニューヨークのぜんぜん知らないやつから電話がかかってきて、ラスベガスにいって経費のことなんざ忘れろって言う——それでそいつに言われてどっかビバリーヒルズのオフィスに行くと、これまたまるで知らんヤツが、なんの理由もなしに現ナマ三〇〇ドルくれる……わかってんのかよ、おい、これぞまさにアメリカンドリームの正夢版だろうが！　この変なミサイルに乗ってとことん最後までいかないなんて、バカとしか言いようがない」

「いやまったく」とかれ。「**やるっきゃないね**」

「御意。でも、まず車がいる。それから、コカイン。で、特別な音楽用にテープレコーダ、それにアカプルコシャツ」

こんな旅に備える唯一の方法は、人間版クジャクみたいな格好して頭おかしくして、タイヤきしらせて砂漠越えして、**記事を書く**ってことだ。第一の責任は決して忘れちゃいけない。

でも、記事ってなんの記事だ？　だれもわざわざ説明してくれなかった。ということは、自分ででっちあげなきゃってことだ。自由企業。アメリカンドリーム。ホレーショ・アルジャーがラスベガスにてヤクで発狂。**いますぐやれ。**純粋ゴンゾージャーナリズム。

それとあと、社会心理要因ってのもある。あれやこれやするうちに、だんだん人生ややこしくなってきて、ハイエナどもに包囲をかためられてくると、唯一真の治療法ってのは怪しげな薬物をしこたまキメて、ろくでなしまがいにハリウッドからラスベガスまで車をとばすことだ。いわば砂漠の太陽という子宮で**リラックス**って感じ。ルーフを畳んでねじこんで、顔に白い日焼けバター塗りたくり、音楽フルボリュームで出発、ついでにエーテル最低１パイント。

クスリ確保は簡単だったが、車とテープレコーダをハリウッドで午後6:30に手に入れるのは、なかなか骨だった。おれの車が一台あるにはあったけど、砂漠向けにはまるで小さすぎて遅すぎる。ポリネシアバーにでかけて、そこで弁護士が電話を十七本もかけまくったあげくに、やっとまともな馬力とカラーのコンバーチブルを見つけた。「それ押さえといて」とやつが電話で言ってるのがきこえた。「三十分で取引しに行くから」そして一瞬の間があって、ヤツは電話口に向かって怒鳴り散らした。「なんだと？　もちろんその方は大手クレジットカードをお持ちに**決まってるだろが！**　きさま、だれに口きいてると思ってやがる！」「ああいうブタどもに、なめた口きかせてんじゃねえよ」電話をたたきつけた弁護士におれは言ってやった。「さて、こんどは最高の機材を置いてる立派な店がいる。シケたのはダメだ。最新の音声始動式ショットガンマイクつきベルギー製ヘリオワットじゃないと、向かってくる車の会話は拾えないだろ」

またもや何本か電話して、やっと八キロほど離れた店でおれたちの機材を発見。閉店してたけど、店員は急ぐんなら待っててくれるとのこと。でもサンセット大通りでおれたちの前のコルベット・スティングレイが歩行者をひき殺して、それで遅れた。着いた頃には店は閉店済み。中にまだ人はいたけど、でも二重ガラス戸のとこまできやしなかったので、

ベルトで何発かしばいて言い分をはっきり伝えてやった。
やっと店員が二人、タイヤレンチを抱えてドアのとこまでやってきて、なんとかせまい隙間ごしに商談。そいつら、ほんのちょっとだけドアをあけて機材をやっとこさ押し出すと、すぐにバタンと閉じて施錠しやがった。「そのブツ持ってさっさと消えちまえ」と一人が隙間越しにぬかす。
わが弁護士がそいつらにげんこつを振り上げた。「またくるからな。いつかここに、本気の爆弾ぶちこんでやらぁ！　このレシートでおまえの名前もちゃあんとわかる！　住処をつきとめて、焼き討ちにしてやるからな！」
「ふん、これで思案のひとつもしようってもんだ」と車で遠ざかりながら、弁護士はつぶやいた。「どのみちあいつ、パラノイア性ガイキチだし。すぐわかる」
レンタカー会社でも、またもや、もめごと。書類に一通りサインを終えて、車に乗り込んだんだけど、駐車場をバックで横切って給油所までいくときにちょっと制御不能になった。レンタカー屋は目に見えて動揺してる。
「おいおい……いや……あんたら、少しは**気ぃつけて**この車扱ってくれるんだろうね、え？」
「もちろん」
「じゃあいまの何？　五十センチの段差二段をバックで越えたのに、徐行もしない！　バックで七〇キロ出す！　しかもほとんどガソリンポンプに衝突しかけて！」
「なんともなかっただろが」とオレ。「オレ流のトランスミッションのテストだよ。**ケツから。**荷重ねらいでな」
一方でわが弁護士は、ピントからコンバーチブルの後部シートにラムと氷を積み替えるので忙しい。レンタル男は不安そうにそれをながめる。
「ねえ、あんたらまさか**飲んでない？**　」
「おれはだいじょうぶ」とおれ。
「いいからさっさと満タンにしてよ」弁護士がぴしゃりと言い放った。「すっげえ急ぎなんだから。砂漠レースでラスベガスに行くとこなんよ」
「え？」

「気にしない、気にしない。おれたち責任ある大人だよ」とおれは、そいつがガソリンタンクのキャップをするのを見てから、ローギヤにつっこんで、よたよたと公道に出ていった。

「またまた心配性のやつか。どうせ覚醒剤（スピード）やりすぎでカリカリしちゃってんのよ」と弁護士。

「うん、レッド（アンフェタミン）でも分けてやればよかったのに」

「あんなブタにはレッドなんか効きゃしないって。それどころじゃないだろう。出発前に片づけなきゃならんことがいろいろある」

「神父の衣装を手に入れたいな。ラスベガスで使いでがあるかも」とおれ

でも衣装屋はどこも開いてなかったし、教会強盗をする気もなかった。「別にいらないだろうが」とおれの弁護士。「それと、ポリ公どもは善良でおっかないカソリック教徒だらけだってのを忘れるなよ。ヤク漬け飲んだくれでつかまって、おまけに盗んだ聖衣を着こんでたら、どんな目にあわされることか。まったく、去勢されちまうぞ！」「おっしゃる通り。それと、たのむから赤信号でそのパイプを吸うのはやめてくれ。さらしもの状態なんだから、忘れるなよ」

弁護士はうなずいた。「でっかい水パイプがいるな。そいつをシートに置いて、見えないようにしとこう。そうすればだれかに見られても、酸素吸入してると思うだけだ」

その夜はずっと、装備を集めて車に詰め込み続けた。それからメスカリンを喰って、海に泳ぎにいった。夜明けあたりに、マリブのコーヒーショップで朝飯を食べ、それから慎重に街を横切って、スモッグでかすんだパサディナ・フリーウェイに飛び乗ると、一路東へ。

第3章　砂漠で変なおクスリ……自信大揺らぎ

　わがヒッチハイカーの「コンバーチブルなんかに乗るの初めてっす」という言いぐさに、おれはまだちょっとひっかかるものがあった。この哀れなエテ公め、ハイウェイでコンバーチブルがいつもびゅんびゅん目の前を通ってる世界に住んでながら、**乗るの初めて**、だと。もう気分はファルーク王。思わず、弁護士に言って最寄りの空港に車をつけさせて、なんか簡単な慣習法っぽい契約書を手配して、この哀れなろくでなしにこの車をあげちゃいたいなんて思ったほど。一言「ほれ、こいつにサインしな、そしたら車はおまえさんのもんだ」で、キーを渡してクレジットカードを使って、ジェット機でビューンとマイアミかどっかに飛んでって、そこでまた炎上リンゴ赤のでっかいコンパーチブルを借りて、ヤクまみれ最高速でキーウェストのどん詰まりまで疾走……それから車を船に替える。ずっと動き続ける。

　でもこの妄想思考はすぐに去った。この人畜無害なガキがぶちこまれても、何の役にもたたない——それとさらに、おれだってこの車に予定が入ってるのだ。このポンコツをラスベガスでひけらかして回るのが楽しみ。大通りでマジのドラッグレースもちょぃとできるかな。フラミンゴの前の、あのでっかい信号で停まって、そこの車どもめがけてわめきちらす:

「よぉしこのションベンちびりのカスども！　タマなしおかまども！　あのまぬけな信号がパッと青になったらなぁ、おれぁこいつを思いっきし踏み込んで、てめーら根性なしどもを一人残らず道から吹っ飛ばしてやる！」

　おうよ。クソ野郎どもに向こうの土俵で挑戦だ。クロスウォークにタイヤをきしらせて、片手にラムのボトルを持ってクラクション鳴らしっぱなしで音楽をかき消しつつ横滑り……族っぽいちっちゃな黒の金縁グラサンの奥で、ガラス

玉みたいな目を狂ったようにぎょろつかせ、わけわからんことをわめきちらす……エーテルと精神分裂末期症状をぷんぷんさせた、本気でアブナイ飲んだくれ。エンジンをすさまじく甲高いガシャガシャの悲鳴にまで回転させて、信号が変わるの待ってる……

そんな機会、そうそうあるもんじゃないぜ。クソ野郎どもを脾臓の芯まで挽きつぶしてやる機会。老いたゾウは、山のほうにヨタヨタ向かって死にに行く。老いたアメリカ人はハイウェイにでかけて、でかい車で死ぬまで運転。

でも、おれたちの旅はちがってた。これはわが国の性質における正しく真でまっとうなものすべてに対する古典的な肯定なの。この国の人生におけるすばらしい可能性に対する、壮大な肉体的表敬——もっとも可能性とはいっても、本物の根性あるヤツだけにしか与えられないんだけど。でも、根性ならおれたち、目一杯詰まってるもんね。

おれの弁護士も、その人種的なハンデにもかかわらずこのコンセプトを理解していたけれど、われらがヒッチハイカーはなかなか物わかりの悪い子だった。わかる、と口では言うんだけれど、でもわかってないと顔に書いてある。このおれにウソついてやがる。

車はいきなり道をはずれて、われわれは砂利で横滑りしつつ停まった。おれはダッシュボードに叩きつけられた。弁護士はハンドルの上に突っ伏している。「どうしたってんだ！」とおれは怒鳴った。「**こんなとこで**停まるんじゃねえ！ ここはコウモリ地帯だぞ！」

弁護士はうめいた。「心臓が……クスリをくれ」

「ああ、クスリね。うん、ここにある」とおれは救急袋に手を突っ込んでアミルを探した。ガキは顔面蒼白。おれは言ってやった。「心配すんなって。こいつは心臓が悪いんだ——アンジナ・ペクトリス。でもここに特効薬がある。ああ、これこれ」おれはブリキの箱からアミル四錠選び出して、二つを弁護士にわたした。かれはすぐに、一つ鼻の下で粉々にして、おれもそれに倣った。

かれはながーく吸い込むと、シートにもたれかかって、まっすぐ太陽を見上げた。「バカ野郎、音楽のボリューム上げろ！　心臓がワニみたいな気分！」と絶叫。

「ボリューム！　明瞭度！　ベース！　ベース必須！」かれはむきだしの腕を空に向かって振り回す。「おれたち、どうかしちゃってんじゃねーの？　**婆さんじゃ**あるまいし！」

おれはラジオとテープの機械を両方ともフルボリュームに上げた。「このあさましいイカサマ弁護士のクソ野郎め、口に気をつけろよ。相手のこのオレは、仮にもジャーナリズム博士だかんな！」

やつは、笑いがとまんないらしい。「まったくおれたち、こんな砂漠の中なんかで、なにやっちゃってんのよ！」と叫ぶ。「おまわりさーん、たすけてー！」

「このブタは無視してくれな」とおれはヒッチハイカーに言った。「こいつにはクスリが扱いきれねーの。実はおれたち、二人ともジャーナリズム博士で、ラスベガスに行って我らが世代のトップ記事を書きにいくんだ」そしておれも笑い出した……

弁護士は背を丸めて、ヒッチハイカーに向き直る。「ホントのこと言うとな、おれたちゃベガスでヤクの帝王を締め上げにいくんよ。名前はサヴェッジ・ヘンリー。もう何年も知り合いだがね、おれたちをボリやがった――それがどういうことかわかるよな、え？」

黙らせたかったけど、二人とも笑っちゃってどうしようもなかった。確かにおれたち、こんな砂漠で**何してるんだろう**、二人とも心臓が悪いってのに！

「サヴェッジ・ヘンリーめ、小切手を現金化しやがった！」と弁護士は、バックシートのガキに歯をむきだしてみせた。「あの野郎、肺をひきむしってやる！」

「それでそいつを喰ってやる！」とおれ。「あの畜生め、こんなまねして逃げおおせると思うなよ！　チンカス野郎がジャーナリズム博士をボコにしといて、それで逃げおおせるなんて、この国はどうかしちゃってるよな！」

だれも返事をしなかった。弁護士はアミルをもう一錠砕いていて、ガキはバックシートをよじのぼって、トランクのふたを駆け下りて逃げ出していた。「乗せてくれて**どうも。**ほんとどうも。知り合えて**光栄っす。ぼくのことは**ご心配なく」その足がアスファルトについた瞬間に、ベーカーのほうへ駆け出していった。この砂漠のど真ん中で、見渡す限り木の一本もない。

おれは怒鳴った。「おい待てよ。戻ってこいや、ビールやろう」でもどうやら聞こえなかったらしい。音楽が大音量だったし、ガキもかなりのスピードで遠ざかってたから。

弁護士いわく「いいやっかいばらいだ。まったくエラいイカレポンチをしょいこんじまったもんよ。あのガキにはホントに不安にさせられたよ。**あいつの目を**見たか？」まだ笑ってやがる。「まったく、こりゃ実にいいクスリだなあ！」

おれはドアを開けてぐるっとまわり、運転席のほうに行った。「ずれろよ。おれが運転する。あのガキがオマワリ見つける前にカリフォルニアを出ないと」

「なんで、そんなの何時間も先だよ。どこに出るにも何百キロはあるんだから」と弁護士。

「おれたちもな」とおれ。

「Uターンしてポロラウンジに戻ろうぜ。あそこならだれも探そうとは思うめぇよ」

完全無視。「テキーラ開けろ！」風切り音がまた高まるとともに、おれは叫んだ。高速にダッシュで戻りつつ、アクセルを床まで踏んづける。数瞬のうちに、やつは地図をもってこっちに身を乗り出す。「このさきにメスカル温泉ってとこがある。きみの弁護士としての助言だが、ここに寄って一泳ぎしたほうがいい」

おれは首を横にふった。「プレス登録の締め切りまでにミントホテルにつくのは、絶対に必須なの。さもないと、スイート代は自腹だぞ」

弁護士はうなづいた。「でも、そのアメリカンドリームとかいうヨタ話は忘れちまおう。**ホントに大事なのは**、大サモアン・ドリームよ」かれは救急袋の中を漁っている。「そろそろＬＳＤ吸い取り紙を食べようぜ。あの安手のメスカリンはずいぶん前に切れたし、これ以上あのくそエーテルの匂いはもう我慢できないよ」

「**おれは**好きだな。タオルにエーテルをしみこませて、アクセルの横のフロアに置いといて、ラスベガスまでずっと蒸気が顔にたちのぼってくるようにしよう」

やつはカセットを裏返していた。ラジオは大絶叫：「Power to the people—Right On!」ジョン・レノンの政治的な歌だが、十年遅すぎ。「あの哀れなバカ、もといたとこでじっとしてりゃよかったんだよ」と弁護士。「ああいうろくでな

しは、マジになろうとすっと、足手まといになるばっかなんだ」
「マジと言えば」とおれ。「そろそろエーテルとコカインに手をつける頃合いだぜ」
「エーテルはほっとけ。とっといて、スイートのじゅうたんにしみこませよう。でもここに取り出しましたるは。サンシャイン吸い取り紙のおまえの半分。野球ガムみたいに一挙に噛んじゃいな」
おれは吸い取り紙を受け取って食べた。弁護士はいまや、コカイン入りの塩ふりと格闘している。ふたを開けてる。こぼしてる。そして、われらが上等の白い粉が吹き上げられて、砂漠の高速にばらまかれるのを、わめきながら宙をつかもうとする。グレート・レッド・シャークから、えらく高価な小竜巻が巻き起こった。「ああ**神さま！**　神さまがたったいま、何しやがったか見たかよ！」
「神さまじゃねーだろが！」おれは怒鳴った。「**おまえだよ！**　きさま、実は麻薬捜査官だろう！　てめーの大根芝居はハナからお見通しよぉ、このブタ野郎！」
「気ぃつけろよ」と弁護士。そしていきなり、ヤツは太った〇・三五七口径マグナムをおれにつきつけやがった。スナブノーズのコルト・パイソンで、シリンダーにベヴェルのついたやつ。「ここらはハゲタカも多いんだぜ。夜明け前にはきれーに骨だけになるぞ」
「この売女めが」とおれ。「ラスベガスに着いたら、きさまをミンチにしてハンバーグにしちゃる。おれがサモア人ヤク捜査官なんかといっしょにツラ出したら、ドラッグ・ブントがだまっちゃいねーぞ」
「二人とも殺されるだろうな。サヴェッジ・ヘンリーはおれがだれだか知ってる。ふん、おれは**テメーの弁護士なんだよ**」そして弁護士はバカ笑いを始めた。「バーカ、早速ＬＳＤ漬けになりやがって。貴様がケダモノになる前にホテルについてチェックインできたら、まったく奇跡だよ。おまえ、用意できてんの？　現金詐欺の意図と、ＬＳＤまみれの頭をして、偽名でヴェガスのホテルにチェックインするんだぞ」ヤツはまた笑っていて、それから鼻を塩振りにつっこみ、二十ドル札でつくった細い緑の巻紙を、残った粉にまっすぐつっこんだ。
「残り時間はどのくらい？」とオレ。
「あと三十分かそこらってとこ」とヤツは応えた。「弁護士としての助言だが、全速力で飛ばすように」

ラスベガスは目と鼻の先だった。大通り／ホテルのスカイラインが、青い砂漠の地上もやの中からそびえたっているのが見える。サハラホテル、ランドマーク、アメリカーナ、そして不気味なサンダーバード――灰色の長方形の集団が、サボテンの間から彼方に顔を出している。

三十分。ギリギリってとこ。目標はダウンタウンのミントホテルの大タワー――そしてヤクがまわりきってどうしようもなくなる前にそこにつけなかったら、その先は州北部のカーソン・シティはネバダ州刑務所。一度いったことがあって、それも囚人たちと話すためだけだった――そして二度と行きたいとは思わない、どんな理由であっても。だからもう選択の余地はないのだ。ガントレットを走り抜けて、ＬＳＤはクソくらえ。公式のご託を一通りこなし、車をホテルのガレージに入れて、フロントをだまくらかし、ボーイとやりあって、プレス証を登録――どれも大風呂敷の、まったく非合法、もろに詐欺だけれど、もちろんやるしかない。

「身体を殺せば頭も死ぬ」

この一行がおれのノートに書いてある、どういうわけか。ジョー・フレーザーがらみの話かな。あいつ、生きてるんだっけ。まだ口がきけたっけ。シアトルでの試合を見た――知事から四列目のところで、どうしようもなくよじれつつ。あらゆる意味で非常に痛々しい体験で、六〇年代を終えるにふさわしい感じ。ティム・リアリーはアルジェリアでエルドリッジ・クリーヴァーの囚人、ボブ・ディランはグリニッジ・ビレッジで生活保護のクーポン切り、ケネディは二人ともミュータントに殺され、オウスリーはターミナル島でナプキン畳み、そしてついにカシアス／アリが驚くべきことに、死に損ないの人間ハンバーガーみたいなやつに玉座から引きずりおろされる。ジョー・フレーザーは、ニクソンみたいに、おれみたいな連中が絶対に理解したくない――すくなくとも公然とは――理由によってついに勝利しやがった。

……が、それはまた別の時代の話、この我らが主の生誕一九七一年目という腐った年の、荒っぽい現実からは遙か彼方で燃え尽きだ時代のこと。あの頃にはいろんなものが変わっちまった。そしていまやおれは、なんかご立派でバシッ

としたモータースポーツ雑誌に、だれもわかっているふりすらしやがらねえ理由で、そこの編集者としてグレートレッドシャークに乗せて送り出されてラスベガスくんだりにいる。「いいから見てきてよ。そっから先はこっちがやるから」だと……

　まったく。見てこいだと。でも、やっとミントホテルにたどりつくと、弁護士は登録手続きを優雅にかわせない状態になってやがった。だからほかのみんなみたいに、行列しなきゃならない――そしてこれは、この状況では非常に困難であった。おれは自分に言い聞かせ続けた：「静かに、落ち着け、なにも言うな……話しかけられたときにだけ口を開け。名前、身分と所属メディア、それだけ、このひっでえヤクは無視しろ、こんなの起きてないふりしてろ……」

　受付までたどりついて、わめきだしたときのおれの恐怖は、説明しようったってできるもんじゃない。この女の石みたいな視線ににらまれて、何度もリハーサルしておいたせりふが総崩れ。「やあやあ。わたしの名前は……えーと、ラウール・デュークだ……そう、**リストに載ってる**、もうまちがいなく。ランチつき、最終英知、完全カバー……だろうが？　弁護士がいっしょにきていて、たしかにもちろん**こいつの名前は**リストにないかもしんないけど、でも**どうしても**あのスイートでないと、うん、いやこの男、実はわたしの**運転手**なのよ。大通りからずっとレッドシャークに乗ってきて、やっと砂漠にでかける時間ってね。うん。とにかくリストをチェックしてもらえばわかる。ご心配なく。どういう話になってるわけ？　次はなに？」

　女はまばたきすらしなかった。「お部屋の用意はまだできていません。でも、あなたを探している人がいますよ」

　おれは叫んだ。「まさか！　なぜ？　まだ何も**やっちゃいないのに！**」脚がガクガクしてきた。デスクをつかんで、彼女が差し出す封筒の方へ身をかがめたけれど、受け取るのは拒否。女の顔が**変わりだした**。ふくらみ、脈打ち……恐るべき緑の顎から牙がつきだして、ウツボの顔に！　おれはとびのいて弁護士にぶつかり、すると弁護士がおれの腕をつかまえつつ、身を乗り出してメッセージを受け取った。「ここは任せて」と弁護士はウツボ女に言った。「この人は心臓が悪くてね、でもわたしがたくさんクスリを持ってるんだ。わたしはドクター・ゴンゾー。すぐにスイートの用意を。われわれはバーにいるから」

　弁護士におれがつれさられるのを見て、女は肩をすくめた。岩盤旧キチガイまみれのこの街じゃ、ＬＳＤの幻覚野郎

なんざ**気がついても**いただけない。混雑したロビーをぬけて、おれたちはバーで空いたスツールを二つ見つけた。弁護士は、キューバリーブル二つにビールと、サイドでメスカルを注文して、それから封筒を開けた。「ラセルダってだれ？　十二階の部屋で待ってるそうだけど」

思い出せなかった。ラセルダ？　聞き覚えのある名前だったけど、でも集中できない。まわりじゅうが、すさまじいことだらけになってた。すぐ隣では、でっかいは虫類が女の首をカジカジしてて、じゅうたんは血まみれスポンジ──足がかりがなくて、こんなところじゃ歩けない。「ゴルフシューズを頼めよ。さもないと、生きてこっから出られないぜ。このトカゲどもは、こんな泥沼の中でも楽々動いてるだろう。こいつら、足に**ツメがあるから**だぜ」

「トカゲ、だと？」と弁護士。「こんなの、エレベータの中に比べたらチョロいもんだよ」とブラジルサングラスをはずすと、かれが泣いていたのがわかる。「上にいって、このラセルダってやつに会ってきたんだよ。たくらみはお見通しだって言ってやったぜ。カメラマンだとか**自称しやがってたけど**、でもおれがサヴェッジ・ヘンリーの名前を口にしたら──それで決まり。とびあがりやんの。目ぇみりゃわかるぜ。おれたちに追われてるのを知ってるな」

「こっちにマグナムがあるのは知ってたか？」

「いいや。でも、ヴィンセント・ブラック・シャドーを持ってるとは言っといた。あれで完全にビビってた」

「よしよし。でも、おれたちの部屋は？　それにゴルフシューズは？　ここはろくでもないは虫類園のどまんなかだぜ！　しかもどっかのバカが、トカゲどもに**酒なんか**飲ませてる！　まもなくおれたち、完全に食いちぎられるぞ。なんてこったい、床を見ろや！　こんな大量の血を見たことがあるか？　**もう何人**殺られたんだ？」おれは部屋の向こうでこっちを見ているような連中を指さした。「しまった、あそこの群を見てみろ！　気がつかれたみたいだぞ！」

「あれはプレスのテーブル」と弁護士。「プレス証をもらうにはあそこで登録すんの。まったく、さっさと済ませようぜ。あっちはおまえに任せた。おれは部屋をなんとかするから」

第4章　醜悪音楽とショットガン群の音……土曜夜のベガスに不穏な空気

やっと日暮れあたりにスイートに入ると、弁護士はすぐに電話に飛びついてルームサービスーークラブサンドイッチ四つ、シュリンプカクテル四つ、ラム一本にグレープフルーツ九個。「ビタミンCだよ。めいっぱい要る」というのがやつの説明。

おれも賛成だった。この頃だと、酒がＬＳＤを薄めて、幻覚もなんとか我慢できるところに落ち着いてた。ルームサービスのボーイは、なんとなくは虫類っぽい様子もあったけれど、でもうでっかい翼手竜が鮮血の血だまりの中をうろうろしていたりするのは見えなくなってた。目下の唯一の問題は、窓の外のでっかいネオンサインで、それが山のながめをじゃましてるーー何億の色つきボールがすっごく複雑な道筋で貼りし回り、変なシンボルと金銀細工、でっかいうなりをあげて……

「外を見ろ」とおれ。

「なんで？」

「なんかでっかい……機械が宙に浮いてる……なんか電気ヘビみたいな……まっすぐこっちに向かってるぞ」

「撃ち殺しちゃえよ」と弁護士。

「まだだ。まず習性を観察してから」

弁護士は部屋の隅にいって、チェーンをひっぱってカーテンを閉じた。「なあおい、そういうヘビだのヒルだのトカゲ

だのとかなんとか、そういう話はやめてくれよ。もううんざりだよ」

「だいじょうぶ」

「**だいじょうぶ、だとぉ?**　おまえな、おれはもう下のバーで発狂しそうだったぞ。もう二度とあそこには入れてもらえないぜ——おまえがプレステーブルであんな騒動起こすから」

「騒動って？」

「このうすらバカ。おれがたった三分目を離しただけだで！　あいつら死ぬほどおびえてたぞ！　あんなマーリンスパイクなんかふりまわして、は虫類がどうしたとかわめき散らして。おれがあの時戻ってきてラッキーだよ。もうちょっとで警察沙汰だぜ。酔ってるだけだから、連れてって部屋で冷たいシャワーを浴びさせると言って連れ出したんだぞ。まったく、連中がプレス証をくれたのも、おまえにさっさと出てってほしかったからってだけだぞ」

かれはいらだたしそうに歩き回った。「ちくしょう、あの騒ぎで完全にしらふに戻っちゃったじゃないか！　**クスリだクスリだ！**　おまえ、メスカリンはどこやった？」

「救急袋」とおれ。

おれがテープの機械をセットする間に、かれは袋を開けて二錠食べた。「**おまえもこいつ**、食べたほうがいいんじゃねーの？　まだＬＳＤがきいてんだろ」

おれも同意した。「暗くなる前にレース場に出とかないと。でも、テレビのニュースくらいは見る余裕がある。このグレープフルーツ切り刻んで、すてきなラムパンチを作って、ＬＳＤでもぶちこもうか……車は？」

「駐車場のだれかに渡したけど。チケットはブリーフケースの中だ」

「番号は？　電話して、あのオンボロを洗わせて、ほこりや泥を始末させようぜ」

「名案だ」とかれ。でも、チケットを見つけられないときた。

「ばーか、どうすんだよ。向こうは証拠なしには絶対に車を渡さねーぞ」

弁護士は一瞬考えてから、電話をとってガレージにつながせた。「八五〇号室のドクター・ゴンゾーだがね、そっちに残した赤いコンバーチブルの駐車券をなくしたようなんだよ。でも、三十分で洗車して、出かけられるようにしといて

もらえる？　それとかわりの駐車券を持ってきてくれるかな。……なに？……うんうん？……いや、それで結構」と電話を切って、ハッシシパイプに手を伸ばした。「だーいじょうぶ。おれの顔を覚えててくれた」

「そりゃ結構だね。たぶんこっちが出向いたときには、でっかい網を用意して待ちかまえてるぜ」

弁護士は首をふった。「弁護士としての忠告だがね、**おれの**心配ならご無用」

テレビのニュースはラオス侵攻についてだった——恐ろしい惨事の連続。爆発に、よじれた廃墟、恐怖に逃げまどう人々、発狂したウソを並べたてるペンタゴンの将軍たち。「そのクズをさっさと消せ！」と弁護士がわめきたてた。「さっさと**出かけようぜ！**」

賢明な動き。車をうけとってものの数秒で、弁護士はクスリ昏睡に陥って、おれが止める間もあればこそ、メイン通りで赤信号を突破してくれた。おれはヤツを助手席に押し込めると、自分でハンドルを握った……気分上々、きわめてシャープ。まわりの車では見渡す限りみんなしゃべっていて、何を話しているのか聴きたかった。すべての会話を。でもショットガンマイクはトランクの中で、おれとしてはそこに残しておくことに決定。ラスベガスは、メイン通りを運転してるときに、みんなに黒いバズーカ砲みたいな代物を向けたいところじゃないのだ。

ラジオのボリュームをあげる。テープを上げる。正面の夕日を見つめる。窓を下げて、冷たい砂漠の風をもっと味わう。ああ、これこれ。すべてはこのためにある。万事快調。ラスベガスの目抜き通りを土曜の晩に流してる、炎リンゴ赤のコンバーチブルに乗った野郎二人……ヤク漬け、ボロボロ、いかれてて……いいやつらだぜ。

神さま！　この最低の音楽ぁなんだ？

「カリー軍曹の戦闘 Hymn」

「……われら行進しつつ……

太陽の彼方の国で、最後のキャンプ場に着くと

大司令官がおれにきく……」

（なんてきいたの、ラスティ？）

「……戦ったのかね、逃げたかね？」
（そしてなんて答えたの、ラスティ？）
「……われら敵のライフル砲火に、全力あげて反撃……」

やめてくれ！　こんなもの聞こえるはずがない！　クスリのせいだ。おれは弁護士の方をにらみつけたが、やつは空を見上げたままで、脳味噌が太陽の彼方のキャンプ場にお出かけしてるのが見て取れた。あいつにこの曲が聞こえなくてよかったぜ、とおれは思った。人種差別の狂乱状態に陥っただろうからな。
ありがたいことに、曲は終わってくれた。でもおれの気分はとっくに台無し……そしていまや、あのガイキチじみたサボテンジュースが効いてきて、人間以下のファンクにたたき込まれたとこで、いきなりミント・ガンクラブへの曲がり角にきた。「この先一マイル」と標識にはある。でも一マイル離れていても、２ストのバイクエンジンをふかす音、甲高い絶叫が聞こえる……そしてもっと近づいたところで、別の音が聞こえてきた。
ショットガン！　あの平板でがらんどうの爆音はまちがいない。
車をとめた。いったいこの先はどうなっちゃってんの？　窓を全部上げて、ハンドルに身を伏せたまま、ゆっくりと砂利道を前進した……そこで十人ほどが空にショットガンを向けて、定期的にぶっぱなしている。
こんなメスキートの茂る砂漠のコンクリートスラブに立って、ベガス北の高地の貧弱なオアシスで……そいつらは、ショットガンを持って寄り集まり、一層建てのコンクリートブロック造の家から五十メートルほど離れたところにいる。その家は、十本だか十二本だかの木に半分隠れて、パトカーやバイクのトレーラーやバイクに囲まれてる。
ああそうか、もちろん。ミント・**ガンクラブだもんな！**　このキチガイどもは、**なにがあろうと**射撃訓練のじゃまはさせない気だ。バイカー、メカニック、各種モータースポーツ関係者の詰め合わせ百人ばかりがピットあたりをうろついて、明日のレースの登録をして、退屈そうにビールをすすったり、お互いのマシンを値踏みしたりしてる——そしてそのど真ん中で、トラップから五秒かそこらごとに飛び出してくる標的以外は何も目に入らない様子で、このショットガン連中は一撃たりとも外さない。

ふん、まあいいか、とおれは思った。射撃は、バイク勢の甲高いカオスの中で、一種のリズムを作っていた——一種の安定したベースラインだ。おれは車を停めて、群衆にまぎれた。弁護士は昏睡状態のまま残して。

ビールを買って、バイクの登録をながめた。四〇五ハスカヴァルナがたくさん、カリカリにチューンしたスウェーデン製火の玉マシンだ……それにヤマハやカワサキもたくさん、トライアンフ五〇〇、マイコス、そこここにCZ、プルサン（Pursang）……どれも超高速超軽量ダートバイクだ。ハーレーはこのクラスにはいない、スポーツスターでさえ……そんなのは、われらがグレートトレッドシャークでデューンバギー競争に出るようなもんだ。

うん、それ**やってみようかな**、と思った。弁護士をドライバーで登録して、エーテルとLSD漬けの頭のままで、スタートラインに送り出す。そしたらどういう扱いになる？

だれもそこまでイカレたやつとはコースに出ようとするまい。弁護士は、最初のカーブで横転して、デューンバギーを四、五台道連れだ——カミカゼトリップ。

「登録料は？」とデスクの男にきいてみた。

「二と五十」とかれ。

「こっちにはヴィンセント・ブラック・シャドーがあるって言ったら？」

かれはおれをじっと見上げて何も言わず、好意的な様子でもない。そいつがベルトに.38 口径を指しているのが見えた。「いやなんでもない。どうせドライバーが病気だ」

デスクの男の目が険しくなった。「ここらで病気なのはあんたのドライバーだけじゃなさそうだぜ、おい」

「そいつ、のどに一物つかえてて ね」とおれ。

「なんだと？」

男はかなりむかついてきてたが、いきなり目をそらした。何か別のものを見ている……

おれの弁護士だ。もうオランダサングラスはかけていないし、アカプルコシャツも着ていない……いかにもイカレた様子の人物、半分はだかで荒い息をしてる。

「いったいなんの騒ぎだ！」とかれはわめいた。「この人物はわたしの依頼人ですぞ。あんた、法廷に出る気か？」

おれはかれの肩をつかんで、ゆっくりと振り向かせた。「気にすんな。ブラックシャドーなんだけど——受け付けてくれないんよ」

「**ちょっと待った**」と弁護士は叫んだ。「**どういう**こった、**受け付けない**ってのは？　このブタどもと**取引でも**したのか？」

「いやまさか」とおれは、弁護士をゲートのほうにさらに押しやった。「でも、ごらんの通り、みんな武装してるだろう。ここらで銃を持ってないのはおれたちだけだぞ。あっちの**銃撃が**聞こえないの？」

かれは足を止め、しばらく聞き耳をたてて、そしていきなり車のほうにダッシュした。肩越しに叫びつつ。「このフェラチオ野郎ども！　首洗って待ってろ！」

シャークで高速まで戻った頃になって、弁護士はやっと口がきけるようになった。「いやまったく！　どうしてあんな、イカレポンチの差別屋どもなんかにまぎれこんじまったんだ！　さっさとこの街を出ようぜ。あのゴミクズとも、おれたちを**殺そうとして**やがった！」

第5章　取材……プレス活動をかいま見る……醜悪さと失敗

　レーサーたちは、夜明けには準備万端。砂漠に見事な日の出。みなぎる緊張。でもレースは九時まで始まらなかったので、ピットとなりのカジノで、まるまる三時間もつぶさなきゃなんなかったんだが、それが騒動の始まりだった。
　バーは七時開店。穴ぐらには「koffee & donut 酒場」ってのもあったけれど、サーカス・サーカスみたいなとこで徹夜してたおれたちは、コーヒーやドーナッツって気分じゃなかった。強い酒がほしい。みんなえらく機嫌が悪くて、総勢少なくとも二百人はいたから、向こうも早めにバーを開けた。八時半にはサイコロばくちのテーブルのまわりにすごい人だかりができていた。そこらじゅう、騒音と飲んだくれの怒号まみれ。
　ハーレーダビッドソンのTシャツを着た、骨ばった中年ゴロツキがバーにとびついて怒鳴った。「なんてこったい！　今日って何曜日――土曜？」
「むしろ日曜だよ」とだれかが答えた。
「ほ！　そりゃ**むかつく**よな、え？」とハーレー男は、だれに向かうともなく怒鳴った。「昨日の夜、ロングビーチの家にいて、だれかが今日はミント四〇〇やるぞ、とかいって、だからおれぁ女に言ってやったのよ、『おれ行くぜ』って」と笑う。「それで女がぎゃあすかわめきやがって、わかる……だからはたきまわしてやったら、気がつくと会ったこともない連中二人に歩道に連れ出されてボコボコ。信じられる？　ぶちのめされたぜ」
　男はまた笑って、群衆に向かって話しかけ、だれがきいてるかなんて気にもしていないようだった。「いやまったく！」

と続ける。「すると一人が『どこ行く気？』で、おれは『ラスベガスのミント四〇〇』って言う。すっと連中十ドルくれて、バス乗り場まで車出してくれたよ……」そこで間。「いや、やつらだったと思うんだけど……」

「まあとにかく、それでここに来たわけ。クーッ、まったく長い夜だったぜホント。くそバスで延々七時間だもんな！　でも目を覚ましたら夜明けで、そこはベガスのダウンタウンで、一瞬自分がそんなとこでなにしてんのかわかんなくなって。頭に浮かぶのってったら『神さま、またかよ。こんどはだれに離婚されたんだっけ』」

かれは群衆のだれかからタバコを受け取って、火をつけながらまだニタついてる。「でもそこで思い出したんだよ！　そうそう、ミント四〇〇できたんだって……それでもう、ほかに知るべきことは何もないって感じ。とにかくここにきただけで最高。だれが勝とうが負けようが、そんなの知ったこっちゃない。とにかくあんたらとここにいるだけで最高……」

だれも反論しようとはしなかった。みんなわかってたから。一部の世界では、「ミント四〇〇」はスーパーボウルとケンタッキー・ダービーとロウアー・オークランド・ローラーダービー決勝をいっしょくたにしたものより、ずっとずっとすごいものなのだ。このレースは非常に特殊な血筋の連中を惹きつける。そしてこのハーレーTシャツの男は、明らかにその一人だった。

「ライフ」誌特派員は、わかるわかる、という感じでうなずくと、バーテンにわめきたてた。「こぇつに出すもん出してゃちゃくれおぁ！」

「いますぐだ！」とおれもわめいた。「それも五つ！」と血のにじむ手のひらを広げて、バーカウンターに叩きつけた。「そうとも、いっそ十だ！」

「のったぁぁぁっ！」ライフ野郎が絶叫。バーが捕まえきれなくなって、ゆっくり膝をつきはじめていたけど、でも圧倒的な権威をもってしゃべっていた。「これはスポーツ史上の魔術的瞬間だ！　こんな時は二度とないかもしれない」そこで声が急に落ちた。「まえにトリプルクラウンも取材したけど」とつぶやく。「ぜんぜんこんなじゃなかった」

カエル目女が、熱にうかされたようにそいつのベルトをひきむしっていた。「**立ってよ！**　」と懇願する。「お願いだから立って！　あなた**立つだけで**もっとすごくいい男なんだから！」

かれは興味なさげに笑った。「いいかいマダム」と言い放つ。「おれはこの地べたにいるだけで、もうふるいつきたいほどハンサムなの。立ったりしたらあんた、**気が変になっちゃう**ぜ！」

女はそいつをひっぱり続けた。もう二時間もかれの横でコナかけ続けていて、いまや行動に出ようとしてたのだ。ライフ野郎は関わり合いになる気はなくて、もっと深くしゃがみこむんだ。

おれは顔をそむけた。ひどすぎる。だっておれたちは、なんといっても全国スポーツ記者の第一線トップ級集団のはずだろう。それも、ごく特別な任務でこうしてラスベガスに集ってるのに：第四回「ミント四〇〇」の取材だ……そういう話だから、半端なまねはできんだろうに。

でもいまや——イベントがまだ始まってもないってのに——われわれが事態を収拾できてないような兆候が見えていた。このすてきなネバダの朝、砂漠の涼しい明るい夜明けに、ベガスから二十キロほどの「ミント・ガンクラブ」と称するコンクリブロック造の賭博カジノのしけたバーに寄り集まって……そしてレースが始まろうってのに、みんなヤバイくらいむちゃくちゃ。

外では、キチガイどもがバイク遊びだ。ヘッドライトを叩いて、フォークのオイルを足して、間際のボルトの締め直し（キャブのねじ、マニホールドのナットなんか）……そして九時きっかりに、最初のバイク十台が飛び出した。ものすごくエキサイティングで、みんな外に見物に出た。スタートフラッグが振り下ろされて、この哀れな抜け作ども十人がクラッチを入れて、最初のコーナーに団子状態で突入、そしてだれかが（確か、ハスカヴァルナ四〇五だったと思う）がトップに出て、そいつがその場をキープしたまま、土煙の中へ消えるとともに歓声があがった。

だれかが言った。「なかなか結構ですな。一時間もしたら戻ってくるよ。バーに戻ろう」

でも、ちょっと待った。まだダメだ。スタートしようとしてるバイクが、あと百九十台ほど残ってる。最初は、スタートから二百メートルくらいのとこまでそいつらを見送れた。でも、視界は長続きしなかった。第三集団の十人は、おれたちが立ってるところから百メートルほどで土ぼこりの中に消えた……そして最初の百台くらいを送り出した頃には（そ

れでも**あとまだ**百台残ってる）視界はもう二十メートル以下くらいにまで下がってた。ピットの端にある、わらの緩衝ブロックくらいまでは見える感じ……。

そこから先になると、今後二日にわたって砂漠のこのあたりにたちこめる驚異の土ぼこりは、すでに完璧にできあがってた。その時にはだれも気がついてなかったことだが、おれたちが「名高きミント四〇〇」を見るのは、これが最後になる――

昼になると、ピットをバー・カジノから見るのもむずかしくなっていた。その距離、炎天下の三十メートル。ふつうのまともなマスコミ的感覚で、「レースを取材」しようとするなんて、まったくお話にならない。水のかわりにシッカロールのつまった、オリンピック級プールでやってる水泳大会を追っかけようとするみたいなもんだ。フォード自動車は、約束通り「プレス用ブロンコ」を運転手つきで提供してくれたが、何度か砂漠でキツい走りをしてから――バイクを探してたまに見つけたりして――おれは車を写真家たちにくれてやると、バーに戻った。

全事態について、苦悶に満ちた再評価を行う頃合いだ、というのがおれの感じだった。レースはまちがいなく進行中だ。スタートは目撃した。そこまではおれも確信できた。でも、これからどうする？　ヘリコプターでも借りるか？　あのろくでもないブロンコに戻る？　くだんねえ砂漠にふらふら出てって、まぬけどもがチェックポイントを通過するのを**眺めろってか？**　十三分ごとに一つ……？

十時頃には、みんなコース中に広がりきってた。もう「レース」なんてもんじゃない。エンデュランス・コンテスト、我慢大会みたいなもんだ。目に見える活動といえばスタート・ゴールラインのところだけで、数分ごとにどっかの軟弱野郎が土けむりの中から猛スピードで出てきてはバイクから降りて、ピットクルーが給油して真新しいドライバーを乗せて、それをコースに戻してる……もう百キロほどのラップへ、あのひどいほこりで何も見えない中での、つらい一時間の腎臓破裂しそうな狂気へと。

十一時あたりで、プレス車両でもう一回りしてみたけど、見つかったのはデューンバギー二台だけで、乗ってるのはサンディエゴからきた退役木っ端軍人みたいなやつらがわんさか。ドライウォッシュでこっちの行く手をふさいでこう命令：「で、例のなんとかはどこでやっとるのかね」

「さあねえ」とおれ。「こっちもあんた方と同じく、ただの善良な愛国アメリカ人なもんで」連中のバギーは二台とも、邪悪なシンボルだらけだった。絶叫ワシがツメでアメリカ国旗を運んでいたり、すが目のヘビが星条旗製チェーンソーで切り刻まれてるとことか、そして一台は、助手席のところに機関銃の台座らしきものをつけてる。

連中はもう、大ごきげんだった——砂漠を猛スピードで走り回って、会ったヤツを片っ端から尋問。「あんたら、**どの部隊の**所属かね」と一人が叫んだ。エンジンはみんなうなりをあげていて、お互いほとんど聞き取れない。

おれは怒鳴った。「スポーツ記者団。友軍っす——雇われ軟弱野郎どもね」

微かな笑み。

おれはわめいた。「だれかを追っかけまわしたいんなら、この先のでっかい黒ジープに乗ってる、CBSニュースのスカンク野郎をとっちめたら？　『ペンタゴン売り渡し』をやったのはあいつだよ」

「なんだとぉ！」二人がすぐに叫んだ。「黒のジープ、と言ったな？」

連中は轟音とともに走り去り、おれたちもそうした。岩とヒイラギガシとサボテンの上を、鋼鉄の回転草みたいに跳ねてく。おれの手のビールが飛び上がって天井にあたり、膝に落ちてきて、股間をなま暖かい泡で浸す。

「おめえ、クビ」とおれは運転手に言った。「ピットに戻してくれ」

そろそろ年貢のおさめどきか、という感じ——このろくでもない任務について考えて、どう対処するか決めるんだ。ラセルダは、完全カバー報道を主張。砂ぼこりの嵐の中へと戻って、このろくでもない代物を見通せるような、フィルムとレンズの珍しい組み合わせを求めて実験を続けたがった。

われらが運転手「ジョー」にはなんの異存もなかった。こいつの名前は実は「ジョー」ではないのだけれど、でもそう呼べという指示がきていた。前の晩にフォード自動車のボスと話をしたときに、こっちに割り振る運転手の話になって、こう言われたのだ。「そいつの本名はスティーブなんだけれど、でもジョーと呼んでくれ」

「別にいいけど。そいつのお望み次第の名前で呼んでやるよ。『ズーム』なんてどう？」

「ダメ」とフォード人。「絶対に『ジョー』なの」

ラセルダは同意して、昼頃にかれは、運転手ジョーをお供に砂漠にまた出かけてった。おれはコンクリブロック造の

バー・カジノ、実はミントガンクラブに戻った——そしてしこたま飲んで、しこたま考え、そしてしこたまメモをたくさん、たくさん書きつけ……

第6章　街での一夜……デザートインでの対決……サーカスサーカスでヤク狂い

土曜深夜……この夜の記憶はえらくぼんやりしてる。あの晩の出来事のガイド役になりそうなものってぇと、ポケット一杯のビンゴカードとカクテルナプキンが、走り書きのメモだらけになってるのばっか。こんな具合だ：「フォード野郎連絡、レース観戦用にブロンコ要求しろ……写真？……ラセルダ／電話……ヘリコプターはどう？……電話しろ、アホども**押しまくれ**……ガツンとわめく」

もう一つ：「パラダイス大通りの看板――『ノンストップのトップレス』……ロスに比べりゃ二流セックス：こっちじゃ**乳首も隠す**――ロスじゃ全裸公開アヘアへ……ラスベガスは武装せんずり屋社会／ここじゃギャンブルがいちばん／セックスは追加料金／大ギャンブラー用変態トリップ……勝ったらホテルづき娼婦、ツキのない群衆にはおしぼりプレイ」

ずっと昔、ビッグサーでライオネル・オレイから通り下ったとこに住んでた頃、リノに出かけてサイコロばくちをするのが好きな友だちがいた。そいつはカーメルにスポーツ用品店を持ってたの。それである月に、メルセデス・ハイウェイクルーザーを三週末連続でリノまで運転してった――そして毎回大勝ちした。その三回で一万五千ドルかそこら勝ってたので、四週目はスキップして友だちにネペンテで夕食をおごることにした。「勝ち逃げが決まりでしょう。それに、運転もかなりあるからね」とそいつは説明。

月曜の朝、リノから電話――そいつがむしってたホテルの支配人だった。曰く「今週末は寂しかったですよ。係も退

屈しちゃってまして」

「しまった」とわが友人。

そこで次の週末に、かれは友だちと女の子二人つれて、自家用機でリノに飛んだ——みんな支配人の「特別ゲスト」として。大ギャンブラーには、分不相応なんてこたぁない……

そして月曜の朝、同じ飛行機——カジノの飛行機ね——がかれをモンテレー空港まで連れ戻した。パイロットに十セント借りて、友だちに電話してカーメルまで乗せてってもらうはめに。三万ドルの借金ができてて、二ヶ月たつと、そいつは世界でいちばんおっかない取り立て屋の銃口をのぞきこんでるありさま。

だから店を売ったんだけど、でもそれでもタマが足りない。残りは待ってくれるってさ、とそいつ——でもそれではめられて、だもんで、借金してでも全額返済しちゃったほうがいいんじゃないかと納得するに至ってた。

マジなギャンブルはヒジョーに厳しいビジネスなのだ——そしてラスベガスは、リノなんか近所の仲良し雑貨店に見えるくらいのところ。負けたら、ベガスはこの世でいちばんおっかない街だ。ほんの一年ほど前まで、ラスベガスのまわりにはこんなでっかい看板があった:

大麻には賭けないで!
ネバダ州では、所持は二〇年
売ったら終身刑!

だからおれも、こんな土曜の夜に車いっぱいに大麻を積んで、頭いっぱいにLSDを仕込んでカジノをはしごするなんて、どうも不安でしょうがなかった。何回か、かなりヤバい場面をかろうじて逃れたこともある。あるときなんか、グレートレッドシャークでランドマークホテルの洗濯室を通りぬけようとした——でも、ドアがせますぎたし、中にいる連中が妙に興奮しててやばそうだったんで、やめた。

デビー・レイノルズ／ハリー・ジェームズのショーを見物しようと、デザート・インに運転してった。「おまえはどうか知らんが、おれの稼業だと、ヘップでないとダメなのよ」とおれは弁護士に言った。
「それはこちとら同じ」と弁護士。「でも弁護士としての忠告だが、トロピカーナホテルに寄って、ガイ・ロンバルドを拾ってこいよ。ロイヤル・カナディアンどもといっしょにブルールームにいるぞ」
「なんで？」
「**なにが**なんで？」
「なんで汗水たらして稼いだ金を、ろくでもない死体見物なんかに使わなきゃなんないの？」
「おい、おれたち何しにここにいると思ってんの？　自分の楽しみのためか、それとも**仕事をこなすため**か？」
「もちろん仕事だ」とおれは返事した。われわれはぐるぐると堂々巡りして、デューンズホテルだと思ったとこの駐車場をうねうね走っていたんだけど、そこは実はサンダーバードだった……それともハシエンダかな……
弁護士は「ベガス・ビジター」に目を通して、めぼしいイベントを探していた。『ニッケル・ニックのスロットアーケード』ってのは？　『濡れ濡れスロット』だって、なんかすごそう……二十九セントのホットドッグ……」
いきなりみんなに怒鳴りつけられた。面倒に巻き込まれたらしい。赤と金色の軍用コートを着た巨漢が二人、フードの上にぬっとそびえ立っている。「おい、どういうつもりだよ！　**こんなとこ**停めてんじゃねーぞ！」と一人がわめく。
「え、どうして？」とおれ。スペースもたっぷり空いてて、しごくまっとうな駐車場所に思えた。もうずいぶん長く思えた時間をかけて駐車スペースを探しつづけてきた。もうたくさん。車を乗り捨ててタクシーを呼ぶところだった……が、まさにそのとき、この場所を見つけたんだ。
が、そこは実は、デザートインの正面口の真っ正面の歩道だったりしたのである。この頃までに縁石をいくつ乗り越えたか見当もつかないほどになっていて、この最後の一段もまったく気がつかなかったほど。でも、いまやわれわれはなかなか説明しづらい状況にいるわけだ……入り口をふさいで、巨漢に怒鳴られ、えらく混乱……
弁護士が一瞬のうちに車からおりて、五ドル紙幣をふりまわした。「この車、駐車しといてくれ！　おれはデビーの古

い友だちなんだ。むかしはいっしょに**バコバコ**したもんだ」

一瞬、こいつがしくじったかと思った……そのとき、ドアマンの一人が札に手を伸ばしてこう言った。「はいはいわかりましたよ、車はじゃあ面倒みますから」そして駐車券をちぎってよこした。

「すっごいじゃん！」とロビーを通り抜けながらおれは言った。「あと一歩でとっつかまるところだったのに。頭の回転はやいんだな」

「ふん、あたりまえだろが。おれはおまえの**弁護士だぞぅ**……で、貸し五ドル。いますぐ返せ」

おれは肩をすくめて札をくれてやった。このデザート・インの豪勢で毛足の長いカーペット敷きロビーは、駐車場係への小銭程度の袖の下なんかを値切るにはふさわしくない場所に思えた。ここは、ボブ・ホープのシマだった。フランク・シナトラの。スピロ・アグニューの。ロビーはかなり、高品質合成樹脂とプラスチック製ヤシの木の匂いがぷんぷんしていた――明らかにお大尽のためのハイソな避難所なわけね。

おれたちは自信たっぷりに大舞踏会室に向かったんだが、やつら入場を断りやがった。遅すぎます、とワインカラーのタキシードを着た男がぬかしやがる。もう満席です――席は一つもありません、いくらお金を積んでも、だと。

弁護士が言った。「席がどうしたバカヤロが。おれたちゃデビーの古いダチなんよ。こいつのためにロスからずっと車をとばしてきたんだから、死んでも入るぞ」

タキシード野郎は、「消防条例」がどうのこうのとぶつくさ言い始めたが、弁護士は聞く耳もたなかった。とうとう、はでな騒音をいろいろたてたあげくに、おれたちは無料で入れてもらえた――ただし後ろのほうに静かに立って、タバコを吸わないこと。

約束はしたんだけれど、中に入った瞬間に、自分で抑えがきかなくなった。それまでの緊張がキツすぎた。デビー・レイノルズが銀のアフロヘアのかつらをつけて、ステージ上でグチョグチョ歌ってやがる……曲は「サージェエント・ペッパー」で、黄金のトランペットはハリー・ジェームズ。

弁護士が言う。「神よ仏よ！　タイムカプセルに迷いこんじまったぞ！」

どっしりした手がおれたちの肩をつかんだ。おれはタッチの差で、ハッシシパイプをポケットに戻した。二人ともロ

ビーを引きずっていかれ、猛者どもに正面玄関に押さえ込まれて、車が持ってこられた。「よーし、とっとと消えろ」とワインタキシード男。「今回は見逃してやる。デビーがおまえらみたいなのとダチなら、思ってたよりかなりマズいことになってるな、彼女は」

走り去りながら、弁護士は怒鳴った。「おぼえてろよ！　この被害妄想のちんかす野郎が！」

おれはサーカスサーカスカジノまで車をまわし、裏口近くに駐車した。「ここが問題の」とオレ。「ここならふざけたまねはしやがんねー」

「エーテルはどこだ？　このメスカリン、ぜんぜん効かねぇじゃねーか！」と弁護士。

トランクのキーを渡してやって、ハッシシパイプに火をつけた。やつはエーテルのびんを手に戻ってくると、キャップをとって、ティッシュにちょっとかけると、それを鼻の下に叩きつけて思いっきり吸い込んだ。おれも別のティッシュにしみこませて、自分自身の鼻を冒した。その匂いは、車のトップを開けていてもすさまじかった。じきにわれわれは入り口にむかう階段をヨタヨタとのぼり、バカみたいに笑ってお互いを引きずり合い、まるで呑んだくれ。

エーテルの主なメリットはこれだ。初期のアイリッシュ小説に出てくる村の酔いどれみたいにふるまうようになる……基本的な運動能力がすべてなくなる。視界はぼやけ、バランスがとれなくなって、下が麻痺——からだと脳との結びつきがすべて切断。これはおもしろい。脳のほうは、おおむねふつうに機能し続けるからだ……自分自身が最低の振る舞いをしているのを眺めることはできるのに、それをコントロールはできない。

サーカスサーカスに続く回転木戸に近づいて、そこについたら入り口の男に二ドル払わないと入れてもらえないのがわかってる……でもついてみるとなに一つうまくいかない。木戸までの距離をはかり損ねてもろに正面衝突、はねかえって倒れまいとしてどっかの婆さんをつかんで、怒ったロータリークラブ員につきとばされて、考えてしまうのだ。どうなってんの？　すると自分がこうつぶやいているのが聞こえる。「ローマ法王が犬とヤッて、おれのせいじゃないっての。おっとっとぉ！……金ってなぜ？　おれの名前はブリンクス。生国と発しまするは……まする？　ヒツジ横から入れて……女子供を装甲車へ……ジープ船長の命令だ」

まったく悪魔のエーテル——完璧なからだのドラッグ。精神は脊椎と交信できず、恐怖のあまり崩壊。手は狂ったよ

うにふりまわされて、ポケットから金も出せない……口からはもごもごした笑いとシーシー音……いつもにこにこ。
　エーテルは完璧なラスベガス用のドラッグだ。この街では、酔いどれは大のお気に入りだ。いいカモ。だから木戸を通してくれて、中で自由にさせてくれる。

　サーカスサーカスは、ナチが戦争に勝っていたらヒップな世界が土曜の晩にやっていたはずのものだ。これぞ第六帝国。一階はほかのカジノと同じく、ギャンブルテーブルだらけ……でもここは四階分くらいの高さがあって、サーカステントみたいな感じで、ありとあらゆる変てこな田舎縁日／ポーランドカーニバルのキチガイ沙汰が、上空で展開されているのだ。ギャンブルテーブルの真上で、空飛ぶカラジート兄弟たちが空中ブランコ演技をしていて、そこにさらに口輪をしたクズリ四匹と、サンディエゴの妖精シスターズ六人が参加……だから一階でブラックジャックをしてて、だんだん掛け金があがってきて、ふといきなり上を見上げると、そこで自分の頭の真上では半分はだかの十四歳少女が空中でうなるクズリに追いかけ回されて、すると向かいあったバルコニーから銀色に塗りたくったポーランド野郎がブランコで下りてきて、そのクズリの首のところに飛び降りて、いきなり死闘をくり広げる……ポーランド野郎二人とも、クズリを捕まえたまままっすぐサイコロばくちのテーブルに真っ逆様に転落――でもネットでピョンとはねかえる。連中はわかれて、別々の三方向めざして天井の方へ上昇し、そして落下に転じようとしたとこで、朝鮮子猫三人衆がそれをつかまえて、ブランコでバルコニーへと連れ去られる。
　このキチガイ沙汰がいつまでも続くけれど、だれも気がつかないようだ。一階では、ギャンブル活動が二十四時間ノンストップで続いて、サーカスもぜったいに終わらない。一方、上階のバルコニーすべてでは、思いつく限りのありとあらゆるイカレたインチキ屋どもにカモられる。高さ三メートルの男役レズの乳首隠しを撃ち落とそう、商品は山羊型の綿アメだよ！　なあ旦那、このすっばらしい機械の前に立ってみな、するとたった九十九セントで、身の丈百メートルのあんたもどきが、ラスベガス上空のスクリーンに登場って寸法だ。追加料金九十九セントで、声も出せちゃうよ！「兄ちゃん、言いたいことがあったら言えばいいぜ。だいじょうぶ、ちゃんとみんなに聞こえるって。なんせ身の丈百メートル、だもんな」

なんとかしてくれー。いまにも想像がつくじゃないか。ミントホテルのベッドに横になって、うつらうつらしてボーッと窓の外を見てると、いきなりまがまがしい呑んだくれのナチが深夜の空に高さ百メートルでご登場、そして世界に向けてたわごとをわめきたてるんだぜ。「**ウッドストック・ユーバー・アレス！**」

今夜はカーテンを閉めとこう。そんなものを見たら、ヤク漬け野郎は部屋中をピンポン玉みたいにはねまわりだす。幻覚だけでも十分ひどいってのに。でも、しばらくすれば、死んだお祖母ちゃんがナイフをくわえて脚をよじのぼってくるのが見えるとか、その手のことはなんとか対処できるようになってくる。ほとんどのＬＳＤ使いは、そういうのなら扱える。

でも、このもう一つのトリップとなると、**だれにも**扱いきれない——一ドル九十八セントさえあれば、どんなアホでもサーカスサーカスに言って、いきなりラスベガスのダウンタウン上空に神さまの十二倍の大きさで登場して、思いついたことを何でもわめきちらせるって可能性は、だれにも扱えない。うんにゃ、ここは幻覚剤向きの街じゃあない。現実そのものが、よじれまくりすぎてる。

上質のメスカリンは効きが遅い。最初の一時間はひたすら待つだけ。そして二時間目を半ばまで過ぎたところで、何も起きないので、あのクサレ売人め、まがいもの売りつけやがったな、と罵倒しはじめる……そのとき**ドーン！**　いかれまくった強烈さ、変な輝きとバイブレーション……ものすごい光景だ、特にサーカスサーカスみたいな場所だと。

「こんなこと言いたかないが」と弁護士は、二階バルコニーのメリーゴーラウンドバーにすわりながら言った。「この場所、なんかもうオレ**きちゃって**る。なんかビビリ入ってる感じ」

「バカいえ。アメリカンドリームを探しにここまできたってのに、いままさにその台風の目にいるときに、逃げだしたいだと」おれはヤツの腕をつかんで握りしめた。「おまえにも**わかるだろ**。おれたちは、中枢を見つけたんだぞ！」

「わかってる。だからこそおれ、びびっちゃってんの」

エーテルがきれてきて、ＬＳＤもとっくにとんで、メスカリンだけが強力に残ってた。おれたちは小さな丸い金色の合成樹脂テーブルにすわって、バーテンのまわりをグルグルとまわってる。

「あそこを見ろよ」とおれ。「女が二人でシロクマとヤッてるぞ」
「たのむよ。そういうこと**言わんどいて**くれる？　いまだけはさ」弁護士はウェイトレスに合図して、ワイルドターキーをもう二杯注文した。「これが最後の一杯。金、いくら貸せる？」
「あんましねーぞ。なんで？」とおれ。
「行かなきゃ」
「行くって？」
「うん。この国を出る。今夜」
「落ち着けって。何時間かすればしらふに戻るから」
「いや、おれ、マジなの」
「ジョージ・メッツキーだってマジだっただろ。それがどんな目にあわされたか知ってるじゃないか」
「おい、ふざけてんじゃねーぞ！」と弁護士は怒鳴った。「この街にあと一時間もいたら、オレ、だれかを殺しちゃうよ！」
こいつがギリギリのとこにきてるのがわかった。メスカリンの効きのピークでやってくる、あの恐怖まみれの緊張。
「わかった。じゃあ金貸すから。外へ出て、手持ちがいくらあるか数えてみようぜ」
「外までたどりつける？」
「うーんそれは……ここからドアまでの間で、何人ともめごとを起こすかによってくるな。大人しく出たいんだな？」
「**急いで**出たいんだよ」
「わかった。勘定を済ませて、ゆっくり出よう。おれたち二人とも、トサカにきてる。長い長い道のりになるから」おれはウェイトレスに勘定を怒鳴った。彼女は、退屈そうにこちらにやってきた。すると弁護士が立ち上がる。
「ねえ、あのクマとヤるのに、**金もらってんの？**」
「え？」
「冗談、こいつ冗談だって」とおれは、二人の間に割って入った。「ドク、行こうぜ——下でギャンブルだ」おれはや

つをつれて、バーのはじ、メリーゴーラウンドのふちのとこまでやってきたんだが、弁護士はこいつが止まるまで下りないと言いだした。

「止まらないよ。いつまでも**ずぇぇぇったいに**止まらないんだよ」とおれはそこを下りて、振り返ってやつを待ったが、弁護士は動かない……そして手を伸ばしてひっぱり下ろす前に、もう運び去られちまった。「動くなよ、また戻ってくっから！」とおれは怒鳴った。やつの目はぼんやりと正面を見たままで恐怖と混乱に身をすくめていた。でも、一周するまでぴくりとも動かなかった。

やつが真っ正面にくるまで待って、つかまえようと手を伸ばした――が、やつは飛び退いて、もう一周。これでおれはえらく不安になった。錯乱寸前の気分。バーテンがこっちを見てるようだ。

カーソン・シティ、と思った。二十年はくらうぞ。

おれはメリーゴーラウンドに飛び乗って、急いでぐるっとバーをまわり、弁護士の死角から近づいた。そしてしかるべき場所にきたときに、突き落としてやった。やつは通路へとよろけ倒れて、バランスを失って転がるときに、地獄じみた叫びを発して、群衆の中へとつっこんでいった……丸太みたいに転がって、一瞬で立ち上がり、拳を握りしめて、だれかを殴ってやろうと見回している。

おれは両手をあげて近づき、にっこりしようとした。「落っこちたみたいだな。行こうぜ」

この頃になると、みんなは**ホントに**おれたちを注目してた。でもこのバカは動きやがんねえ。そして捕まえてひっぱったら何が起きるかはわかっていた。「いいよ。じゃあおまえはここにいて、牢獄送りになるがいいや。おれは行くからな」おれはやつを無視して、さっさと階段のほうに歩き出した。

これでやつも動いた。

「いまの見たか？」と追いつきながらやつが言う。「どっかのクサレ畜生野郎が、おれの背中を蹴飛ばしやがった！」

「たぶんあのバーテンだよ。おまえがウェイトレスにあんなこと言うから、締め上げたかったんだろ」

「**信じられねーよな！**　こんなとこ、さっさと出ようぜ。エレベータはどこだ」

「エレベータには**近寄るんじゃない。**向こうの**思うツボ**だぞ……おれたちを鋼鉄の箱に閉じこめて、地下まで連行する気が」おれは肩越しに振り返ったが、だれも後を追ってきてはいない。

「走るな。むこうは発砲する口実をほしがってるんだから」かれはどうやら理解したようで、うなずいた。おれたちは足早に、屋内の中央通路を歩いていった——射撃場、刺青パーラー、両替屋に綿アメ屋——そしてガラス戸のバンクを取って、下り坂の芝生を下り、駐車場に出るとそこにレッドシャークがお待ちかね。

「運転たのむ」と弁護士。「なんかおれ、具合おかしいわ」

第7章　偏執狂的恐怖……そしてソドミーの最悪亡霊……ナイフ一閃と緑水

ミントにつくと、カジノ正面の通りに車を停めた。駐車場から角をまわったところだ。ロビーでひともんちゃく起こす危険は避けたかった。おれたちどっちも、酔っぱらいのふりでごまかしおおせる状態じゃない。どっちもピリピリしすぎてる。まわりじゅう、悪意まみれの波動だらけ。カジノを足早にぬけて、裏のエスカレータで上がった。だれにも合わずに部屋の前までたどりついた——が、キーでドアが開かない。弁護士が必死で格闘している。「こんちくしょう、やつらおれたちのキーを換えやがった！」とうめく。「たぶん部屋もガサ入れされたぞ。もうおしまいだあ」いきなりドアがバッと開いた。おれたちはためらって、それから急いで中に入った。おかしな様子はない。「ボルト錠を全部使え。チェーンも全部」と弁護士。手の中のミントホテルのキー二つを眺めている。「**こっちのやつは**どっから出てきたんだ？」と一二二一の番号がついたキーを持ち上げる。

「それ、ラセルダの部屋だろ」とおれ。

弁護士にっこり。「ああ、そうそう、そうだった。要るかもしれないと思ってもってきたんだ」

「なんのために？」

「ちょっと上がってって、ベッドのあいつを消化ホースでふっとばしてやろうぜ」

「よせよ、かわいそうに、あんなヤツほっといてやれよ。どうもおれたちを避けてるような気がするし」

「自分をごまかすのはよせ。あのポルトガル野郎は**ヤバイ**ぞ。おれたちを鷹みたいに監視してやがる」そして弁護士

は目をすがめておれを見た。「おまえ、あいつとなんか取引したか？」

「電話では話したよ。おまえが車を洗わせてる間に。早めに寝るってさ。夜明けにスタートラインに出られるように」

弁護士、聞いちゃいねえ。つらそうな叫びをあげて、両手で壁を叩く。「あの汚らしいケダモノ野郎！　**まちがいない！**　あいつ、オレの女をコマしやがった！」

おれは笑った。「あのフィルム部隊といっしょの、チビのブロンドグルーピーのこと？　あの娘がラセルダに陵辱されたと思うわけ？」

「そうだよ——ふん、勝手に**笑ってろ！**」と弁護士は怒鳴った。「てめーらクズの白ブタどもときたら、まったくどいつもこいつも」といいながら、テキーラのまっさらのボトルを開けて、ラッパ飲みしてる。それからグレープフルーツをひっつかんで、ガーバー・ミニマグナムでそれを半分に切断。これはステンレススチールのハンティングナイフで、刃はおろしたての直カミソリさながらだ。

「そのナイフ、どっから持ってきた？」

「ルームサービスが持ってきたんよ。ライムを切るものがほしかったの」とかれ。

「ライムなんかないだろ」

「だってないって言うから。砂漠の中じゃ生えないんだよ」と弁護士は、グレープフルーツを四つに切った。そして八つに……そして十六に……そして残った残骸をむちゃくちゃに斬りつけだした。「あの薄汚ねえガマガエル野郎」とうめく。「くそっ、機会のあるうちに始末しとくんだった。**わかってながら**みすみす女を**コマされる**なんて」

その娘なら忘れもしない。数時間前に、エレベータの中で一悶着あったのだ。この弁護士が、アホさらしやがった。

「あなた、ライダーでしょう。どのクラス？」と彼女。

「クラス、だと？」と弁護士は言い放つ。「それってどういう意味だよ、え？」

「何に乗ってるんですか？」と彼女はあわててにっこり。「あたしたち、テレビシリーズ用にレースを撮影してるんですけど——あなた、使えそうだから」

「おれを**使う？　利用する？**」

ああ神さま仏さま。なんとかしてくれよー。エレベータは、レース関係者で満員だった。一階上がるのにえらく時間がかかってる。三階に止まる頃には、弁護士はガタガタ震えてた。あと五階……

「おれ、**でっかいのに**乗ってるんだぜ！」と弁護士がいきなりわめいた。「**すんごい**でっかいのに！」

おれは笑って、なんとかその場をごまかそうとした。「ヴィンセント・ブラック・シャドー。おれたち、ファクトリーチームなんだ」

これは群衆から無礼なせりふのつぶやきを引き起こした。「うそつけ」とおれの後ろのだれかがつぶやいた。

「ちょっと待ったぁ！」と弁護士が叫んだ……そして女の子に向かって「お嬢さん失礼、だけどこの箱になんか無知蒙昧の腰抜け野郎がいて、ちょっと顔を切り裂かれたいらしいんで」そして黒のビニールジャケットのポケットに手を突っ込んで、箱の奥にはりついた群衆のほうに向き直った。そしてすごむ。「この安手の白ブタおかま野郎どもが。どいつから切り刻まれたい？」

おれは頭上の階数表示を見ていた。ドアが七階で開いたが、だれも動かない。死んだような沈黙。ドアが閉まる。八階に上がる……そしてドアがまた開く。混んだ箱の中では、いまだ物音も動きもない。ドアがしまりかけたところで、おれは飛び降りて弁護士の腕をつかみ、間一髪でひきずりおろした。ドアがスッと閉まってエレベータの表示がポーンと九階になる。

「おら、さっさと部屋に行け！　あいつら、サツをけしかけてくるぞ！」とおれたちは、部屋への角を走ってまわった。弁護士はゲラゲラ笑ってやがる。「びびりまくり！」と叫ぶ。「いまの見たか？　あいつらビビリまくってやがんの！　わなにはまったネズミみてぇ！」そしておれたちが背後で部屋のドアにかんぬきをかけると、やつは笑いやめた。「こりゃまいった。もうマジ。あの娘、わかっちゃったよ。もうおれにベタ惚れ」

そしていま、何時間もたったいまになって、こいつはラセルダー——自称カメラマン——がどういうわけかあの娘をモノにしたと思いこんでるのだ。「あいつの部屋にいって、あのクソ野郎を去勢しちゃおうぜ」と真新しいナイフを自分の歯の前でグルグルすばやく動かす。「まさか**おまえが**あの娘をあいつにあてがったの？」

「なあ、おまえそのヤッパをしまってさあ、ちょっと正気になれっての。車を駐車場に入れてこないと」おれはゆっくりとドアのほうに後ずさっていた。何年もヤク連中とつきあってきて、学習することの一つってのは、**あらゆることが**シャレなんかじゃすまないってことだ。人に背中を向けることはできるけど、ヤクに背中を向けちゃいけない――特にそれが、目の前でカミソリみたいに鋭いハンティングナイフをふりまわしてるときには。

「シャワー浴びてろよ。二十分で戻るから」おれは急いでそこを離れると、背後でドアに鍵をかけて、キーをラセルダの部屋に持ってった――弁護士がさっきかっぱらってきた方だ。かわいそうなエテ公、とエスカレータの方へ急ぎながらオレは思った。まったく普通の仕事でここに送り込まれて――バイクやデューンバギーが砂漠で競争してるところをいくつか写真にとるってだけなのに――それなのに、自分でも知らないうちに、ぜんぜん関係ないイカレた世界の腹に飲み込まれちまってる。何が起こってるのか、こいつはどうあがいても絶対に理解できないだろう。

おれたち、ここで何してるんだ？　この旅行の意味はなんだ？　通りにホントに赤いコンバーチブルを停めてあるんだっけ？　なんかヤクにいかれきって狂乱してミントホテルのエスカレータをうろついてるだけなの、それとも本気で**記事を書きに**ラスベガスにきてるの？

ポケットに手をつっこんで部屋のキーを探した。「一八五〇」と書いてある。少なくとも、そこまでは現実だ。だからおれの目下の任務は、車を片づけてあの部屋に戻ることだ……そして願わくば多少はしらふになって、夜明けに何かしら起こることに対処できるようにすること。

さあエスカレータをおりてカジノに入る。サイコロばくちのテーブルのまわりには、相変わらず群衆がびっしり。こいつらいったい何者？　この顔！　どっからきたやつら？　ダラスの中古車業者をマンガにしたみたいな感じ。でもこいつら**本物なんだ**。そして優しい神さまよ、こいつらまったく死ぬほどワンサカいやがる――まだこの砂漠都市のサイコロばくちのテーブルで、日曜の朝四時半にわめきつづけてる。まだあのアメリカンドリームとヤりつづけてる。沈滞しきったベガスのカジノの、夜明け前の最後の一瞬の顔津の中から、こつぜんと大勝利者が生まれてくるという幻想と。シルバー・シティで大当たり。ディーラーを負かして大もうけ。あってもいいか。おれはマネー・ホイールのところ

で止まって、一ドルをトマス・ジェファソンのところに落とした――二ドル札、まっすぐのガイキチ切符。いつもながら、いいかげんな直感の賭がひょっとしたらひょっとするかも、なんて思いながら。

が、まさかね。単にまた二ドルほどが水の泡。このインチキ野郎どもめ！

いや。落ち着け。負けるのを**楽しめる**ようになれ。だいじなのは、この話をそれ自体のやり方で書くことだ。その他のことは『タイム』と『ルック』に任せとけ――とりあえずいまのところは。エスカレータへ向かうところで、『ライフ』の野郎が興奮したように曲がって電信ブースに飛び込むのを見かけた。反対海岸の、どっか小部屋にいる濡れ濡れロボットに自分の叡智をささやきこんでる。いやはや：「夜明けのラスベガス――レーサーたちはまだ眠り、砂漠にはいまだ土ぼこり、そして賞金五万ドルは、カジノ街のまばゆいさなかにある、デル・ウェッブの名高いミントホテルの事務所の金庫で、おぼろにまどろんでいる。緊張はいやがうえにも高まる。そしてわれら『ライフ』取材班もここにいる（いつもながら、頼れる警察の警護つきで……）」間。「そう、交換さん、け・い・さ・つって言ったの。何考えてんの？仮にも『ライフ』特別班なんだからね……」

レッドシャークは停めたままでフレモント通りにあった。おれは駐車場のほうに車をまわして預けた――ドクター・ゴンゾーの車だよ、だいじょうぶ、あ、それとだれか手が空いたときでいいんだけど、朝までにフルワックスがけしといてもらえるとうれしいなあ。うんもちろん――部屋につけといて。

戻ってみると、弁護士は風呂に入ってた。緑の水に浸ってる――下の土産物店で拾ってきた、なんか日本の入浴剤に脂ぎった産物、ついでに真新しいＡＭ／ＦＭラジオを、電気ひげ剃り用のコンセントに差し込んである。フルボリューム。「スリー・ドッグ・ナイト」とか称する代物が歌う、エレミアとか言うカエルが「世界に喜びを（Joy to the World）」望むとかいう御託が流れてる。

まずはレノン、こんどはこれかよ、とおれは思った。お次はなんだ、グレン・キャンベルが絶唱する「花はどこへいったの」でも？

しかしマジでどこへ？　この街には花はない。肉食植物だけ。ボリュームを下げるとラジオの横に、ぐちゃぐちゃに

噛み終わった白い紙のかたまりが見えた。弁護士は音が変わっても気がつかないらしい。緑のスチームの霧の中に消えている。水面から上に見えるのは、頭半分だけだった。

「これ、喰ったの？」とおれは、白い紙をつまみ上げて見せた。

やつはおれを無視した。でもおれにはわかる。この先六時間、意志疎通はえらく苦労することになるぞ。吸い取り紙がまるごと喰われてる。

「この悪どいゲス野郎が。あの袋にソラジンが入ってるよう祈るんだな。さもないと、明日になってひどい目にあうからな」

「音楽！」とやつがすごんだ。「ボリューム上げろ。そのテープかけて」

「テープって？」

「新しいやつ。すぐそこにある」

ラジオを手に取ってみると、それがテープレコーダにもなってるのがわかった——例の、カセットユニットが組み込んであるヤツ。そしてテープ「Surrealistic Pillow」は、ひっくり返すだけでよかった。もう片面は演奏が終わってた——おそらくは壁があろうとなかろうと、百メートル以内のあらゆる部屋で聞こえたにちがいない大音量で。

『ホワイトラビット』。**昇ってく**サウンドがほしいんよ」

「おまえ、もうおしまいだぞ。おれは二時間でここを出る——そしたらヤツらがここへ上がってきて、でっかい棍棒でおまえをボコボコにぶちのめすぞ。その風呂桶の中でな」

「おれぁ自分の墓穴を自分で掘んのよ。緑の水とホワイトラビット……かけろよ。それともこいつに物言わせる気？」

やつの腕が水中から飛び出し、そのげんこつにハンティングナイフが握られている。

「うげげっ」とおれはつぶやいた。そしてこの時点で、こいつはもう救いがたいなと思った——風呂桶に寝っころがって、頭はＬＳＤまみれで見たこともないほど鋭いナイフを持って、まったく道理ってもんが通用しなくて、ホワイトラビットをかけろだと。もうたくさん。この水膨れ頭とはもう、いい加減くるとこまできた感じ。これはもう自殺トリップだな。今度こそやる気だ。もういっちゃうつもりらしい……

「わかった」とおれはテープを裏返して「再生」ボタンを押した。「でも最後の頼みを一つ聞いてくれや。あと二時間だけ時間をくれな？　それだけお願い。明日までに寝る時間を二時間だけ。たぶんかなりやっかいな日になるだろうし」

「もちろん。おれぁおまえの**弁護士だぞぅ**。時間ならいくらでもやる、通常料金で。一時間四十五ドル——でもクッションがほしいって言い出すんだろうから、例の百ドル札でもラジオんとこに一枚置いて、さっさと失せちまえ！」

「小切手でいいか？　ソーツース・ナショナル銀行のやつ。現金化するにもＩＤ不要。やつら、おれを知ってるから」

「なんでも結構」とやつは、音楽にあわせて身をよじりだした。バスルームは巨大なこわれたウーハーの中みたいだ。とんでもない振動、圧倒的な音。床は水浸し。おれはできるだけラジオを風呂桶から離して、そこを後にして背後でドアを閉めた。

ものの数秒で、やつが怒鳴りだす。「助けて！　おいこのバカ野郎！　助けるんだよ！」

おれはあわてて戻った。どうせうっかり自分の耳でも切り落としたんだろうと思って。

だがちがった……やつは風呂場の反対側めがけて、ラジオの鎮座してる白い合成樹脂のたなのほうに手を伸ばしていた。「あのラジオをくれよぅ」とすごむ。

おれはそいつをヤツの手からひったくった。「このうすらバカ！　さっさと風呂桶に戻れ！　くそラジオに近寄るんじゃない！」それをやつの手から引き戻す。ボリュームが上がりすぎていて、Surrealistic Pillow を隅から隅まで暗記でもしていない限り、何がかかってるかもわからないくらいだった……が、当時のおれはまさに隅々まで暗記していたので「ホワイトラビット」が終わったのはわかった。ピークは来て、そして去ったわけだ。

が、弁護士はどうやら、まだイキきってなかったらしい。もっとほしいだと。「巻き戻せよ！　もう一発いる！」と怒鳴る。目はもう狂気まみれで焦点もあってない。最悪の精神的オルガズム寸前って感じ。

「やってくれい！」と絶叫しやがる。「そのクズの限界まで上げてくれい！　それであのウサギが自分の頭をくいちぎるすんばらしいとこに来たら、たのむからそのくそラジオをおれのいる風呂桶に投げ込んでくれい！」

おれはやつを見つめた。ラジオを握りしめたまま。そしてやっと言った。「おれはやだよ。たったいま、四百四十ボルトの牛用ショック棒をそこにつっこむなら喜んでやるけど、このラジオはダメだ——こいつはおまえを吹っ飛ばして

壁をぶちぬくぜ——十秒で即死だぞ」おれは笑った。「ちくしょう、それでおれが**それを説明する**はめになるんだぞ——そっかろくでもない検死官の部屋に引きずられてって、なんでもかでもゴリゴリ詰問されるんだ……そう……もう**ホント細々したとこまで**。おれぁゴメンだね」

「ぬわぁに言ってやがる！　おれは**もっとハイになりたかっただけだ**って言っちゃれよう！」とヤツは叫んだ。

一瞬考える。そしておれは言った。「わかった。おまえの言うとおりだ。たぶんこれが唯一の解決法だな」おれはテープ／ラジオ——コンセントはさしたまま——を手に取って、風呂桶の上に持っていった。「全部おさえたかどうか、もう一度だけ確認させてくれ。『ホワイトラビット』がピークにきたら、こいつを風呂桶に放り込んでほしい——そうだな？」

やつは水の中にもたれて、うれしそうに微笑んだ。「いやあ、そうそう。まったく、いい加減でかけてって、バカな**女中にでも**やらせなきゃダメかと思いかけてたよ」

「心配すんなって。じゃあ、準備いいか？」とおれは「再生」ボタンを押して、すると「ホワイトラビット」がまた盛り上がりだした。ほとんどすぐさま、ヤツがうめいてもだえだした……またもやあの山を全速で駆け上がって、こんどこそてっぺんを越えられると思ってる。目はしっかり閉じられて、ひざっこぞう二つと頭だけが、ギトギトの脂ぎった水からのぞいてる。

歌が高まる間、おれは流しの横のでっかい完熟グレープフルーツを物色した。なかでも一番でかいのは、一キロ近くだった。おれはそのクサレ果物を、ヴィダル・ブルー式にしっかりグリップ——そして「ホワイトラビット」が頂点にくると同時に、そいつを大砲玉みたいに風呂桶にたたきこんだ。

弁護士は狂ったみたいにわめき、肉を求めるサメみたいに風呂桶の中であばれて、なにかをつかまえようとしつつ、水を床中にはねちらかした。

おれはテープ／ラジオから電源コードを引き抜いて、さっさと風呂場を後にした……機械は演奏を続けていたけれど、いまは自前の無害な電池で動いていた。ビートがおさまってくるのを聞きながら、おれは救急キットの袋を開けて目つぶしスプレーを取り出した……まさにその瞬間、弁護士が風呂場のドアをぶち開けて、ふらふら出てきた。目の焦点はまだあってなかったが、ナイフをふりまわして、何かを切ろうとしてるみたいだ。

「目つぶしだ！　こいつを食らわしてやろうか？」とおれは、目つぶし弾をヤツの水っぽい目の前にふりかざした。

ヤツは止まった。「このクズ野郎！」と歯を食いしばって言う。「てめえ、本気で**やる気**だな、おら！」

おれは笑って、目つぶし弾をふりまわしつづけた。「なーに心配してるんだよ。きっと気に入るぜ。けっ、目つぶしハイくらいすごいもんってったらないぜ——四十五分、立ち上がれずに乾いた吐き気、息ができずにあえいで。すっぱり落ち着くだろうよ」

ヤツはだいたいおれの方を見つめて、焦点をあわせようとする。「この安手の白ブタ穀潰しのろくでなし野郎」とつぶやく。「てめえ、本気で**やる気**だな、おら！」

「悪いかよ。へっ、ものの数分前には、おれに**殺してくれ**って言ってたやつが。こんどはおまえが**おれを**殺したいわけ？　このうすらぼけが、まったく、さっさと**サツ**呼んだほうがいいようだな」

やつは色を失った。「サツ？」

おれはうなずいた。「おう、ほかにどうしようもない。おまえがそんなんでうろついてるようなら、おれは絶対眠れないもんな——頭はＬＳＤ漬けで、そのくそナイフでおれを切り刻みたがってるんだから」

やつは目をぎょろっとさせて、それからつくり笑いをうかべようとした。「おまえを切り刻もうなんて、そんなバカな」とつぶやく。「おでこにちょっとＺの字を刻むだけだって——ほんのシャレだよ」と肩をすくめて、テレビの上のタバコに手を伸ばした。

おれはまた目つぶしスプレーでおどかした。「風呂桶に戻れ。レッドでも喰って落ち着けって。マリファナ吸っても、ヘロイン射っても——ええい、なんでもいいからやってろ、でもとにかく少しおれを休ませてくれ」

弁護士は肩をすくめて、放心したようににっこりした。おれの言ったことがすべてもっとも至極だ、とでも言うように。「いやまったく」と非常に誠意をこめて言いやがる。「たしかにおまえ、ちょっと**睡眠が**いるわ。だって明日、**おまえは仕事**だもんな」そして悲しそうに首をふると、風呂場の方へと向きを変えた。「まったくちくしょう、つまんないなあ」そしておれのほうに手を振って見せた。「がんばって休んでな。おれのことは気にせんでいいから」

おれはうなずいて、やつがしおしおと風呂場に戻るのを眺めた——まだナイフは持ってるけど、でもそれを意識はし

てないらしい。ＬＳＤのギヤがシフトしたようだ。次のフェーズはたぶん、あの地獄みたいに強烈な内省的悪夢だろう。四時間かそこら、緊張しいまくった絶望。でも、肉体的なものは何もないし、危険も皆無。おれはやつの背後でドアが閉まるのを見てから、重たい鋭角の椅子を風呂場のドアノブの前にすべらせて押さえ、目覚ましの横に目つぶしスプレーを置いた。

部屋はとっても静かだった。おれはテレビのところへいって、スイッチを入れて空きチャンネルにあわせた——最大デシベルでホワイトノイズ、眠るには最高のサウンド。強力な果てしないヒス音が、変なものすべてをかき消してくれる。

第8章　天才的「手に手をとって世界を囲み、一発だれかが気がつくとショックが輪の全体に走る」ラウンド

——アート・リンクレター

おれが住んでるのは静かなところで、夜中になにか音がしたら、それは何かが起こりそうだってことだ。すぐに目が覚める——いまのはどういうことだ、と思いながら。

ふつうはなんでもない。でもときどき……だからこんな、夜が物音だらけでそのすべてが安全ないつもながらの代物だという都会流のやり方になじむのは難儀だ。車、クラクション、足音……落ち着きゃしない。だからそれをみんな、すが目のテレビからのホワイトノイズのドローンでかき消す。チャンネル間でクズをジャムってうまいことまどろむ……

風呂場の悪夢は無視しろ。ラブ・ジェネレーション[1]からのみっともねぇ難民がまた一人、破滅で頭がいっぱいのかたわが、プレッシャーに耐えきれなかっただけだ。おれの弁護士がずっと受け入れられなかった考え方として——特にドラッグ濫用から立ち直ったやつがよく口走って、とくに保護観察処分のやつがよく言うことだけど——ドラッグを使うより使わないほうがずっとハイになれる、というのがある。

そしてそれを言うなら、このおれだってそんなもの受け入れられやしねーよ。でもまえに、XX通りのドクター・Y

[1] 訳注：トレンディドラマじゃないよー、六〇年代ヒッピー世代のことだよー。

[2]Yのちょっと坂を下ったとこに住んでたことがあるのだ。そいつはもとLSD導師で、あとで薬物による狂乱から超自然意識への長い調薬を果たしたと主張するようになったやつだった。さて、やがて大サンフランシスコLSDウェーブとなるものの最初の隆起のとっかかりくらいのある晴れた午後、おれはこのセンセのお宅にちょっと寄って、LSDについて健全な興味を抱いたご近所に対してこの人が（というのもその頃でさえこの人物は、クスリの権威として有名だったのだ）どんなアドバイスをくれるかな、ときいてみることにした。

　おれは道路に車を停めて、砂利敷きの私道をえっちらおっちら歩いてった。途中でセンセの奥さんに親しみをこめて手をふった。奥さんはでっかい麦わら帽子のひさしの下で庭仕事をしてた……なかなかよい光景、と思った。旦那は室内で、すばらしいドラッグシチューを煮込んでて、こっちでは女房さんが庭にでて、ニンジンの剪定だかなんだか……働きながらハミングしてて、なんの曲かはちょっとわかんなかった。

　ハミング。うん……でもあの音がホントはなんだったのかをおれがやっと認識するまでに、ほとんど十年かかった。オームと唱えて遠くまでいっちゃったギンズバーグみたいに、YYはおれをその**ハミングで追い払おうとしてた**わけ。あの庭にいたのは、奥さんなんかじゃなかった。あれはセンセご当人だったのね——そしてそのハミングは、おれをかれのより高き意識から締めだそうとする必死の試みだったのだ。

　おれは自分の意図を説明しようと何度か試みた。ただのご近所ですよ、お宅から坂を下ったところにある自分の小屋で、LSDをガブ飲みしようかってことについて、センセのアドバイスがほしいなと思って訪ねてきたんですって。まあ、確かに武器は持ってますよ。そしてそれを撃つのも好きです——特に夜中、でっかい青い火柱がたって、ものすごい音がするの……それとそう、弾丸も。うん、それは無視できませんよね。でっかい鉛／合金のかたまりが、最大秒速千二百メートルで谷を飛び回る……

　でも、いつだって手近の丘に向かって撃つか、それがダメなら闇に向かって撃ってたんですよ。悪意があったわけじゃなくて、単に爆発が好きなだけで。それに、食べられる以上は殺さないように気をつけてたんです。

　「殺す？」おれは、庭でうろついてるこの生き物に、「殺す」ということばをまともに説明しようがないってことを理

[2] 原注：出版者の弁護士の強固な主張により名前は削除。

解した。こいつは肉を喰ったことがあるのかな。「狩る」って動詞を活用させたりできんのかね。飢えってわかる？　あるいはその年のおれの収入が、週平均たった三十二ドルだったという最低の事実は把握できる？

うんにゃ……ここではコミュニケーションの見込みはまったくない。おれはそれを認識した――が気がつくのが遅すぎたおかげで、ドラッグセンセはおれが私道を下って車に乗って山道を下るまでずっとついてきてハミングしてた。ＬＳＤは忘れろ、と思ったね。おかげで**あの**哀れなウスラボケがどうなったか見てみろや。

だからおれはハッシシとラムに専念してもう六ヶ月くらい過ごしたんだけど、そこでサンフランシスコに引っ越して、ある晩ふと気がつくと「フィルモア公会堂」ってとこにいた。それでまあなるようになった。灰色の砂糖のかたまりで、**ドーン**。内心でおれは、あのセンセの庭にモロ舞い戻ってた。しかもその表面だけじゃなくて、**その奥底**にまで――あの見事に耕された土から、なにやらミュータントキノコみたいに顔をのぞかせて。ドラッグ爆発の犠牲者。天性のストリートのガイキチ、手に入ったものはなんでも食べる。あるときマトリックスで、道のヤツが背中にでっかいパックを背負って入ってきて、こう叫んだ。「だれかＬ……Ｓ……Ｄ……とかいらない？　材料はぜんぶここに揃ってんのよ。あとは料理場所さえあれば」

支配人がたちまちそいつにとびついて、こうつぶやく。「落ち着いて落ち着いて、まあとりあえず事務所へ」その晩以降、そいつは二度と見かけなかったけれど、連れ去られるまえにその道のヤツは試供品を配ってたのだ。でっかい白いスパンスルだった。おれは便所にいって、自分の分を食べた。でもまずは**半分だけ**、と思った。いい判断だけど、その状況では実行がむずかしい。最初の半分は食べたけど、残り半分は赤いペンドルトンシャツの袖にこぼしてしまった……そして、それをどうしようかと思案しているところへ、ミュージシャンの一人が入ってくるのが見えた。「どうしたの？」とそいつ。

「うん、このおれの袖の白いもの、ぜんぶＬＳＤなの」

そいつは無言。いきなりおれの腕をつかんで、それをしゃぶりだした。なんとも醜悪なタブローだね。もしキングストントリオ／若手証券マンタイプが入ってきて、この現場を目撃しちゃったらどうなるだろうな。そんなヤツくたばりゃいいや。うまくいけば、そいつの一生台無しだ――自分のお気に入りのバーではどこも、せまいドアの陰で、赤いペン

ドルトンシャツの男がまったく理解できないことでものすごい刺激を味わってるんだ、と永遠に思いこんだりして。そいつも敢えて袖をしゃぶってみたりするかね？　たぶんしない。安全に安全に。見て見ぬふりがいちばん……

ラスベガスのこの不穏な一夜に、変な記憶がよみがえる。もう五年？　六年？　一生分が過ぎたみたいな木がする、あるいは人生の主要な時期は過ぎたような——ああいうピークは二度とこない。六〇年代半ばのサンフランシスコは、その一部でいるのがとても特殊な時と場所だったのだ。ひょっとしてあれには**なんか意味があったのかもしれない。**なかったのかも、長期的にみれば……でも、自分が世界と時間のあの一角にいて、そこで生きてたって感覚は、どんな説明をもってしても、どんなことばや音楽や記憶のミックスをもってしても、触れることができない。どんな意味があったにしても……

歴史ってのはなかなか知り得ない。なぜってそのすべてが雇われもんの出鱈目だからだけど、でも「歴史」なんてのがよくわかんなくったって、ときどき、ある世代のエネルギー丸ごとが、長く見事な一閃となって頭にきちゃって、その理由はその時代のだれにもほんとうにはわからないのだ——そしてふりかえってみても、何がホントに起こったのかは絶対に説明できない——そういうことがあるのだ、というのはまったくの事実だろう。

あの時代のおれの核心的な記憶ってのは、ある一夜、それとも五回くらいあったか、あるいは四十夜くらいかも——それに夜じゃなくてすごい早朝だったかな——、とにかくフィルモアを半分狂って後にして、家に帰るかわりにでっかいライトニング六五〇を、ベイブリッジに向けて時速一六〇キロで走らせて、L・L・ビーンのショーツとビュッテの羊飼い用ジャケットを着て……トレジャーアイランド・トンネルを、オークランドとバークレーとリッチモンドの光目指して疾走して、どの出口でおりるべきか実はよくわかってなくて、そのうち反対側についちゃって（料金所ではいつももたつく、小銭探してガサゴソする間にギヤをニュートラルにするのも忘れるくらいイカれてるから）……でもどっちの方向にいっても、いずれ自分と同じくらいハイでイカレた連中のいるところにたどりつくってのが、もう絶対に確信できてたのだ。それについては何の疑問もない……

あらゆる方向に、あらゆる時間に狂気があった。ベイの反対側でなければ、ゴールデンゲートブリッジを越えても、一

○一号線を下ってロスアルトスやラホンダに行ってもいい……どこへ行っても火花が散るんだ。おれたちのやってることは、なんであれ**正しいのだ**、おれたちが勝ってるんだという、すばらしい世界的な感覚があった……

　そしてそれがハンドルだった、んだと思う――あの古くて邪悪な勢力に対する勝利がまちがいないって感覚。それは軍事的な意味での勝利ではまったくない。そんなのは必要なかった。おれたちのエネルギーが単純に**広まり栄える**。戦ったりするのは無意味だった――こっち側だろうとあっち側だろうと。勢いは完全にこっちのほうにあった。おれたちは、高くて美しい波の頂点に乗ってたんだ……

　だからいま、その後五年もたっていないいま、ラスベガスの急な丘をのぼって西を見てみろよ。しかるべき目さえ持ってたら、波の最高点のあとがほとんど**見える**から――あの波がついに砕けて引いていった、まさにその地点が。

第9章　悪魔を憐れまない歌……記者陣が拷問に？……狂気へ逃亡

逃げ出そうって決断はいきなりやってきた。いや、実はそうじゃないのかも。実は前からずっと計画してたのかも──無意識のうちに、いい頃合いを見計らってたのかもしれない。請求書も原因の一つだった、と思う。だって、払う金がないのですもの。それに、あの悪魔じみたクレジットカード立て替え／払い戻しみたいなのも、もうやだ。シドニー・ザイオンとの一件があってからは。連中、あのあとでおれのアメリカン・エクスプレス・カードを差し押さえて、いまやあんチクショウども、おれを訴えやがった──しかもダイナーズクラブや国税庁といっしょになって……

それに、法的な支払い義務は雑誌社にあるのだ。弁護士がそれは確認してる。おれたちは何にもサインしてない。ただしルームサービスの伝票は除く。請求額合計がいくらになってるのかは知らないけど──ちょうと出かける前に──弁護士が計算したところでは、おれたちは一時間あたり二十九ドルから三十六ドルを使ってることになる。それも四十八時間ぶっ続けで。

おれは言った。「驚いちゃうね。どうしてこんなことに」

でもおれがこの質問を発したときには、だれも答えてくれる人はまわりにいなかった。弁護士は消えてた。

ヤツもヤバいのを感じたんだろう。月曜の夜に、やつは立派な牛革旅行セットをルームサービスで注文すると、ロサンゼルス行きの次のフライトを予約してあるんだと言う。急がないと、と言って、空港への道中で飛行機のチケット代として二十五ドルおれに借りてった。

ヤツを見送って、おれは空港のみやげもの店に戻ると、手持ち現金の残りすべてをゴミクズに費やした――完全なウンコばっか、ラスベガスみやげ、プラスチックの偽物ジッポ・ライターにルーレットがついたものが六ドル九十五セント、ＪＦＫ二つ折り紙幣クリップが一つ五ドル、サイコロをふるブリキのサルが七ドル五十……おれはこの手のガラクタをしこたま買い込んで、それをグレート・レッド・シャークまで抱えていって、全部後部シトにぶちまけた……それから非常に威厳ある態度で運転席についた（ホワイトトップは、いつもながら畳んであった）。そしてそこにすわってラジオをつけて考え出した。

ホレーショ・アルジャーならこの状況にどう対処するだろうか？

One toke over the line, sweet Jesus … one toke over the line.

パニック。それがＬＳＤ狂乱の最初のふるえが上ってくるみたいに、おれの背筋をはい上がってきた。いろんな最悪の現実が、だんだんおれにも見えだしてきた。いまやおれはラスベガスにひとりぼっち、こんなすさまじくクソ高価な車に乗って、クスリでよじれきって、弁護士もなし、現金もなし、雑誌用の記事もなし――そしておまけにそいつに輪をかけて、すさまじく膨大なホテルの請求書をなんとかせにゃならん。おれたちは、人間の手が運べるものならなんでもかんでも、あの部屋にもってこさせてるのだ――半透明ニュートロジーナせっけん約六百個を含め。

車中がそれだらけだった――フロアも、シートも、グローブボックスも。弁護士がなんだか知らないが、おれたちのフロアのスペイン・インディアン混血女中どもとなんだか取引をして、このせっけんを部屋に運ばせた――この気色悪い半透明のせっけん六百個――そしていまや、全部おれのもんだった。

それといっしょに、プラスチック製のブリーフケースがフロントシートの横にあるのがふと目に入った。そのブツを手にとった瞬間に、中身がわかった。まともな神経のサモア人弁護士なら、商用航空路線の金属探知器ゲートにでっかい黒い.357マグナムなんか持ったまま飛び込んだりはしないもんな……

だもんで、おれに配達しろってんで置いてったわけだ――なんとかロスまで戻れたら。さもなけりゃ……うん、自分がカリフォルニア高速警察に弁解してる様子がまざまざと聞こえるぜ。

え？　この武器ですかい？　この装弾済み未登録隠匿ひょっとして使用形跡ありの.357マグナムのこってすかい？　な

んでこんなの持ってるかって？　ええ、いやあねおまわりさん、実はね、メスカルスプリングス近くでちょっと道をはずれて——これはおれの弁護士の助言にしたがったまでなんだけど、その弁護士はその後、失踪しちゃいまして——するといきなり、この無人の温泉のまわりに特にこれって理由もなしにうろついてますとですねえ、なんかヒゲ面のチビ野郎がどっからともなく現れて近づいてきまして、こいつは片手におっかないリノリウムのナイフと、片手にこのでっかい黒いピストルを持ってたわけなんですよ……それでカリー軍曹の思い出に、わたしのおでこにでっかいXを刻んでやろうとか言いまして……でもわたしが、自分はジャーナリズム博士だって言ったらこいつは態度をコロッと変えたんですわ。ええおまわりさん、信じられないでしょうけど、いきなりこいつはナイフをわたしらの足下近くにあった、塩気のあるメスカルの泉に投げこんで、それからこのリボルバーをわたしにくれたんですよ。ええ、あっさりわたしの手に、握りの方から押し込んで、それから闇の中へと駆け出してったんです。

だからなんでこの武器を持ってるかというと、そういうことなんですわ。いやぁおまわりさん、信じられますか？

まさかね。

でも、このクズを捨てるつもりもなかった。最近では、いい.357はなかなか手に入らないもんな。

というわけでまあおそらくは、ふん、このガラクタをマリブまで持って帰れば、そしたらこいつはおれのもんだ。おれがリスクを冒すんだから、おれのピストルだ。完璧に筋通ってるではないの。そしてあのサモアブタに異論があるようなら、こっちの家までわめいて押しかけてくる気なら、大腿部から半ば上がったところでこのガラクタを味あわせてやるといい。まったく。半分薬きょう入りの鉛／合金一五八グレン、それが秒速五〇〇メートルで移動すると、サモアハンバーグ二〇キロに骨の破片ミックスのできあがり。いいじゃん。

狂ってる、狂ってる……そしてその間、ラスベガス空港の駐車場でグレート・レッド・シャークで一人きり。バカ野郎、パニクってる場合か。しっかりしろ。落ち着け。この先二十四時間は、この自制心ってやつがすごくだいじになってくる。こうしておれは一人きりでこの腐った砂漠の真ん中にすわってて、まわり中は武装ガイキチだらけで、さらにとてもヤバい危険物質や恐怖や法的に問題アリの代物を車いっぱいにつめこんで、それを絶対にロサンゼルスまでもって

かえらなきゃならない。だって、こんなところでとっつかまったら、おしまいだもん。完全マジでヤバい。それはもうまちがいない。州立ブタ箱の週刊新聞編集なんて、ジャーナリズム博士に未来はないぞ。この先祖帰りじみた州からはさっさと出てくに限る。そうだ。でもまず――ミントホテルに戻って、五〇ドル小切手を現金化して、部屋に戻ってクラブサンドイッチを二つ、ミルク二リットル、そしてバカルディ・アネホを一／五注文しなきゃ。

今晩乗り切るには、ラムが絶対不可欠になる――このメモ、恥ずかしい日記にみがきをかけるには……テープを一晩中、フルボリュームでがなり続けさせるんだ。「Let me introduce myself ... I'm a man of wealth and taste.”

憐れみ?

おれは結構。ラスベガスの犯罪性ガイキチには情け容赦なし。ここは軍隊みたいなとこ。サメの倫理が最強だ――ケガしたやつを食え。閉鎖社会でみんな有罪なら、唯一まずいのはつかまることだ。泥棒だらけの世界では、唯一の最終的な罪は、愚かさだけ。

ラスベガスのホテルで朝四時にすわってるのは変な気分だ。一日七十五ドルのスイートに押し込められて、手元にはノートとテープレコーダと、過去四十八時間分の完全な狂気の中で積み上がった、すさまじいルームサービス請求書――しかも、夜が明けるが早いか、一銭も払わずにここをぶっちらばるのがわかってるってのは……ロビーをどかどかぬけて、ガレージから赤いコンバーチブルを持ってこさせて、マリファナと非合法武器いっぱいのスーツケースをもってそこでじっと待つ……さりげないふりをしつつ、ラスベガス・サン紙の早版をに目を通す。

これが最後の一歩だ。もう数時間前に、グレープフルーツ全部とその他の荷物は、車に運び出してあった。

あとは絞首刑を逃れるだけ。そう、きわめてさりげないふるまいで、キョロキョロ不安な目は、サイゴンミラー式サングラスに隠し……シャークがガレージから出てくるのを待つ。どこだ?　あの車係と称するろくでなしポン引き野郎に五ドルやったぞ。この状況ではきわめて有益な投資だ。

落ち着いて、新聞を読み続けろ。トップ記事では、一面のてっぺんを全部使って青い見出しが絶叫してる。

トリオ再逮捕

クラーク郡検屍官事務所の発表では、先週冷蔵庫に詰め込まれた死体として発見された美女ダイアン・ハンビー（19）の公式な死因は、ヘロインの過剰摂取。保安官の殺人捜査官が容疑者の逮捕に向かったところ、その一人である二十四歳女性は保安官助手たちに止められる前に、トレーラーのガラス戸を破って投身をはかった。捜査官によると、彼女は明らかに不安定な精神状態で、「生きて捕まるくらいなら」と叫んだとのこと。しかし彼女にケガはなく、捜査官たちはこの女性に手錠をかけて逮捕した（後略）

麻薬によるGI死亡増

ワシントン（AP）――議会小委員会報告によると、非合法麻薬によって死亡したアメリカGIは昨年で一六〇人にのぼる――うち四〇人がベトナムにいた（中略）同報告によれば、アジアと太平洋部隊での死者五十六名についても、麻薬疑惑があるとのこと（中略）ベトナムでのヘロイン問題は深刻さを増しており、これはおもにラオスやタイ、ホンコンの精製工場のため。「ベトナムでの麻薬取り締まりはほとんどまったく機能していない。これは一つには現地の警察が機能していないためであり、またいまのところ正体不明の汚職官僚たちが麻薬販売に関与しているためだと見られる」と同報告は述べている。

この陰気な記事の左側には、四段ぶちぬきで、「徴兵管理局本部への入り口でシットインを行い入構を妨害した反戦デモ」と戦うワシントンDCの警官たちの写真が紙面中央に載っていた。

そしてその写真の横には大きな黒い見出し。**「戦争公聴会で語られる拷問の実態」**

ワシントン――昨日、非公式の議会パネルにおいて、自発的証人たちが語ったところによると、かれらは一群の尋問官としての職務において、日常的に電話の盗聴やヘリコプターによる襲撃を行ってベトナム人囚人

を拷問し、殺していたと夫当たった。ある陸軍諜報専門家は、自分の中国人通訳が銃殺されたことについて、上司は「どうせあれはただのアジ公だし」つまりアジア系人種だから、と弁解したとのこと（後略）

この記事の真下の見出しにはこうあった。**ＮＹＣ tenement 近くで五人重軽傷**……ある男がビルの屋根から、特にはっきりした理由もなく発砲したためだと。この記事は、次の記事のすぐ上にあった。**薬局店主、徹底調査で逮捕**……記事の説明だと、これは「危険薬物とされるもの十万錠以上が不足しているという（ラスベガス薬局の）予備調査の結果」とのこと……

　この一面を読んで、おれはずっと気分がよくなった。こういう凶悪なのを背景にすると、おれの犯罪なんざぁ色あせた無意味な代物にしか見えない。おれなんか、比較的立派な市民じゃん——複数の犯罪は犯してるかもしれないけれど、でも危険人物ってわけではぜったいない。そしてあの天の大スコア係がおれの採点をするときには、これはまちがいなく効いてくるはず。

　そうでもないかな。スポーツ面をめくると、モハメッド・アリについて小さな記事が目に入った。アリの裁判が高等裁判所での最終弁論に入っていた。アリは「アジ公」を殺すのを**拒否した**ために、懲役五年を言い渡されていた。

「おれはベトコンに何の恨みもない」とかれ。

五年。

第10章　ウェスタンユニオン介入：ヒーム氏から警告……スポーツデスクから新任務と警察からの荒々しき招待

突然、また後ろめたい気分になった。シャークは！　どこだ！　おれは新聞を横に投げ捨ててウロウロしはじめた。自制がきれてきた。演技が総くずれ……と、そのとき、車が見えた。隣のガレージのランプをスイスイと下りてきている。Deliverance! おれは革かばんをつかむと、ハンドルに出会うべく移動を開始した。

「**デュークさん！**」

肩越しに声が聞こえた。

「デュークさん！　探しましたよ！」

おれはほとんど歩道でくずおれそうになった。脳と体の全細胞が脱力。いやだ！　これはただの幻覚だ。背後にはだれもいないぞ、だれも呼んでやしない……パラノイドの妄想、アンフェタミンの神経症だ……ひたすら車にむかって歩け、ずっとニコニコしつつ……

「**デュークさん！**　お待ちください！」

まあ……いっか。牢屋で書かれた名作も多いことだし。それにカーソンシティでは、おれもまったく知り合いがいないわけじゃない。所長は覚えているはず。それとペテン師の親玉も――前に『ニューヨークタイムズ』の記事でインタ

ビューしたんだ。ほかにもペテン師多数、看守、おまわりやその他詐欺師もろもろ、そいつらみんな、記事が一向に出ないので、とても険悪な手紙をよこすようになってた。

なぜ記事が出ないんだ？　とやつらは聞く。連中は、自分たちの話を語ってもらいたかったんだ。そして理由を説明するのは難しかった。あの手の業界では、連中がおれに話したようなことはすべてゴミ箱行きか、よくてもどん詰まりファイル送りで、それというのも、おれがその記事用に書いたリード部分が五千キロ彼方のどっかの編集者のお気に召さなかったから――ジャーナリズム官僚主義の臓腑の中にいる、グレーの合成樹脂製デスクにすわった神経質なウダウダ野郎、ネバダ州のペテン師にそれをわかれと言ったって無理だ――そしてその記事は、おれがなんとしてもリードを書き直さなかったので、蔓からもがれぬまま死んでしまった。おれにはおれの理由があって……

が、その理由も監獄の中庭ではあまり理解されないだろう。でも、ま、いっか。細かいことを心配してどうなる。おれは振り向いて、わが糾弾者と対面した。小柄な若いフロント係で、顔にでっかい微笑と、手には黄色い封筒を持っている。「お部屋にお電話したんですが、ちょうどここにいらっしゃるのが見えたもので」

おれは、抵抗するには疲れすぎて、うなずいた。もうシャークはすでに横にきていたけれど、カバンを投げ込むことさえ無意味に思えた。ゲームセット。捕まった。

フロント係はまだニコニコしている。「あなた様宛にちょうどこの電報が届きまして。でも、実際はあなた様宛**ではありませんで**。トンプソンとおっしゃる方宛なんですが、でもラウール・デューク**気付**となっているんです。おわかりになりますか？」

めまいがする。一気に頭に入れるには話がでかすぎた。自由から監獄へ、そしてまた自由の身へ――それがたった三十秒の間に。おれはよろよろと後ずさって車にもたれ、キャンバストップを畳んだ白いかたまりが手の下にあるのが感じられた。フロント係はまだニコニコしつつ、おれに電報をつきつけている。

おれはうなずいた。ほとんど口もきけない。やっとこう言った。「わかるよ。完全に」そして封筒を受け取って破いて開いた。

ハンター・S・トンプソン
ラウール・デューク気付
ラスベガス　ミントホテル
防音スイート　一八五〇号室

スグレンラクセヨ　アスカララスベガスデシンニンム　カエルナ　ゼンベイケンサツカンカイギノ　マヤクトウキケンヤクブツセミナー　デューンズホテルニテ　ヨッカカン　ローリングストーンズガ　５マンゴ　シハライタイキンケイヒボウダイ　サンプルイッパイ　フラミンゴホテルト　シロイキャデラックコンバーチブルヲヨヤクズミ　バンジテハイズミ　シサイスグレンラクセヨ　シキュウ　シキュウ

ドクター・ゴンゾー

「どっひゃー！　まさかこんなことが！」とおれはつぶやいた。

「とおっしゃいますと、あなた様宛ではないんでしょうか」とフロント係が急に心配そうな様子になった。「このトンプソンという方を宿泊者リストで探したんですが見つかりませんで、でもあなたのチームの方だろうと思ったんですが」

「いやそうだよ。心配するな。ちゃんとわたすよ」とおれは急いで言うと、カバンをシャークの助手席に投げ込んだ。でも、フロント係はまだ興味津々だった。

「ドクター・ゴンゾーはいかがです？」

おれはそいつをにらみつけて、サングラスのミラーをたっぷり味わせてやった。「元気だよ。でもムシの居所が悪くてね。ドクターはわれわれの予算面を管理して、**手配をすべて**任されてるから」おれは運転席にすべりこむと、出発しよ

うとした。

フロント係が車にもたれかかってくる。「わたくしどもが混乱いたしましたのは、このロサンゼルス発の電報にドクター・ゴンゾーの署名があったことなんです——ドクターが当ホテルにおいでになるはずですのに」と肩をすくめた。「そしてこの電報が、当方の記録のないお客様宛となっていたもので……ですからお届けが遅れたのもやむを得ないということで、どうかご理解いただきたいと……」

おれは逃げ出したくてウズウズしながらうなずいた。「見事な処置だよ。プレスのメッセージはまともにわかろうとするもんじゃない。半分くらいは暗号だ——特にドクター・ゴンゾーがらみのヤツは」

やつはまたにっこりしたが、こんどのはちょっとばかり不自然だ。「少々うかがいますが、ドクターはいつ頃お目覚めになるでしょうか？」

おれはハンドルを握ったままこわばった。「お目覚め？　というと？」

やつはもじもじしていた。「ええ、それが……支配人のヒームが、ドクターに**是非ともお目にかかりたい**と申しておりまして」いまやそいつの笑みは、どうみても悪意に満ちたものになっていた。「特に変わったことではないんです。ヒームは**大口の**お客様とはみんな会わせていただきますもので……個人ベースでのおつきあいをさせていただくと申しますか……ちょっとしたおしゃべりと握手くらいですので、ご理解いただければと」

「もちろん。でもわたしがあんたなら、ドクターが朝食をすませるまではそっとしておくね。あれはなかなか粗野な男だから」

フロント係はいやいやながらという感じでうなずいた。「でも**お目には**かかれるんでしょう……たとえば今日の午前中遅くなどでも？」

こいつが何を言いたいのかわかった。「いいか、あの電報はまるでごっちゃになってる。あれはホントはトンプソン**からの**電報で、トンプソン**宛**じゃない。ウェスタンユニオンが名前をまちがえたんだろう」おれは電信を掲げて見せた。こいつが読んだのはもうわかってるのだ。「こいつが**何かというと**、これは上にいるドクター・ゴンゾー宛の速報だ。トンプソンがＬＡから新しい仕事をもってやってくる、という連絡なんだよ——あたらしい業務命令だ」おれは手を振って

やつを車から追い払った。「じゃあまたな。レース場にいってこないと」
やつが後ろに下がって、おれは車をローギヤに入れた。「あわてることはないですよ」とおれの背後からやつが言う。
「レースはもう**終わってます**」
「わたしにとっては終わってないの」と、やつに親しげにさっと手をふってやった。
「昼食でもごいっしょにいかがです！」通りへと曲がるときにやつが呼びかけた。
「いいかも！」とおれは怒鳴った。そして道路の交通にまぎれる。メイン通りを逆方向に数ブロック流してから、Uターンして南へ、ロサンゼルス方向を目指した。でも慎重に配慮した速度でもって。クールにゆっくりと、と思った。市境まで、**なんとなく流れて**いくんだ……
必要なのは、安心して道をはずれて、人に見られずに、弁護士からのこの驚異的な電報についてよう考えてみることだった。電報の中身はほんとうだ。それについては確信できた。メッセージには圧倒的な本物の緊急性がこもっていた。この調子は絶対まちがえっこない……
でもおれは、ラスベガスでもう一週すごすような気分でも状態でもなかった。いまはダメ。この街の分のツキは、とことんまで使い果たしきっていた……もうギリギリのとこまで。そしていま、ハイエナどもが包囲をせばめてきてる。あの醜いケダモノどものにおいが**プンプンして**きやがる。
うん、こりゃ絶対に引き時だ。もう余裕がゼロにまで縮みきってる。
いまやラスベガス大通りをゆっくりと、時速四十五キロで流しながら、おれはどっか休憩して腹を決める場所がほしかった。もちろん決意はできていたんだけれど、でもビールを一〜三杯飲んでこの決断を不動にして、そしてずっと反対を唱え続けてる、あのたった一つ残った反抗的な神経の端っこを麻痺させることが必要だった……
この反抗的な神経は、なんとしても始末しておく必要がある。というのも、ここに残るべきだという議論、めいたもの、は確かに存在したからだ。あらゆる意味で、インチキ臭い、ばかばかしいイカレた代物だった――が、最後のドラッグエピソードとなるかもしれない事態にとらわれたゴンゾー・ジャーナリストが、麻薬等危険薬物にカンする全国検察官カイギの取材をするよう招かれるという思いつきには、よじれたユーモアのにおいが漂っているのも、これは否定し

ようもない。

さらに、あるラスベガスのホテルに冷酷にもすさまじい大損をこかせたあげく——ロサンゼルス行き高速道路の上で呪われた逃亡者になるかわりに——単に街を横切って、赤いシボレーを白いキャデラックに変えて、**別の**ラスベガスのホテルにチェックインして、アメリカ全土の何千というサツ高官どもが、ドラッグ問題についてお互いに口角泡を飛ばすのに混じれるプレス資格をもらうというのは、なかなかにゆがんだ魅力ある考えなのは事実。

危険なキチガイ沙汰ではあるけれど、崖っぷち仕事の真の愛好者であれば肯定できるであろう類のものでもある。たとえば、ダウンタウンのホテルをだましたばっかのドラッグまみれ詐欺手配犯をラスベガス警察が探すとしたら、**いちばん探しそうにない**のはどこだろう。

その通り。目抜き通り沿いのエレガントなホテルでやってる、全米検察官のドラッグ会議のどまんなか……輝く白いクーペ・ド・ヴィルでシーザーパレスのトム・ジョーンズディナーショーに乗りつけて……あるいはデューンズの、麻薬捜査官夫婦向けカクテルパーティ?

確かに、隠れ場所としてこれ以上のとこがあるか? **一部の人なら**そうだろう。でも、おれはダメだ。そしておれの弁護士は、絶対にダメだ——こいつは人間が胡散臭すぎる。しかも一人ずつだったら、なんとかごまかしおおせるかも。でも二人いっしょとなると、無理だ——完全にばれる。この組み合わせには、あまりに攻撃的な嗜好があり過ぎる。意図的に、ヤク切れの狂乱状態をやってみようという誘惑が強すぎる。

そしてそんなことをしたらもちろん、おれたちはおしまいだ。連中、手加減は一切してくれないだろう。内通者たちの内通をしようというのは、あらゆるスパイの運命を受け入れるってことなんだから。「いつものように、きみや、きみの組織のチームのだれであれ的に捕獲された場合、その存在などについて当局は一切関知しない……」

いや、こりゃあんまりだ。狂気とマゾヒズムの境界線もすでにぼんやりし始めている。そろそろ手綱を引く頃合いだ……引退して、引きこもって、後退していわば「逃げ出す」。いいじゃないか。この手のギグではすべて、どっかで負けを受け入れるか、勝ちを精算するときがやってくる——どっちかは状況次第。

おれはゆっくり車を流して、早朝ビールを飲みつつ落ち着いて考えをまとめられる場所を探した……この不自然な退

却を計画すべく。

第11章　Aaaw, Mama, Can This Really Be The End?　…ベガスでどん底脱出、またもアンフェタミン狂乱か？

水曜日、朝九時……ラスベガスのはずれにある「ワイルド・ビル・カフェ」にすわっていると、すべてがはっきり見えてくる。ロサンゼルスへの道は一本しかない──アメリカインターステート十五号線、裏道や迂回路のないまっすぐな道で、ベーカーからバーストウからベルドゥーを通る真っ平らな高速とばし屋道路で、それがハリウッドフリーウェイに続いてそこから直にハリウッド・フリーウェイにのって、そのまま狂乱の意識喪失状態へ。安全、匿名、ガイキチ王国のガイキチがまた一人ってだけ。

でもその一方で、これから五、六時間にわたって、おれはこのろくでもねぇ邪悪な路上でいっちゃんヤバイ存在となるわけだ。ビュートとティファナの間で唯一の、炎リンゴ赤のシャーク・コンバーチブル……ハンドルを握るのは半裸の発狂ゴロツキで、それがこの砂漠の高速をすっ飛ばす。紫と緑のアカプルコシャツは着たほうがいいのかな、なにも着ないほうがいいかな？

この化け物の中では隠れ場所なんかない。

これはあまりうれしい走りにはならないぞ。太陽神ですら見たくないらしい。太陽はこの三日間で初めて、雲の後ろに隠れあそばしやがった。太陽まったくなし。空は灰色で汚らしい。

ちょうどワイルド・ビルの裏通り駐車場に車をまわしたところで、頭上で轟音がきこえ、見上げるとおっきい銀色の煙をひくＤＣ８が離陸したところだった――ハイウェイ上空訳八百メートル。ラセルダは乗ってるのかな。『ライフ』野郎は？　必要な写真はちゃんととれたのかな。事実関係は？　あいつらは自分の責任を果たしたんだろうか。

　おれのほうは、だれがレースに勝ったのかも知らなかった。だれも勝ってないのかも。おれの知る限りでは、イベントそのものがものすごい暴動で中止になったはず――めちゃくちゃな暴力の狂宴が、ルールにしたがうのを拒否した呑んだくれのゴロツキどもによって引き起こされたんだと。

　なるべく早い機会に、この自分の知識のギャップを埋めておきたかった。ＬＡタイムズを勝って、スポーツ欄をさらってミント四〇〇記事のネタにする。細かい話をつきとめる。自分で取材する。逃亡中ではあっても、深刻にビビり入ってても……

　あの飛行機にラセルダが乗ってるのはわかってた。昨晩、朝一の便をつかまえると言ってたから。
で、やつはいっちっち……そしておれはここで、弁護士なしで、ワイルド・ビル酒場の赤いプラスチックスツールにだらしなくすわって、早朝のポン引きやピンボール詐欺師の早朝ラッシュでちょうど活気づいてきたバーで、神経とがらせつつバドワイザーをすすってる……ドアのすぐ外にはでっかりレッドシャークがあって、そいつは刑事犯罪の固まりみたいな代物で見るのもこわいくらい。

　でもこのポンコツを捨ててくわけにはいかない。唯一の希望はどうにかしてここからサンクチュアリまでの五百キロの公道でそいつを陸送することだ。でも神さま、もう**疲れた！**　こわい！　イカレてる。この文化にボコにされた気分。おれはいったいぜんたい、こんなとこで何してんのよ。そもそもおれが書くはずの記事ってこれじゃないだろ。エージェントもこのことは警告してたよな。しるしは全部否定的だったのに――特にあのポロ・ラウンジでピンク電話を持ってた邪悪な小人野郎。あそこにずっといればよかった……**これ**以外ならなんでもいい。

Aaaaww...Mama
can this really be the end?

やめてくれ！

だれだ、いまの曲をかけたのは？　ホントにおれは、あのクソをジュークボックスで聞いたのか？　ワイルド・ビル酒場の汚らしい灰色朝の、九時十九分に？

いいや。ありゃおれの頭の中だけだ、トロントでのつらい夜明けの遠い昔に失われたこだま……もうずっとずっとむかし、別世界で半狂乱……でもぜんぜん変わってねぇや。

助けて！

このろくでもないクズ、あと幾夜、あと不気味な朝いくつ続くことになるんだろう。からだも脳も、この呪われきった狂気にいつまで**耐えられる**んだろう。この歯ぎしり、この冷や汗、このこめかみの血管の動悸……目の正面の小さい青い静脈が完全に制御不能になって、六〇と七時間にわたり睡眠なし……

そしてありゃ**ホントに**ジュークボックスじゃないか！　うん、まちがいない……そして、そんな変な話でもないか。とってもはやった歌だもん。「Like a bridge over troubled water… I will lay me down…」

ドーン。偏執狂印チカチカ。**ほかでもないあの**曲を、いま、この瞬間にかけるなんて、なんつーケチなロクでなし野郎だぁっ！　だれか、おれを尾けてきやがったな。女バーテンがおれの正体知ってるとか？　このミラーグラスをかけたおれが**見える**っての？

バーテンって人種はみんな腹黒いやつらばっかだが、こいつは渋いツラした中年のデブ女で、ムウムウにアイアンボーイのオーバーオールを着てやがる……たぶんワイルド・ビルの女だろう。

まったく、偏執狂、狂気、ビクビクゲロゲロの悪しき波――この場の波動は耐え難い。出よう。逃げろ……そして突然気がついたのが、最終的に闇に押さえ込まれる前の、キチガイじみた小ずるさの最後の一閃というか、おれの法的なホテルのチェックアウト時間は**正午まで**あるってこと……ってことは、おれが法の目から見て逃亡者となるまでに、最低でも二時間は合法のままで高速運転をして、このろくでもねぇ州をおん出られるってことだ。

なんとラッキー。警報がなり響く頃には、おれはニードルスとデスバレーの間のどっかで全速力で走ってられる――

アクセルをフロアぶち抜くくらいに踏み込んで、FBIのスクリーミング・イーグル・ヘリコプターでこっちに急降下してくるエフレム・ジンバリスト・ジュニアにむかってげんこつをふりあげてる。

逃げてもいいが、隠れはできない[1]

くたばれエフレム、そのこざかしいせりふ、そっくりお返しするぜ。

てめぇとミントの連中の知る限りでは、おれはまだあの一八五〇号室にいることになってて——実際の肉体はさておき、法的にも霊的にも——ドアの外には「Do Not Disturb」の標識がかかってて、じゃまが入らないようになってる。女中どもは、この標識がドアノブに出てる限り、絶対に近寄ってこない。それはおれの弁護士が念を入れて手配——相変わらずマリブに配達しなきゃなんない、あのニュートロジーナせっけん六百個と同じく。ＦＢＩはいったい、あれをどう思うだろう。このグレート・レッド・シャークがニュートロジーナせっけんだらけだってのは？　すべて完全に合法。女中どもがおれたちに**くれたせっけん**だもん。連中が宣誓してくれる……かな？

まさかね。んなことするわけない。あのろくでなしの腹黒い女中ども、どうせ武装しまくったキチガイどもが、せっけんを全部差し出すまでヴィンセント・ブラック・シャドーで脅されたんだとか宣誓しやがるんだろう。

神さまキリストさま！　この酒場に神父はいねぇのか！　懺悔したいんですけど！　あたしゃろくでもねぇ**罪人でございますだよ**！　金銭がらみの罪、死に至る罪、肉体の罪、重罪、軽犯罪——どう呼んでくれてもいい、主よ……あたしゃ有罪です。

でも最後に一つだけ願いをきき届けていただけませんでしょうか。ハンマーをふりおろすまえに、高速時間をあと五時間だけいただけないでしょうか。このろくでもねぇ車を処分して、この最低の砂漠からおん出るくらいはさせてくだせぇよ。

---

1 コロラド州ボウルダーで見られる、ヘロイン売人向けの警告看板。

実はこんなの、願いとしてはものの数でもないでしょうに。主よ、だって最終的な驚くべき真実をいうと、おれは実は無罪なんですよ。おれがやったのは、単にあんたの御託を**本気にしちゃった**だけなんです……そしてそのおかげでどんな目にあってるかはご覧のとおり。わが原始的なクリスチャンとしての本能が、おいらを犯罪者にしちまったんでさぁ。

朝の六時にグレープフルーツと「ミント四〇〇」Tシャツでいっぱいのスーツケースを持って、カジノをこっそりとぬけながら、おれは自分に何度も何度もこう言い聞かせたのを覚えてる。「おまえは悪くない」これは単に必要な便宜措置であって、修羅場を避けるための行動。考えてみれば、おれは別に法的な責任の生じるような合意はなにもしていないんだもの。これは**機関的な債務だ**——個人的なものではぜんぜんない。このろくでもねぇ悪夢のすべては、あのくそったれな無責任雑誌のおかげだぞ。ニューヨークにいるどっかのまぬけが、おれをこんな目にあわせやがった。すべてそいつの思いついたことで、おれじゃないんです。

そしていまのこのおれを見てやってくださいよ。おびえて半狂乱で、そもそもほしくもなかった車を、時速二百キロでデスバレーを飛ばしてる。この邪悪なろくでなし野郎！　こいつは**テメーの**御業ってやつじゃねーか！　おれの尻拭いをしたほうがいいぜ、主よ……だってさもないと、このおれは**あんたの御もと、あんたの手の中へと**赴くことになるんだからな。

第12章　地獄じみたスピード……カリフォルニア高速警察と悶着……ハイウェイ六一号でマノ・ア・マノ

火曜日、午後十二時三〇分……カリフォルニア州ベーカー……いまやバランタイン・エールに手を出してて、ゾンビ並にのんだくれてビクビクもん。この気持ちは経験済みだ。三、四日にわたる酒、ドラッグ、太陽、睡眠なし、アドレナリンの予備も燃え尽き――落ち着かない震えるみたいなハイで、じきに一気に崩れるってことだ。でもいつ？　あとどのくらい？　この緊張もハイのうち。肉体的精神的崩壊の可能性は、いまやきわめて現実味を増している……

……でも崩壊はまったく認められない。解決法としても安っぽい代替手段としてでさえ、**まったく受け入れるわけにはいかない**。まさか。いまこそ真実の瞬間、コントロールと大惨事の間の、はっきりした忠実な一線ってやつ。これはまた、シャバで自由かつイカレた存在として生きるか、それとも今後五年にわたる夏の朝を、カーソンシティの中庭でバスケしながら過ごすかの差でもある。

悪魔への憐れみなんかない。それは忘れるな。チケットを買って、乗り込んで……そしてそれがときどき、思ってたより重くなってきたら、まあそんときゃ……そのぶんを**強制意識拡張**のほうに押し付けるとか。チューン・イン、フリーク・アウト、ボコボコにされろ。みんなキージーのあのバイブルに書いてある……「現実の向こう側」

そしてろくでもねぇグダグダは、こんくらいでやめやめ。いまはキージーですらおれを救えない。ちょうどすごく悪い感情的な経験をしてきたばっかなのだ――一つはカリフォルニア州高速警察と、そしてもう一つは幽霊じみたヒッチハイカーで、おれの思ったやつかもしれないしそうでないかも――そしていま、悪しき精神異常エピソードのがけっぷちに

いるのを感じつつ、おれはテープレコーダといっしょに「ビール・バー」にこもってるわけで、この「ビール・バー」ってのは実は巨大な農業機械倉庫の裏部屋だったりする——いろんな耕作機やくびきや肥料袋の山がいっぱい——そしておれは、どうしてあんなことになったのかと思いめぐらしているのだ。

十キロほど戻ったところで、カリフォルニア州高速警察とちょっとこぜりあいがあった。停められたり、停止命令をだされたりしたわけじゃない。そんなお決まりのもんじゃなかった。おれはいつもきちんと運転する。ちょっと飛ばすけれど、でもいつも、非の打ち所のない技術とナチュラルな路面感覚をもって運転していて、それはオマワリでさえ認識できる。あのクローバー型インターチェンジの**輪っか一つの全周を**見事に高速ドリフトかけつつまわるのを見て、感動しないオマワリなんざこの世にゃいないね。

高速警察を相手にするときの心理学を理解している人はほとんどいない。そこらのスピード違反者だったら、でっかい赤色灯が背後につけてるのを見たら、パニクってすぐに路肩に停止する……そしてヘコヘコ謝りだして、お許しをこう。

これはまちがってる。オマワリ根性の中に軽蔑心を引き起こすからだ。どうすべきかというと——まあ時速百五十キロとかで飛ばしてて、いきなりケツに赤色灯を点滅させた高速パトカーがついてるのに気がついたら——そういうときにどうすればいいかってと、**加速すんの**。サイレンが鳴ったとたんに停まったりしちゃだめ。アクセル踏み込んで、次の出口までずっと、時速二百でその抜け作に追いかけさせること。やつはついてくる。でも、右ウィンカーを出して、右折しようとしてるってのをどう解釈すべきかは、判断できないだろう。[1]

ウィンカーを出すのは、停車して話をするのに適当な場所を探してるんだというのを報せるためだ……ウィンカーを出し続けて、高速の出口がくるように祈る。あの上り坂のループで「制限速度四〇キロ」と書いてあるやつ……そしてここでこの時点の技ってのは、いきなり高速を離脱して、時速一五〇キロ超でこのシュートに相手を誘いこむことだ。

すると向こうは、こっちと同じくらいのタイミングで急ブレーキをかけるけど、この速度だと一八〇度のターンがかかると気がつくまでに一瞬間があく……でもこっちのほうはすでに用意ができてて、Gや高速のヒール・トゥ・トウ操作も準備万端で、多少なりともツキがあれば、ターンしおわったところで道をはずれて完全に停止して、相手が追いつ

1 訳注　アメリカは車は右側なのをお忘れなく。これは日本では左折といっしょよ。

いてくるまでには車の脇に立ってられるわけ。

最初、向こうはあまり聞き分けがないだろう……が、かまうな。落ち着くまで時間をやれ。最初の一言は自分が発したがるだろう。やらせておけ。向こうの脳味噌は大混乱。わけのわからんことを言い出すか、ひょっとするといきなりピストルを抜くかもしれない。向こうか静まるのを待つこと。ほほえみつづけろ。要するに、こっちはずっと自分自身も自分の車についても、完全なコントロールを維持してたってのを見せつけるのが狙いなんだから——一方の相手は、あらゆるものがコントロールできてない。

向こうが落ち着いてきて、免許証を見せろと言い出したら、札入れに警察／プレスのバッヂを持っておくのが効く。もちろんおれはバッヂを持ってた——が同時に、片手にバドワイザーの缶も持っていた。その瞬間まで、自分がそんなものを手にしていたとは気がつかなかった。もう状況を完全に自分が制覇した気分になっていたのに……視線をおろしてその小さな赤と銀の爆弾証拠物件を見たとき、自分がヒジョーにまずい状況なのを悟った……

スピード違反はさておき、飲酒運転となると大事だ。おまわりはこれを認識したらしい——つまりおれが、缶ビールを忘れたことで、演技をすべて台無しにしたってこと。表情が和らぎ、本気でにっこりしやがった。そしておれも。というのも、その瞬間に双方が理解したことがあって、おれのサンダーロード公道レーサー爆弾演技が完全に無駄になったってこと。ふたりとも、ションベンちびりそうなほどびびったのはまったく無意味だったわけだ——だっておれがこうして手に缶ビールを持ってるっていう事実のおかげで、「スピード違反」なんて話はすべてどうでもよくなっちゃったんだから。

そいつは左手でおれの開いた札入れを受け取ると、右手を缶ビールのほうに伸ばした。「それ、いい？」ときやがる。

「ええ、もちろん」とおれ。

そいつは缶ビールを受け取って、おれたちの間に掲げると、ビールを路上に流し出した。

おれはにっこりした。もうどうでもいいや。「どうせぬるくなってたしね」とおれ。おれの真後ろの、シャークの後部シートには、熱いバドワイザーの缶が十本ほどと、グレープフルーツが一ダースかそこら見えた。さっきまですっかり忘れてたけど、いまや二人とも無視できないほど露骨になってきてた。おれの罪悪感はえらく高まって圧倒的になって

くたもんで、弁解はまったく無益だった。

おまわりもこれを理解してた。「アルコールの影響下で運転するのが犯罪だってことは認識……」

「はいはい、わかってますよ。有罪有罪。よっくわかってます。犯罪なのは知ってましたけど、やっちゃったわけで」とおれは肩をすくめた。「けっ、四の五の言ってもはじまんねえや。おれはクズの犯罪者ってわけだ」

「ずいぶんと変わった態度だねえ」とそいつ。

おれはそいつを見つめて、相手が三十前後の若い目のきらきらした好青年で、明らかに自分の仕事を楽しんでるのを初めて見て取った。

「どうもあんた、一眠りしたほうがいいんじゃないの？」とそいつはうなずいた。「この先にレストエリアがあるよ。そこに寄って、二、三時間ほど眠ったら？」

相手が何を言わんとしてるのかはすぐわかった。でも、われながら発狂してるとしか思えないんだけど、おれは首を横にふった。「一眠りじゃききませんよ。もう寝てない時間が長すぎる――もう丸三、四日。覚えてもいないくらい。いま寝たら、もう二十時間はぶったおれちゃいますよ」

ああ神さま、オレはいったい何言ってんだ？　このクソ野郎は人間らしくふるまおうとしてんのに。このまままっすぐブタ箱送りにしたっていいのに、おれに昼寝しろなんて言ってやがる。たのむから、こいつに同意しちゃってくれよ。ええおまわりさん、**もちろん**レストエリアを利用しましょう。そしてこうしてお目こぼしをしていただきまして、**なんとお礼を申し上げて**いいやら……

でも、そうはいかない……このおれときたら、もし見逃してもらったら、おれはまっすぐロサンゼルスに向かうぞ、と固執してて、それは事実ではあるんだけど、別に言わなくてもいいじゃないか！　無理に逮捕してもらわなくてもいいだろうが！　いまは幕切れには頃合いが悪すぎる。ここはデスバレーだぞ……しっかりしろ。

もちろん。しっかりするんだ。「いやあ、ラスベガスにいて、ミント四〇〇の取材をしてたんですよ」とおれは、フロントガラスの「ＶＩＰ駐車証」ステッカーを指さした。「すごかったですよ。バイクとデューンバギーがあれだけ集まって、丸二日間、砂漠で激突しあってるっつー。見ました？」

相手はにっこりして、一種のゆううつをこめた理解とともに、首をふった。このおまわりが考えているのが見て取れた。このおれは危険人物かな？　おれを逮捕しようとしたら生じる、面倒で時間のかかる一幕を開始したいだろうか？　おれの裁判で答弁を行うために、勤務時間外で何時間、裁判所のまわりでウロウロするはめになるだろうか。そしておれは、こいつに対抗するためにどんな化け物じみた弁護士を呼び寄せるだろうか。

これはおれは知っていたけれど、こいつにはわかりっこない。

「よし、じゃあこういうことにしよう」とやつは言った。「こっちの記録に残るのはこういうことだ。本日正午づけで、あんたに停止を命じた……この状況下でのスピード違反ってことで。そして、この警告書面をもって」——と紙切れをおれにわたした——「指示を行い、この先のレストエリア……当該人物の目的地、だよな……以上は先へ進んではならないと命じた……この目的地において、当該人物は長い仮眠をとる予定である……」とそいつは、切符用のメモ帳を腰のベルトに戻した。「何を言ってるかわかったね？」とおれに背を向けた。

おれは肩をすくめた。「ベーカーまでだとどのくらいです？　そこで昼飯にしようとしてたもんで」

「それは管轄外になる。市の境界は、レストエリアから三キロ半ほど先だよ。そこまで行き着ける？」とやつは、にんまり笑った。

「やってみる。ずっとベーカーには言ってみたかったもんでね。いろいろ聞いてるんですよ」

「シーフードが最高。あんたみたいな精神状態なら、たぶん陸ガニがいいんじゃないかな。マジェスティック・ダイナーに寄ってごらん」とおまわり。

おれは首をふると、車に戻った。強姦された気分。イヌはおれを全面的にコマしやがった。そしていまでは、それをあざ笑うべくでかけるとこと——どうせ街の西はずれで、おれがロス目指して逃げ出すのを待ち伏せしてやがるんだろう。

おれはフリーウェイに戻ると、レストエリアを越えて、ベーカーのほうへ右折する曲がり角までやってきた。角に近づきつつおれが見たのは……神さま、あいつじゃねぇか、あのヒッチハイカーだ、ベガスに出てくる途中で拾ってビビらせた、あのガキだ。スピードを落として曲がろうとしたときに、目があった。手を振ろうかと思ったけど、でもそい

つが親指を落としたのを見て、やめとこ、いまは時期が悪いや、と思った……あのガキ、やっと街にたどりついたときに、おれたちについて何を口走ったことやら。

加速。すぐに視界から消えろ。あのガキがおれに気がついたってどうしてわかる？　でもこの車はなかなか見まちがえるもんじゃない。それに、ほかにあいつが道から後ずさりするわけなかろうが。

突然おれは、この神に見放された町に**個人的な**敵が二人もいることになったわけ。高速警察のおまわりは、おれがロサンゼルスに向かおうとしたら、すぐにおれをパクるだろうし、もしここにとどまったら、この小憎らしいろくでもねぇガキ／ヒッチハイカーが、おれをケダモノみたいに狩りたてさせるこったろう（お、おいサム！　ちょっくら見ろや！あいつだ！　あのガキが**話してた**、あの野郎だ！　戻ってきやがった！）

いずれにしても最悪――そしてこの正義づらしたど田舎ハイエナどもが話のつじつまあわせられたら……いやあわせるだろう、こんなセコい町でならまちがいない……それでどこ行ってもおれは精算されちまう。生きて町を出られたらラッキー。怒った原住民どもに、タールと羽まみれにされて、監獄行きのバスへとひきずってかれるのがオチ……

これでおしまいか。危機。おれは町中を駆け抜けて、町の北はずれで電話ボックスを見つけた。シンクレアのガソリンスタンドと……ほかでもない……マジェスティックダイナーの間だ。そして緊急コレクトコールを、マリブの弁護士にかけた。やつはすぐに電話に出た。

おれはわめいた。「完全はめられた！　砂漠の交差点にある、ベーカーとかいう腐ったとこに追い込まれちまったぞ。時間がない。あのクソどもが包囲をせばめてやがる」

「だれが？」と弁護士。「おまえ、ちょっと被害妄想入ってない？」

「このクズ野郎！」もう絶叫。「まずは高速警察におっかけまわされて、それであの**ガキ**がおれを見つけやがった！　**いますぐ**弁護士がいるんだよぅ！」

「おまえ、ベーカーなんかで何してんの？　おれの電報見なかったの？」

「え？　電報なんか死ねっつーの。おれ、いま**とんでもねぇことに**なってんだから！」

「おめえ、ベガスにいるはずじゃん。フラミンゴホテルにスイートがあるんよ。おれもたったいま空港に向かうと

こで……」

　電話ボックスの中でヘナヘナと倒れそうになった。こんなのひどすぎる。最悪の危機に弁護士に電話をかけてるってのに、このうすらばかはクスリでいかれきってやがる——腐った植物人間以下！「この役立たずのベラボウ野郎が」とうめく。「この礼にテメーのケツの穴すり切らせてやる。車のブツはぜんぶテメーのだろうが！　わかってんのかよ！　ここでおれが証言終えたら、キサマも弁護士追放だからな！」

「この脳なしウンコ野郎！」とやつがわめいた。「電報送ったろうが！　おまえ、全国検察官会議の取材するはずだろ！　予約も全部しといてやったのに……何もかも手配しといてやったじゃねえか……白いキャデラック・コンバーチブルも借りて……そんな砂漠なんかのどまんなかで、いったい何やってやがんだよバカ野郎！」

　いきなり思い出した。そうだ。電報ね。なにもかもはっきりした。精神も落ち着いた。全体像が一発で見えた。「いやいや。ただの冗談だよ。実はいま、フラミンゴのプールサイドからなの。移動式電話でね。どっかの小人がカジノから持ってきてくれたんよ。経費完全もち！　わかる？」息が荒くなり、気がちがったみたいな気分で、電話に向かって汗ダラダラ。

「この場所に近づくんじゃねーぞ！」とおれは怒鳴った。「ガイジンはいい顔されないからな」

　電話を切って、車に向かった。ふん、世の中ってこういう仕組みなのね。すべてのエネルギーが、大磁石の気まぐれにしたがって流れるわけか。それに刃向かおうたぁ、おれもとんだ道化だったわ。大磁石さまはご存知だったわけだ。ずっとご存知。おれをベーカーに押し込めたのも大磁石さま。遠くまで逃げすぎたから、大磁石さまがおれを押さえ込んだ、と……脱出路をすべて封じて、まずは高速警察でつついて、そしてあの薄汚ねえ幽霊ヒッチハイカーなんか使って……おれを恐怖と混乱のどん底にたたきこむ。

　大磁石さまに背いちゃいけねーよ。いまはそれがおれにもわかった……そしてこの理解とともに、ほとんど最終的といっていいくらいの解放感がやってくる。うんそうだ、ベガスに戻ろう。西じゃなくて、再び東に向かうことで、ガキをかわして高速警察の目をくらます。こいつはおれの人生でもいちばん小ずるい動きになる。ベガスに戻って、麻薬等薬物会議に登録。おれとブタども千人。よいではないの。連中の中で、自信たっぷりにふるまう。フラミンゴで登録し

て、すぐに白のキャデラックを出してこさせる。うまくやれよ。ホレーショ・アルジャーを思い出せ……

道の向こう側を見ると、でっかい赤い看板で「ビール」と出てる。すう　ぁ゙らしい。おれはシャークを電話ボックスの横において、高速を横切ってその農具倉庫に入った。ユダ公が歯車の山の後ろからのっそり出てきて、注文をきいた。

「バランタイン・エール」とおれ……きわめて秘教的なロングショットで、ニューアークとサンフランシスコの間では知られていない。

こいつはそれをつくって出してきた。キンキンに冷やして。

落ち着いたね。急に、なにもかも順調だった。やっとくつろげるってもんだ。

バーテンがにこにこしながら近づいてきた。「若いの、どこさ行くだね？」

「ラスベガス」とおれ。

やつはにっこりした。「いいとこだよ、ベガスってぇな。あんたならツキが向いてるよ。そういう顔してる」

「わかってる。だっておれ、三重さそり座だもん」

向こうは嬉しそうだった。「いい星だねえ。負けっこないよ」

おれは笑った。「心配ご無用。おれ、実はイグノト郡の検察官なんよ。あんたと同じ、ただの善良なるアメリカ人だから」

やつの微笑が消えた。わかったのかな？　はっきりしない。でもいまじゃそんなのどうでもいい。おれはベガスに戻る。ほかに道はない。

第II部

第13章

ベーカーから三〇キロほど東で、クスリ袋をチェックしに停まった。日差しが熱くてなんか殺したい気分。なんでもいい。でっかいトカゲでも。そいつにくらわしてやる。弁護士の.357マグナムをトランクから出して、弾倉を回してみる。一周丸ごと弾がこもってる。長い、邪悪な鉛玉ども――見事に水平の軌跡を描く一五八グレインで、先端はアステカゴールドに塗ってある。クラクションを何度か鳴らして、イグアナでも飛び出してこないか期待してみる。害獣どもをあぶり出す。連中は必ずいるのはわかってる、あのサボテンのろくでもねぇ海の中に――なりをひそめて、ほとんど息もせず、そして腐りきった一匹残らず致死性の毒でいっぱい。

高速の爆音三連発で、おれはよろけた。右手の.357から、耳をつんざくダブルアクションの銃撃。わおぅ！　的もなしになんの理由もなく撃つなんて。最悪イカレきってる。おれは銃をシャークの前のシートに投げ込むと、不安げに高速道路のほうに戻った。どっちの方向にも車はない。道はどっち向きにも四、五キロは無人だった。

かなりラッキー。こういう状況で、砂漠のど真ん中で捕まるのは**とにかくまずい**。クスリまみれの車から、サボテンめがけて乱射なんて。そして特にいま、高速警察からずらかる途中では。

気まずい質問が起きちゃうだろう。「えーとですね、その……えーと……デュークさん、ですか。連邦高速道路上にいるときに、いかなるものであれ銃火器を発射するのは、**非合法である**というのは、もちろんご存知、ですよねえ」

「え？　正当防衛の場合でも、ですか？　このろくでもないピストルは**ヘアー・トリガー式**でしてね、おまわりさん。ホントのこと言うと、わたしゃ**一発だけ**撃つつもりだったんですよ――あのケチな連中を威嚇しようってんで」

じっと凝視、そしておまわりはとてもゆっくりとした口調で言う。「するとつまりですね、デュークさん……おっしゃってるのはつまり、あなたはここで**攻撃された**、と、こういうことですか？」

「いや……まあその……文字通り具体的に攻撃されたってわけじゃないんですがね、おまわりさん、でも**本格的に脅しを受けた**というべきでしょうかね。ちょっとションベンで停まって、車からおりた瞬間に、このろくでもねぇ毒の固まりみたいなやつらがまわり中にウジャウジャ出てきて。動きもまあ**油を差した電光石火**って具合！」

この言い逃れでなんとかなるかな？

いいや。おれは逮捕されて、そしてお決まりの車内捜索――そしてそうなったら、ありとあらゆる残虐きわまる大騒動が持ち上がる。こんだけのクスリすべてが、おれの仕事に必要なんだとは絶対に信じちゃくれまい。このオレがホントにプロのジャーナリストで、ラスベガスで麻薬等薬物に関する全米検察官会議の取材にいくとこだ、なって信じるわけがない。

「ただのサンプルですよぉ、おまわりさん。こいつは道に立ってたネオアメリカン教会の募金男から押収したもんなんです。どうも振る舞いがおかしかったもんで、身体検査したわけで」

これで納得するかな？

いいや。どっかの地獄の穴蔵みたいな監獄に閉じこめられて、でっかい棍棒で腎臓をぶん殴られるだろう――おかげでこの先何年も、ションベンに血が混じることになる……

ありがたいことに、クスリ袋の中の在庫調査をサッとやったときには、だれからもじゃまは入らなかった。たくわえはどうしようもなくグチャグチャになってて、みんないっしょくたに混じってつぶれかけてる。メスカリン錠の一部は、赤茶っぽい粉にまで分解してたけど、まだ無事なのが三十五から四十錠。レッドは弁護士がぜんぶ喰っちまってたけど、スピードはかなり残ってる……大麻はもうなくて、コカインのびんは空っぽで、ＬＳＤ吸い取り紙は一枚、見事な茶色い阿片ハッシシの固まりと、アミル錠が六つ……マジで何かするには少なすぎるけど、メスカリン支給量を慎重に計画してやれば、四日間のドラッグ会議もなんとか乗り切れるだろう。

ベガスの外縁部で、おれはご近所薬局に立ち寄ると、ゴールドテキーラ二リットル、シバスリーガル五分の二リットル、エーテル一パイントを購入。アミルはないか聞いてみたい誘惑にかられた。おれのアンジナ・ペクトリスがちょっと発作を起こしつつあったから。でも薬剤師は、陰険な狂信バプティストの目をしてやがった。エーテルについては、脚につけたテープをはがすのにいるんだ、と説明したけど、説明するまもなくそいつはブツを出してきて袋につめてた。こいつはエーテルは気にならなかったみたい。

こいつに、ロミラール二十二ドル分と笑気ガスのタンクを頼んだら、なんて言うかな。たぶん売ってくれるだろう。何が悪い？　自由な商取引……大衆には求めるものを与えよ——特に大衆の中でも、このひどい汗っかきで、神経質そうなしゃべり方で、脚がテープだらけで咳もひどいし、陽にあたるたびにアンジナ・ペクトリスとこのろくでもねぇ動脈瘤発作におしわれる野郎には。**ですからこいつはかなり症状がひどかったんですって、おまわりさん。こいつがそのまま車に戻って、薬物濫用を始めるなって、あたしにゃわかりっこないでしょうが！**

わかりっこないよなー。おれはしばらく雑誌の棚の前でうろうろしてから、われに返って急いで車に戻った。検察官のドラッグ会議のど真ん中で、笑気ガスで完全にイカレてみせるってのは、圧倒的に発狂した魅力があった。が、**初日はやめとけ**。後々までとっとけや。会議が始まりもしないうちに、パクられて起訴されるなんて意味がない。駐車場のラックからレビュー誌を盗んだけど、一ページ目の記事を読んで捨てた。

眼球摘出後の手術不透明

ボルチモア（ＵＰＩ）——金曜日、ドラッグ過剰摂取の影響に苦しむ若者が獄中で自分の眼球をえぐり出した事件で、視力回復のための手術が成功したかどうかはわからないと医師たちは語った。

チャールズ・イネス・ジュニア（25）はメリーランド総合病院で木曜遅くに手術を受けたが、医師たちによれば、結果がわかるまでには何週間もかかる。

病院の発した声明によると、イネスは「手術前には光への知覚が皆無であり、この先それが回復する見

込みはきわめて薄い」とのこと。

イネスはマサチューセッツ州の有力な共和党議員の息子であり、獄中で木曜日に自分の眼球をえぐり出しているところを看守に発見された。

イネスは水曜夜に、住まいの近所を全裸で歩いているところを逮捕された。マーシー病院で診察を受けてから収監された。警察とイネスの友人たちによれば、イネスは動物用精神安定剤を過剰摂取していた。

警察の報告では、使われた薬物はＰＣＰで、これはパークデイヴィス社の製品だが、一九六三年以来、人間の医療向けには販売されていない。しかしパークデイヴィス社のスポークスマンによると、闇市場では販売されている可能性があるという。

同スポークスマンの話では、単独摂取した場合、ＰＣＰの効果は十二時間から十四時間しか続かない。しかし、ＰＣＰをＬＳＤのような幻覚剤と組み合わせた場合の効果については不明である。

イネスが初めてこの薬物を摂取したのは先週金曜日だが、その翌日にイネスは、目がおかしくて物が読めないと近隣住民に語っていた。

水曜の夜に警察が語ったところによれば、イネスは非常に鬱が激しく、苦痛にもまったく無反応となっており、眼球をえぐり出したときにも叫ばなかった。

第14章　新たな一日、新たなコンバーチブル……そしてオマワリまみれの新たなホテル

まず処理すべき最初の仕事は、レッドシャークを始末することだった。一目でわかりすぎる。気がつきそうなやつが多すぎる。とくにベガスの警察。とはいっても、連中の知る限り、こいつはすでにロサンゼルスの家に戻ってるはずなんだけど。最後に目撃されたのは、州間高速十五号線のデスバレーあたりをフルスピードで走っていたところ。ベーカーでカリフォルニア州高速警察に停められて警告を受けて……そして突然消えた……

いちばん見つかりにくいのは、空港のレンタカー屋の駐車場だろうと判断。どうせ、弁護士を迎えにいかなきゃならない。午後遅くにロサンゼルスから到着するのだ。

フリーウェイではとても静かな運転を心がけ、いつもの急加速や急な車線変更の誘惑の手綱を引いた――怪しまれないようにしようと思ったわけ――そして空港についたときも、シャークはターミナルから一キロ近く離れた「業務車用駐車場」の、空軍バス二台の間に停めた。すごく背の高いバス。クズどもになるべく苦労させちゃる。ちょっとくらい歩いたって、バチぁあたるめぇよ。

ターミナルにつく頃には、汗だくだくだった。が別に異常なことじゃない。温暖な気候では、おれは大量の発汗を行いがちなのだ。服は夜明けから日暮れまで汗びっしょり。最初はおれも心配だったけれど、医者にいって、ふだんの酒やクスリや毒物の摂取量について説明すると、発汗**しなくなったときに**またおいで、と言われた。医者の話だと、汗がとまったら危険信号だそうな――おれの肉体の、絶望的に働かされすぎてる排出気候が完全にぶっこわれたしるしだか

ら。「わたしは自然のプロセスに絶大な信頼をおいておるのですよ」とその医者。「でもあなたの場合には……なんというか……前例がまるでない。まあ様子を見て、残った物だけでもなんとかするようにしましょう」

バーで二時間ほどつぶした。ブラディマリーを飲んで、それに入ってる野菜ジュースの栄養価を摂取しようとしたわけ。そしてロサンゼルスからの飛行機を眺めてる。二十時間ほどで食べたのはグレープフルーツだけで、頭はもうふわふわ流れ出しそうな状態。

気をつけろよ、とおれは思った。人間のからだにも、限界ってのは**あるんだからな**。このターミナルでぶっこわれて、耳から血を流しだしたりはしたくないだろう。この街ではダメだ。ラスベガスでは、弱者とイカレたのは**殺されちゃう**んだぞ。

これを認識して、おれは末期的な血の汗のせりあがり症状が感じられたときでも、静かにしていた。でも、こいつは通り過ぎてくれた。カクテルウェイトレスが不安そうな様子を見せだしていたので、おれは無理矢理立ち上がって、しゃきしゃきとバーから出ていった。弁護士の姿はどこにも見えない。

ＶＩＰレンタカーの事務所にいって、レッドシャークを白のキャデラック・コンバーチブルと交換。「いやぁ、このシボレーにはひどい目にあったよ。みんなにバカにされてる気分でね——特にガソリンスタンドで、外に出てボンネットを**いちいち手動で**開けなきゃならないってのはね」

「それは……いや**そうでございましょうとも**」とデスクの男。「お客様にぴったりなのは、たぶんメルセデス六〇〇タウンクルーザー・スペシャルではないかと。エアコンつき。自前の燃料をつけられますし。弊社もそういうサービスは提供させて……」

「おれがそんな腐れたナチみたいに見えるか！　ナチュラルな**アメ車を**よこせ！　さもなきゃなんもなしだ！」

連中、すぐに白のクーペ・ド・ヴィルを出してきやがった。何もかもがオートマチック。赤革の運転席にすわったままで、しかるべきボタンにさわりさえすれば、車のありとあらゆる部分を**ピクピクさせられる**。すばらしいマシンだ。一万ドル相当のオモチャと高価格特殊効果。後部ウィンドウは触れただけで、ダイナマイト池のカエルみたいにヒョイと飛び上がる。白いカンバストップはジェットコースターみたいにスルスル出入り。ダッシュボードは神秘的なランプや

ダイヤルやメータだらけで、おれにはぜんぜんわかんなかった——でも、自分が**より優れたマシン**に乗ってるというのは、おれの頭の中でいささかの疑いもなかった。

　このキャデラック、立ち上がりはレッドシャークほど速くはない。でもいったん動き出したら——時速百二十くらい——純粋なめらかな悪魔……エレガントで装飾たっぷりの重量が砂漠を疾走するのは、昔のカリフォルニア・ゼファに乗って深夜に流すような感じ。

　支払いはすべてクレジットカードでやって、あとで知ったんだけど、そのカードは「失効してる」とか——まったくのでたらめ。でも、でっかいコンピュータにはまだ登録されてなかったので、相変わらず支払いリスクとしてはぴかぴかのゴールド級だったわけだ。

　あとで、この支払いを思い返してみると、おそらく確実に生じたはずの会話ってのは**まちがいなく**こんなもんだったろうよ。

「あ、もしもし、こちらラスベガスのVIPレンタカーですが。カードの照会お願いします。番号は八七五ー〇四五ー六一六ーB。別に急ぎじゃないです。ふつうの与信審査で……」

(電話の向こう側で長い間。そして)「うわわわっ!」

「どうしました?」

「失礼……はいその番号はあります。緊急通報指定の番号になってるんです。すぐに警察に通報してください、そしてその人物から目を離さないで!」

(またも長い間)「いや……その……実はその番号は、**こちらの**要注意リストには載ってないんですよ、だから……えー……八七五ー〇四五ー六一六ーBはたったいま、まっさらのキャデラック・コンバーチブルに乗ってここを出たところです」

「えええっ!」

「ええ。もうしばらく前に。完全保険つきで」

「どこへ向かいました?」

「確かセントルイスとか言ってましたよ。ええ、カードにそうあります。ラウール・デューク、セントルイス・ブラウンズのレフト内野手に打点王。一日二十五ドルで五日間、さらに走行一マイルあたり二十五セント。カードは有効でしたし、こちらとしては断る理由もありませんで……」

その通り。おれのカードは、理屈の上からは有効だったので、レンタカー屋として法的にはこっちにゴチャゴチャ言う理由はまったくなかったわけ。その後四日間、ラスベガス中をその車で走り回った――パラダイス大通りのＶＩＰレンタカーの本社の前だって何度か通ってる――そしてその間一度たりとも、なんら無礼な仕打ちにあうようなことはなかった。

こいつが、ベガス式歓待の真骨頂ってとこだ。盤石不可侵のルールはただ一つ、地元の連中はハメるな。それ以外のことは、だれも気にしない。というか、知りたがらない。チャーリー・マンソンが明朝にサハラホテルにチェックインしても、チップさえはずめばだれも何も言わないだろうよ。

車を借りて、まっすぐホテルへ向かった。相変わらず弁護士の姿は見えないので、一人でチェックインすることにした――とりあえず、道を離れて、公開の場で崩れるのを避ける意味だけでも。ホエールはＶＩＰ用駐車場に残して、小さな皮カバン一つだけ――友人のボウルダーの皮職人がおれだけのために作ってくれた、手製カスタムメイドの手提げだ――で、自意識たっぷりにロビーへとなだれこんだ。

おれたちの部屋はフラミンゴホテルだった。目抜き通りの中枢で、シーザーズパレスとデューンズ――ドラッグ会議の会場――から通りをはさんだ真向かいだ。参加者の大部分はデューンズに滞在していたけれど、すさまじく遅れて登録したわれわれは、フラミンゴにまわされたわけだ。

あたりはおまわりだらけだった。一目でわかった。ほとんどの連中は、単にそこに立って、さりげないふりをしようとしてるんだけど、みんなベガス式カジュアルのバーゲン版でまったく同じ格好。ブレイドのバミューダショーツ、アーノルド・パーマーのゴルフシャツに毛のない白いすねがどんどん細くなって、ゴム製「ビーチサンダル」へとおりてく。脚を踏み入れるのはとってもこわい場面だ――なにやら超張り込みって感じ。この会議のことを知らなかったら、頭が

破裂してたかもしれない。いまにもだれぞ、すさまじい銃撃戦で蜂の巣にされるんじゃないか――ひょっとしてマンソンファミリーがまるごといるの？

　おれが着いたタイミングも悪かった。ほとんどの全米検察官やその他おまわりタイプは、もうチェックイン済みだった。それでみんなロビーでうろうろ立ってて、後からきたやつらを陰気にジロジロ眺めてるのだ。最後の張り込みたいに見えたのは、単に休暇中で手持ちぶさたのオマワリ二百人ほどだったのだ。こいつら、お互いのことさえ気がついてない。

　人混みをかきわけて、フロントに近づき列に並んだ。前の男はミシガン州の小さな町の警察署長だ。アグニュー・スタイルの女房が立ってる一メートルほど横で、そいつはフロント係とやりあっていた。「なあおい――**さっきから言ってる**けど、このホテルに**予約が入ってる**っていうはがきがここに来てるんだって。おい、わたしは検察官会議にきたんだぞ。部屋代だって**払ってる！**」

「申し訳ありませんが、そちらさまは『締め切り後登録』のほうに入っておりまして。予約のほうは……えー……ムーンライトホテルのほうに振り替えさせていただいております。こちらはパラダイス大通りにございまして、ここからわずか十六ブロックほど、自家用プールもあって非常に快適なところでして……」

「この小汚いおかま野郎が！　支配人を呼べ！　クソみたいな御託は聞き飽きた。話にならん！」

　支配人があらわれて、タクシーをお呼びしましょうかと言った。これは、おれがツラを出すよりずっと前に始まった、残酷なドラマの第二幕か、ひょっとして三幕目かもしれないのは見え見えだ。警察署長の女房は泣き出していた。後押ししてもらおうと、署長がかき集めてきたお友だち勢は、加勢するのも恥ずかしい様子だった――いま、このフロントで恥をさらしてるときでも、この頭に血ののぼったオマワリが自分の最善最終の一発を放っているときでも。こいつの負けはみんなわかっていた。こいつは規則に逆らおうとしていて、そのルールを強制すべく雇われた人々が「空室なし」と言ってるんだもの。

　十分ばかし、この騒々しいケチなろくでなしとその仲間どもの後ろに並んでいるうちに、吐き気がこみあげてくるのが感じられた。この野郎、おまわりだろうが――こともあろうに――権利だの正当性だのについて四の五の文句をつけようったぁ、いい根性してるじゃねぇの。おれはこの、道理の通じねぇうすらボケたクソ頭どもと、**この手のことはさん**

ざんやってきてんだぜ——そしてどうも、フロント係もそうらしいとおれは感じた。こいつは、昔は規則ばっかをふりかざす陰険なオマワリどものサンプル多数に、かなりこづき回された経験のある人物の雰囲気を漂わせてた……

　だからいまや、フロント係は連中から受けたせりふをそっくりお返ししてたわけだ。だれが正しいの間違ってるのとかいう話じゃねーの……金は払ったの払ってねーのも、どうでもいいの……いまだいじなのは、生まれてはじめて、こっちがオマワリに高飛車に出られるってことだ。「くたばれや、**おまわりさんよぉ**、ここはおれが仕切ってんの。そのおれが、部屋はございませんと言ってんの」

　この鞭さばきはおもしろかったけれど、しばらくするとウズウズしてきて、悪い意味で気が立ってきて、お楽しみよりもせっかちさのほうが勝ってきた。だからブタの横に進み出て、フロント係に直接話しかけた。「ねえ、じゃまして悪いんだけど、わたしは予約があるから、ちょっと先に通して処理してもらえると、目障りじゃなくなっていいと思うんだが」おれはにっこりして、いまやそこに群がってるオマワリ集団相手の慇懃無礼演技がなかなかおもしろかったよ、とフロント係に報せてやった。おまわりどもはいまや、精神的に不安定になってて、おれのことを、まるで水ネズミがフロントにはい上がってきたとでもいうように見つめてやがる。

　確かに外見はかなりひどかった。着てるのは古いリーバイスと白いチャック・テイラー・オールスター・バスケ用スニーカー……十ペソのアカプルコシャツは、路上で風を受けまくって、かなり前に方の縫い目がとけてた。ひげは三日分ものびて、標準アル中仕様に近づいてきて足し、目はサンディ・ブルのサイゴン・ミラー式サングラスで完全に隠れてる。

　でもおれの声には、自分の予約を確信している人物の自信がこもってた。弁護士の先見の明に賭けてたわけだけど……でもオマワリに一矢報いる機会を見逃すわけにゃいかなかった。

　……そして大当たり。弁護士名で予約が入ってた。フロント係はすぐにベルを慣らして、ボーイを召集。「いまの荷物はこれだけ。あとはあの、白のキャデラック・コンバーチブルに乗ってる」とおれは、正面玄関の真正面に停めてあるのがみんなに見える、あの車を指さした。「だれかに、部屋まで運転してきてほしいんだけど」

　フロント係は親切だった。「ええお客様、もう何もご心配はいりません。あとはもうご滞在をお楽しみいただければ——そして何かご用がございましたら、遠慮なくフロントのほうまでお申し付けください」

おれはうなずいてにっこりした。隣のオマワリ群衆の、驚愕反応を横目で観察。ショックでハトが豆鉄砲くらったみたいなツラしてやがる。自分たちは、ありとあらゆるごり押し手段をつかって口論して、自分たちが**支払い済みの**部屋をよこせと言ってるのに――いきなりどっかの、ミシガン北の放浪ジャンキーみたいな薄汚い流れ者が、その芝居をまるごと横にうっちゃりやがった。しかもそれが**クレジットカードの束なんか**でチェックインする！　神さま！　この世はいったいどうなってしまっておるのですか？

第15章　どう猛ルーシー……「野球ボールの歯にゼリー炎の目」

パタパタ寄ってきたボーイにかばんをわたし、ワイルドターキー一リットルと、バカルディ・アネホを五分の二リットル、ついでに一晩分の氷を持ってきてくれと頼んだ。

おれたちの部屋は、フラミンゴの一番奥のウィングにあった。ここはただのホテルじゃない。砂漠のど真ん中にある、巨大な資金不足のプレイボーイクラブみたいなもんだ。なにやら独立したウィングが九つ、それを土手とプールが相互に結んでる——巨大な複合施設が、駐車用の斜路と来訪者用アクセス路で切り刻まれてる。フロントから、割り当てられた遠くのウィングまでふらふら歩くのに、二十分ほどかかった。

おれの予定では、部屋に入って、酒と荷物の配達を受け取ったら、最後のでかいシンガポール・グレイの固まりを吸いつつウォルター・クロンカイトを観て、弁護士がつくのを待つはずだった。この休息は必要だった。ドラッグ会議を取材する前の、つかの間の落ち着きと平穏。こいつはミント四〇〇とはかなりちがった代物になるはずだ。ミント四〇〇は、**見物**イベントだったけれど、こいつは**参加型**イベントだ——しかもかなり特殊な立場になる。ミント四〇〇では、基本的には参加者は好意的なお仲間ばっかだし、おれたちの行動がイカレてて常軌を逸してても……まあそれは、程度問題の話。

でも今回は、おれたちの存在そのものがとんでもないことだ。おれたちは身分を偽って会議に参加して、しょっぱなから、おれたちみたいな連中を牢屋に入れるのが目的だと宣言して集まった連中を相手にすることになる。こいつらに

とっては、おれたちこそがアメリカを脅かす存在だ――それも変装すらしていない、どこから見ても見え見えの薬物濫用者どもで、さらにはその演技も派手派手しくわざとらしい代物で、しかもそれをとことん限界まで押し通すつもりでいるんだから……それも別になにか最終的・社会学的な論点を証明するためでもなく、意識的にバカにするつもりでさえない。主にライフスタイルの問題で、義務感というか、使命感とすら言えるだろう。ブタどもが、トップレベルのドラッグ会議でベガスに集まるってんなら、ドラッグ・カルチャー側からの代表も出るべきだろうと感じたのだ。

それ以外には、おれはもうずいぶんとイカレたことばかりしてきたもんで、こんなギグも完全に筋が通って思えたのだ。状況を考えれば、おれは完全に自らの業(カルマ)にしたがってる気分だった。

少なくとも、奥のウィングにあるミニスイート一一五〇号室の、でっかい灰色のドアにたどりつくまでは、そういう気分だった。キーをドアノブの鍵穴につっこんで、思いっきりドアをあけて、「いゃあ、やっと家にたどりついた！」……と思ったとき、ドアが何かに**あたって**、それが人間の格好をしたもんだと一瞬で気がついた。年齢不詳の女の子で、顔と体型は闘牛のウシ。形のない青いスモックを着て、目が怒ってる……

なぜか、ここが正しい部屋なのは確信していた。まちがいだと思いたかったけれど、でも波動がどうしようもなく正しかった……そして彼女もそれを知っているようだった。というのも、おれが彼女の横を取ってスイートの中に入ったときにも、おれを止めるようなそぶりはいっさい見せなかったからだ。おれは皮カバンをベッドの一つに投げ出して、絶対に目に入ってくるはずのものを探して見回した……おれの弁護士……すっぱだかで、洗面所の入り口に、クスリ漬けのニタニタ笑いを浮かべて立ってやがる。

「この退行しきったブタ野郎」とおれはつぶやいた。

「どうしようもなかったんだって」とかれは、ブルドッグ娘のほうにうなづいた。「あれはルーシー」と気のない笑い声をあげる。「ほら――あのルーシー・イン・ザ・スカイ・ウィズ・ダイヤモンド、みたいな……」

おれもルーシーに会釈したが、向こうはまちがいようのない悪意をこめておれをにらんでる。明らかにおれは、なんか敵の一種で、彼女の舞台に割り込んできた醜い侵入者なのだ……そして彼女が部屋の中を、非常にすばやく緊張して

動き回る様子から、彼女がおれを攻撃するつもりなのは明らかだった。暴力行為の準備万端で、これはもうまちがいない。弁護士でさえそれを見て取った。

「ルーシー！」と弁護士がわめいた。「ルーシー！　落ち着け、頼むから！　空港でのことを忘れたの？……ああいうのはもうなしな、わかった？」と不安そうに微笑みかける。彼女の目つきは、おがくず敷きの闘技場に投げ込まれて、命がけの生き残り戦を強いられたケダモノみたいだった……

「ルーシー……こちらはおれの**クライアント**なの。これはデュークさんといって、有名なジャーナリストなんだよ。このスイートの**支払いは、この方がしてくれてる**んだからね、ルーシー。この人は**味方なんだよ**」

娘はなにも言わなかった。彼女が完全には自制できていないのがわかる。女としてはえらく肩がでかくて、あごはオスカー・ボナヴェナみたい。おれはベッドにすわると、さりげなく自分のカバンに手をつっこんで、目つぶしスプレーの缶を探した……そして発射ボタンが親指にあたるのを感じたとき、おれは思わずそいつを引っぱり出して、単に一般原則に基づいてこのアマに目つぶしをくらわしてやろうかという誘惑にかられた。だあっておれはどうしても平和と休息と安息が必要だったんだもの。どっかのクスリでいかれたホルモンおばけと、自分のホテルの部屋で、死ぬまで戦うなんてまっぴらだ。

弁護士もこれが理解できたようだ。おれの手がなぜカバンに突っ込まれているのか認識して叫んだ。

「よせ！　ここじゃダメだ！　追い出されるぞ！」

おれは肩をすくめた。こいつ、イカレてる。見ればわかる。そしてルーシーも。目が熱っぽくて狂ってる。彼女がおれを見つめる様子は、人生が彼女の考える形での平常に戻るために、救いようのない状態にまで還元されるべき代物がこのおれだとでも言わんばかりの目つき。

弁護士がにじりよって、彼女の肩に腕をまわした。「デュークさんは、おれのお友だちなんだから」と優しく話しかける。「アーティストがとっても好きな人なんだよ。ほら、きみの絵を見せてあげなさい」

初めて気がついたんだが、部屋は芸術作品だらけだった——肖像画が四十だか五十だかあるものは油彩、あるものは木炭画、どれもおおむね似たようなサイズで、描かれた顔は全部同じ。平らなところすべてに絵が開いてある。描かれ

た顔はなんとなく見覚えがあったけれど、だれだかもうちょっとで思い出せない。ビロンとした口、でっかい鼻に、とんでもなくキラキラした目の女だ——悪魔じみた官能的な顔。馬にのめりこむような若い美術女学生のベッドルームにあるような、大げさで恥ずかしいほど劇的な描き方をしてある。

「ルーシーはバーバラ・ストライサンドの肖像を描いてるんだ」と弁護士が説明した。「彼女はモンタナ州のアーティストで……」と言って娘のほうに向き直った。「住んでるの、なんて町だっけ？」

娘は弁護士を見つめ、おれを見つめ、そしてまた弁護士に視線を戻した。そしてやっと口を開いた。「カリスペル。ずっと北。この絵はテレビを観て描いたの」

弁護士は熱心にうなずいた。「すばらしい。この子はバーバラにこの肖像画を全部あげるためだけに、ここまではるばるやってきたんだって。今夜、アメリカーナ・ホテルに出向いて、バックステージでバーバラに会うことになってるんだ」

ルーシーは恥ずかしそうににっこりした。もう敵意は感じられなかった。おれは目つぶしを話して立ち上がった。明らかにこれは、ヒジョーにまずい事態に立ち至っているではないか。こいつは勘定に入ってなかったぞ。弁護士がＬＳＤで完全にラリってて、さらに超自然的な庇護趣味にはまってるとは。

「ふん、まあそろそろ車がまわってきた頃かな。トランクの荷物をおろしてこよう」とおれ。

弁護士は熱心にうなずいた。「いやまったく。荷物だ荷物」そしてルーシーに笑いかけた。「すぐに戻るからね。電話が鳴っても出るなよ」

彼女はニタついて、一本指のキリスト**狂徒**のしるしをやってくれた。「神の祝福あれ」だと。

弁護士がゾウ脚ズボンとテカテカ黒のシャツを急いで着込んで、おれたちは急いで部屋を出た。弁護士は方向がわからずに苦労してるようだったが、おれとしては甘やかすつもりはまったくなかった。

「で……どういう予定？」

「予定って？」

「ルーシー」とおれ。

弁護士は頭をふって、質問に意識を集中しようとした。やっと口を開いた。「くそっ。いやね、飛行機で会って、おれ

はＬＳＤをしこたま持っててさ」と肩をすくめる。「ほら、あのちっちゃい青いバレルよ。まったく、あの娘は**宗教**キチガイなの。この半年でもう家出が五回目とかで。ひどいんだよ。おれ、一錠あげちゃってから気がついたんだけど……いやぁ、あの娘ったら、**酒も**のんだことないんだよな！」

「まあなんとかなるっしょ」とおれ。「このままクスリ漬けにしといて、ドラッグ会議で春をひさがせんのよ」

弁護士はおれを見つめた。

おれはつづけた。「このイベントにはぴったしじゃん。オマワリども、あの娘をぶちのめして言うことききくようにして輪姦(まわ)すのに、一人頭五十は払うね。どっか裏通りのモーテルに押し込めといて、部屋中にキリストの絵をかけといて、あのブタどもをけしかけてやればいい……ふん、頑丈そうな娘だから、からだは保つだろう」

弁護士の顔は、ひどくひきつっていた。おれたちはエレベータにいて、ロビーに下りる最中だった。やつがつぶやく。「信じられんよ。おまえがイカレてるのは知ってたけど、そんなことを実際に口走るとは思ってなかった」

かなり驚いたようだ。

おれは笑った。「経済学のイロハだろうが。あの娘は、**神さまの贈り物**だよ！」と歯を全面にむきだして、ナチュラルなボガート式微笑をやつに向ける……「いやあ、おれたちほとんど破産状態だろ。そこへおまえが、あんな筋肉まみれのガイキチを拾って、これで一日千は稼げる」

弁護士はわめいた。「よせ！　**そういう言い方**すんなって！」そこでエレベータのドアが開き、おれたちは駐車場へと歩き出した。

「たぶん一度に四人くらいを相手にできると思うな。おおっと、するとＬＳＤ漬けにしとけば、一日**二千**はいけるってことか。いや、**三千でも**」

「この薄汚いケダモノめ」とやつは口角泡をとばす。「キサマの腐れ頭をぶち割ってやるからな！」こっちに向かって目をすがめて、手で日差しを目からよけようとしている。おれはドアから二十メートルくらいのところにあるホエールを見つけた。「あった。ヒモの車にしちゃ悪くないよな……」とおれ

弁護士はうめいた。その顔は、やつがいま味わってるにちがいない戦いを反映したものになっていた。脳味噌の中で、

断続的なＬＳＤのラッシュが出てくるんだ。苦痛に満ちた強烈さのひどい波に続いて、完全な混乱がやってくる。ホエールのトランクを開けてカバンを出そうとすると、弁護士は怒りだした。「おまえ、いったい**何やってんの**？」と決めつける。「これはルーシーの車じゃないぞ！」

「わかってるよ。おれの車だもん。これは**おれの**荷物なの」

「また見え透いたことを！」とやつは怒鳴った。「おれが弁護士サマサマだからって、おれの目の前でなんでもかんでも盗んで回れると思うんじゃねぇぞ！」そしてやつは後ずさりした。「おまえって、**どうかしちゃってんじゃ**ねーの？　これで起訴されたら、絶対逃げられねーからな」

かなり苦労の後に、おれたちは部屋に戻って、ルーシーとマジに話をしようとしてみた。ナチになった気分だったけれど、やるしかない。彼女はおれたちにとって**まずすぎる**――特にこの微妙な状況では。彼女のいまの外見の状況だけでも、充分にひどいもんだ――異境で若い女の子が、ひどいキチガイじみたエピソードのただなかに放り込まれるなんて――が、おれとしてはそんなのよりずっとずっと心配だったのが、あと数時間で彼女が多少なりとも正気にかえって、ロサンゼルス空港でなにやら残虐なサモア人に、ナンパされて誘惑され、酒とＬＳＤを飲まされて、そしてベガスのホテルの一室にひきずりこまれて、野蛮にも体中のありとあらゆる開口部に、そいつのピクピク脈打つ包皮切除もしてないイチモツを挿入されたというおぼろげな記憶に対して、なんかそびえたつ神さまの応援を受けた激怒状態へと突入するんじゃないかってことだった。

おれの脳裏には、ルーシーがアメリカーナ・ホテルのバーバラ・ストライサンドの楽屋に飛び込んで、この残虐きわまる物語を彼女に語ってきかせるという最悪の光景が浮かんでいた。そしたらおれたち、おしまいだぁ。連中、おれたちをどこまでも追いつめて、おそらく当局に突き出す前に、二人とも去勢されちまうぞ……

おれは以上を弁護士に説明したが、やつはルーシーを手放すと思っただけでいまや涙を流してやがる。彼女はといえば、まだがっちり強力にラリってたから、おれとしては唯一の解決法は、彼女が自分の居場所や我が身にふりかかったできごとを記憶できるようになる前に、なるだけフラミンゴから彼女を遠ざけることだと思った。

おれたちが議論している間、ルーシーはパティオに寝ころんで、バーバラ・ストライサンドの木炭スケッチを描いていた。いまは記憶だけをもとに。それは顔全体を描いたもので、歯は野球ボールなみ、目は炎のゼリーまがい。

この絵の強烈さだけで、おれは不安になった。この娘は歩く爆弾だ。このスケッチブックがなかったら、この配線のまちがったエネルギーはいったい何に費やされてたかは神のみぞ知る。そして彼女が「ベガス・ビジター」紙を読めるくらい正気に返ったら、何をすることやら、特におれがつきとめたように、ストライサンドのアメリカーナ公演がもう三週間ほど先だと知ったら?

弁護士はやっとこさ、ルーシーがここにはいられないという点に同意した。マン法に基づく起訴、で弁護士資格剥奪手続きが始まって、生活手段を完全に断たれるという可能性がやつの決断の大きな要因ではあった。なかなかにキツい連邦政府の起訴になるよ。しかもおまえみたいな化け物サモア人が、南カリフォルニアの典型的中流階級陪審員を相手にするんだから。

「連中、これが誘拐だとさえ主張するかもよ」とおれは言ってやった。「チェスマンみたいに、まっすぐガス室送りだぜ。そしてそれをなんとか逃れたとしても、ネバダに送り返されて、強姦罪と合意ソドミーの裁判だぁ」

やつはわめいた。「よせ!　おれはあの娘を**かわいそうに**思っただけだ、**助けて**あげたかったんだよぅ!」

おれはにっこり。「ファッティ・アーバックルもそう言ったけど、それでどんな目にあわされたか知ってるだろ」

「だれ?」

「まあいいや。とにかく陪審相手に、彼女を助けてあげようとして、LSDをのませてベガスに連れ出して、素っ裸の背中マッサージのおスペをさせたって説明したらどうなるか、考えてもみろや」

やつは悲しそうに首をふった。「それもそうだな。その場で火あぶりだ……被告席の中で火あぶりにされちまう。まったく、最近じゃあだれかを助けてあげようとしても割にあわないことばっかだ……」

そろそろ「バーバラに会いに行く」頃合いじゃないかな、と二人してルーシーをなだめすかして車につれてきた。芸術作品を全部持ってくのは簡単に承知させられたけれど、なぜスーツケースまで弁護士が持ってきたがるのかはわからないようだった。「あの人を困らせたくはないんです。押し掛けて居座ろうとしてるとか思われるんじゃないかしら」

「いやだいじょうぶ」とおれはあわてて言った……がそれ以上のせりふが思いつかなかった。マルチン・ボルマンになった気分。この哀れなぼろクズを切り離したら、いったいどんな運命をたどるやら。牢屋？　人身売買？　ダーウィン博士はこういう状況下でならどうしただろう？　**（最適者**の……生存、だっけ？　正しい用語はなんだっけ。ダーウィンは**一時的**非適応ってなことは考えたことがあったのかな？「一時的錯乱」みたいな。ダーウィン先生はご自分の理論に、ＬＳＤみたいなもんの入る余地を考えていたんだろうか？）

いまのは全部、もちろんまったく学問的な考察。ルーシーは、おれたち二人の首にのっかった、命に関わる畏れもある石臼みたいなもんだった。彼女を放り出して切り離し、記憶がぐちゃぐちゃであってくれるように祈るしか選択肢はない。でも一部のＬＳＤ犠牲者――特に神経質な黄色人種ども――は、変な細部だけを覚えておく、イディオ・サヴァン的変な能力を発揮するときがある。ルーシーがあと二日ほど、完全な記憶喪失状態になって、そしてはっと気がついたときに唯一思い出せるのが、フラミンゴのおれたちのルームナンバーってことも……

これについては考えてみた……が、これ以外の手となると、彼女を砂漠につれだして遺骸をトカゲに喰わせてやることだけだ。おれにはそこまでする用意はなかった。おれたちが守ろうとしてるもの（われらが弁護士）に比べたら、ちょいと重すぎ。結局はそういうことだ。だから問題はバランスを考えることで、ルーシーを突き放すにしても、この娘がキレて悲惨なシッペ返しをくらったりしない方向へ押しやんないと。

この娘、金はあった。弁護士がそれは確認していた。「最低でも二百ドル。それに、最悪の場合には、この娘の住んでるモンタナ州のオマワリに連絡して引き渡せばいい」

これはやりたくなかった。ベガスでこの娘を放り出すより悪いことっていったら、「その筋」にこの娘を引き渡すことくらいだ……それに、いまはそんなの問題外だ。いまのところは。「おまえって、ホントしょうもない化け物だよな、え？まずこの娘を誘拐して、それで強姦して、こんどはブタ箱送りにする気？」

弁護士は肩をすくめた。「いや、いま気がついたんだけど、彼女には証人がぜんぜんいないんよ。おれたちについて何を言おうと、まったく意味なしなんだな」

「おれたち？」とおれ。

やつはおれをじっと見つめた。頭がはっきりしてきたのが見てとれた。LSDがきれかけてる。ということはルーシーもそろそろ正気づいてくるってこった。放り出すのはいましかない。

ルーシーは車でおれたちを待っていて、顔にゆがんだ微笑をうかべてラジオを聴いていた。こっちは十メートルほど離れたところに立ってる。遠くでおれたちを見ているヤツがいたら、なにやら荒っぽい間際の口論で「どっちが先にあの女をコマす権利があるか」なんて議論をしてるんだと思ったかもしれない。ベガスの駐車場ではあたりまえの光景だ。

おれたちはやっと、アメリカーナに予約を入れようと決めた。弁護士が車のほうににじりよって、なんか口実をつけて彼女の姓を聞き出し、そしておれが急いでホテルに戻ってアメリカーナに電話——おれが彼女の叔父さんで、彼女はアーティストでちょっと緊張気味に見えるかもしれないけど「優しく接してやってほしい」と要求。ルーム係は、もう礼は尽くしますので、と約束してくれた。

それから、このホワイト・ホエールをメルセデス六〇〇に換えるんだと言って、彼女を空港までつれてった。そして弁護士が、彼女の荷物を全部持って空港ロビーにつれていった。彼女はまだ正気に戻らずに、ヤツにつれられて行きながらもひっきりなしにしゃべっていた。おれは角を曲がったところに車をまわして弁護士を待った。

十分たって、やつは車にコソコソ近寄ってきて乗り込んだ。「ゆっくり出してくれ。目立たないように」と弁護士。

ラスベガス大通りに出たときにやつが説明してくれた話だと、なんでも空港のタクシー客引きに十ドルやって、この「酔っぱらったガールフレンド」をアメリカーナまで送ってやってくれ、予約は入ってるから、と話をつけたそうな。「ちゃんとつくようよろしく頼むと言っておいたよ」と弁護士。

「つくと思う？」

弁護士はうなずいた。「その野郎、おれが余計にわたした五ドルでタクシー代払って、運ちゃんにあの娘にお愛想ふりまくよう言っておくってさ。こっちは、ちょっと片づける用があるって言っといたんだけど、一時間たったらおれもホテルに行く——そして彼女がチェックインしてなかったら、ここに戻ってきてキサマの肺を引きむしってやる、と言っといたから」

「いいねえ。この街じゃ慎み深くなんかしてらんないもんな」

ヤツはにんまりした。「弁護士としての忠告だが、あのくされたメスカリンをどこにしまったか話してほしいぜ」
おれは車を停めた。クスリ袋はトランクの中だ。弁護士が二錠出してきて、二人で一錠ずつ食べた。太陽が、街の北西の低木がはえた丘の向こうに沈むところだった。ラジオからは、すてきなクリストファーソンの曲が流れてる。おれたちは暖かい夕暮れの中を、街へと車を流して戻った。電気仕掛けの白いクーペ・ド・ヴィルの、赤革シートでくつろぎながら。
「今日は大人しくしといたほうがいいかな」と、トロピカーナの横を通りざまにおれは言った。
「うん。いいシーフードのレストランを見つけて、赤サーモンを喰おうぜ。おれ、赤サーモンに対する強力な欲情を感じてんだ」と弁護士。
おれも同意した。「でもまずホテルに戻って、ちょっと落ち着こう。さっと一泳ぎして、ラムでもどう？」
やつはうなずくとシートにもたれて空を見上げた。夜が静かにおとずれようとしていた。

第16章　退行連中どもには救いなし……殺人的ジャンキーに関する考察

フラミンゴの駐車場をぬけて、裏をまわり、迷路を通っておれたちのウィングまできた。駐車は問題なし、エレベータは問題なし、スイートも戻ってみると死んだように静まりかえってる。半ば暗くなってて、平和にエレガントで、でっかい移動式の壁が芝生やプールに開くようになってる。

部屋の中で唯一動くものといったら、電話でチカチカ点滅してる赤いメッセージランプだけだった。「たぶんルームサービスだよ。さっき、酒と氷を頼んどいたから。留守中にきたんだろ」

弁護士は肩をすくめた。「もうたっぷりあるのに。でも、もっとあってもバチはあたらんな。ま、いっか。持ってくるよう言ってやれよ」

おれは電話をとってフロントに電話した。「伝言って何？　あかりがついてるけど」

フロント係はためらう様子を見せた。紙をめくる音が聞こえる。そしてやっと答えた。「ああ、ありました。デュークさまですね？　ええ、二通ご伝言がございます。一つは『ラスベガスへようこそ、全米検察官協会』」

「すばらしい」とおれ。

「……そしてもう一通は、『電話ください、アメリカーナ一六〇〇号室ルーシーより』」

「なにぃ？」

そいつはメッセージを繰り返した。まちがいない。

「なんてぇこった！」おれはつぶやいた。
「は？　いまなんと？」とフロント係。
おれは電話を切った。

＊　＊　＊

弁護士は、またも洗面所で超ゲロ吐きをやらかしてた。おれはバルコニーから外に出て、プールを見つめた。おれたちのスイートの外で輝いてる、腎臓型のきらめく水のかたまり。オセロみたいな気分。こうしてものの数時間ほどこの街にいただけで、すでに古典的悲劇の下地ができあがってるとは。ヒーローは呪われていた。すでに己の破滅の種をまき終え……
でも、この薄汚ねぇドラマのヒーローってなぁだれなんだ？　おれはプールからふりかえって、弁護士とご対面。いま洗面所から出てきたところで、タオルで口を拭いている。目はうつろでおとなしい。「まったくこのメスカリンときたら」とつぶやく。「もうチト純度を下げればいいのに。ローレイドと混ぜるとかなんとかなんないのかなぁ」
「オセロはドラママインを使ったぞ」とおれ。
やつはうなずくと、タオルを首にかけてテレビのスイッチを入れた。「うんうん、そういう療法の話はきいたよ。おまえの言ってたファッティ・アーバックルはオリーブ油を使ったって」
「ルーシーから電話があったよ」とおれ。
「なにっ？」やつは目に見えて身を沈めた——銃弾を受けた動物みたいに。
「フロントからさっき連絡が入った。アメリカーナホテルの一六〇〇号室にいるって……電話くれってさ」
弁護士はおれを見つめた……とそのとき、電話が鳴った。
おれは肩をすくめて受話器をとった。隠れても無駄だ。居場所がバレちまったし、それでもうたくさん。

「もしもし」
それはまたフロント係だった。
「デューク様ですか？」
「そうだけど」
「ああデュークさま、どうも。さっきは急に電話が切れてしまって申し訳ありませんでした……でもやはりかけ直させていただいたほうがいいかと思いまして、というのも、ちょっと思ったんですが……」
「**なんだよ！**」自分たちが追いつめられてきたのが感じられた。このクズ野郎め、おれに何かぶちまける気だ。あのきちがいマンコめ、こいつにいったい何を**口走りやがった？**　おれは平静を保とうとした。「せっかくいまニュースを見てるってのに！」と絶叫。「それをじゃまするなんて、何考えてんだよ！」
沈黙。
「**さっさと言え**ったら！　頼んだ氷はまだかよ！　酒は！　戦争してるんだぞ！　人がどんどん死んでる！」
「死んでる、んですか？」フロント係はそのことばをほとんどささやくように言った。
「ベトナムでだよ！　このクソテレビで！」おれはわめいた。
「ああ……そう……そうですよね。ひどいもんです、この戦争は。いつになったら終わるんでしょうねえ」
「で、それはさておき、**用はなんだ？**」
「ああ、失礼いたしました」とやつは、フロント係の口調にサッと戻った。「申し上げておいたほうがいいと思いまして……警察の会議でいらしてるんですから……さっきのメッセージをお残しになった女性の方は、非常に精神的に**不安定なようだったん**です」
相手はそこで口ごもったが、おれは何も言わなかった。
「それは知っておかれたほうがいいかと」やっとフロント係が言った。
「おまえ、彼女に**なにを**しゃべった？」
「なにも。**何一つ**言ってませんよ、デュークさま。単に伝言を受けただけですから」間。「でも、あの女性と話をする

のは、なかなか大変でして。とても……なんというか……不安げな様子でして。泣いていたようです」

「泣いてたぁ？」脳が完全にロックアップ。何も考えられない。クスリが主導権をとってきてやがる。「なんで泣いてたの？」

「えー……その……なぜかはおっしゃいませんでした。でもデューク様のお仕事を存じておりましたので、わたくしとしては——」

「わかった」おれはあわてて言った。「なあおい、その女性がまた電話してきたら、優しくしてやってくれよ。あれはわたしらの**ケーススタディ**なんだから。じっくり観察しているもんでね」頭が解凍してきた。ことばがスラスラ出てくる。「もちろん、彼女に実害はまったくない……もめごとも起こさない……この女性はローダナムをやっていて、コントロールされた実験なんだけれど、でもひとしきり終わる前に、きみの協力も必要になりそうだな」

「ええ……**もちろんですとも**。わたくしどもはいつも、警察にはよろこんで協力させていただいております……ただもめ事は困りますので……つまりわたくしどもにとって、ということですが」

「心配するな。きみたちは保護されている。ただ、このかわいそうな女性は、ふつうの困っている人を相手にするのと同じ扱いで接してやってくれや」

「え？」フロント係は、ことばに詰まるようだった。「あ……はいはい、おっしゃってることがわかりました……ええ……すると責任は**そちらで**とっていただけるわけですね？」

「もちろんだ。さて、ニュースに戻らないと」

「ありがとうございました」とフロント係がつぶやく。

「氷を持ってきてくれよ」とおれは受話器を置いた。

弁護士はテレビに向かって穏やかに微笑んでいた。「よくやった。いまのおかげで、これからはライ病患者並の扱いをしてもらえるだろうよ」

おれはうなずいて、背の高いグラスにシバス・リーガルを満たした。

「テレビじゃ**ニュース**なんて、もう三時間もやってないし」と弁護士はぼんやりとした口調で言った。「だからフロン

トのバカたれは、おれたちがなんか特別なオマワリチャンネルでも観てるんだと思ってるぜ、かわいそうに。もっかい電話して、氷といっしょに三千ワットのコンデンサーも持ってくるように言っとけよ。手持ちのが焼き切れたからって言って……」

「ルーシーのこと忘れてるだろう。おまえを探してるぞ」

ヤツは笑った。「うんにゃ。あれは**おまえを**探してんの」

「おれ？」

「そ。あの娘、ホントおまえにメロメロでさ。あの空港で彼女を始末できる唯一の方法は、おまえがおれを砂漠に連れ出して決闘しようとしてるって話すことだったの――おまえが彼女を独占できるように、おれを追い出したがってるんだってね」弁護士は肩をすくめた。「だってさ、**なんかしら**言うしかないだろ。だから、アメリカーナにいって、どっちが戻ってくるか待ってて、って言ったわけよ」やつはまた笑った。「彼女としては、おまえが勝ったと思ったみたいね。その伝言って、**おれ宛**じゃなかっただろ？」

おれはうなずいた。理屈にもなんにもなっちゃいないけど、でもそれが事実なのはまちがいない。ドラッグ的道理。リズムは残酷なまでに明瞭――そしてこいつにとっては、これは一分の隙もない論理展開ってわけ。

やつは椅子にふんぞりかえって、『スパイ大作戦』に集中している。

おれはしばらく考えてから、荷物をスーツケースに詰めはじめた。

「なにしてんの？」とやつ。

「気にすんなって」ジッパーが一瞬ひっかかったが、無理矢理しめた。そして靴をはいた。

「ちょっと待てよ。おい、おまえまさか、**出てく気**？」

おれはうなずいた。「そのまさかよ。ここを出る。でも心配しなくていいよ。出際にフロントに寄っといてやるから。おまえの面倒を見るようにってね」

やつはあわてて立ち上がり、ドリンクを蹴倒した。「よし、ちくちょうめが、こりゃ**マジだ**！　おれの〇・三五七はどこだ？」

おれは肩をすくめ、シバス・リーガルのボトルを手提げカバンに押し込みつつもやつのほうは見なかった。「ベーカーで売ったよ。だからおまえに三十五ドルの借りね」

「なんだとぉ？　あの代物、大枚百九十ドルもしたんだぞぉ！」とやつは叫んだ。

おれは微笑んだ。「おまえ、あのピストルの入手先は**話してくれた**じゃないか。忘れたの？」

やつは口ごもり、考えるふりをした。「ああそういや」ようやくやつは言った。「そうだった……あのパサディナのチンピラ……」そこでやつは、いきなり居直った。「ってことはつまり、**千ドル**かかってるんじゃないか！　あのクソ野郎、麻薬捜査官を撃ったんだぞ。**終身刑に**なろうってとこだ！……クソゥ、法廷で三週間過ごして、もらえたのがあのろくでもねぇ六連発だけだ」

「バーカ。ジャンキー相手にツケで商売するなって言ってやったろ——特に連中が**有罪のときは**。あのクズ野郎が支払いの変わりにおまえの腹に一発ぶちこまなかっただけでもありがたく思えってんだ」

弁護士は身を沈めた。「ありゃおれの**いとこだ**。陪審は**無罪の判決**を出した」

「よく言う！」おれは決めつけた。「あのクズのジャンキー野郎と会って以来、あいつ何人撃ってる？　六人？　八？　あの悪どいカスガキ、有罪もいいとこで、おれが一般論だけで射殺してやってもいいくらいだ。捜査官を撃ったのはまちがいなくあいつだろう、あのホリデイ・インの女の子も……それとあのヴェンチューラの野郎も！」

ヤツは冷たい目つきでおれを見た。「口に気をつけろよ、おい。かなり**派手な罵倒を**始めてくれるじゃないの」

おれは笑うと、ベッドの足下の山にかばんを投げてから、すわってドリンクを飲み干した。本気でここを出るつもりだった。出るのはいやだったけれど、でもこのイベントで何ができるにしても、ルーシーと変な関わり合いになるリスクに比べれば大したことはないと思ったからだ……はいはい、もし正気に返ったら、あれもまちがいなくすばらしい女性なんでしょうよ……繊細で、あの闘牛演技の下には、美しい業(カルマ)の秘密の蓄えをお持ちで。偉大な才能に見事な直感……ちょっとでかい女の子が、あわれにも十八歳の誕生日の少々前に、完全におつむがいかれ切っちゃったってだけね。

個人的には、彼女になんの恨みもなかった。が、目下の状況下では、彼女がおれたち二人に最低二十年はまちがいなくくらわせられるのもわかっていた。たぶんそれは、被告席に立つまでおれたちが一度も耳にすることのない、なにや

ら身の毛もよだつようなお話のためなのだ。

「はい、あの被告席の二人が、あたしにLSDをのませてホテルにつれていった連中です……」

「ルーシー、それで連中に何をされたね？」

「はいそれが、ちゃんと思い出せなくて……」

「ほうそうかね？　ひょっとしてこの地方検察官のファイルからの文書を読むと、記憶がよみがえってくるんじゃないかな、ルーシー。これはきみが、ミード湖近くの砂漠を全裸でさまよっていたのを保護されたときに、きみがスクウェイン巡査に対して行った供述の調書だ」

「あの人たちに何されたのか、はっきりとはわかんないですけど、でもひどいことされたのは覚えてます。一人があたしをロサンゼルス空港でナンパして。その人がクスリもくれたんです……そしてもう一人はホテルにやってきて。すっごい汗かいてて、ものすごい早口でなにをしてほしいのかぜんぜんわかんなくて……いえ、その時点でこの人たちがあたしになにをしたか、**正確には**思い出せません、だって、まだあのクスリが効いていたんです……ええ、この人たちがくれたLSDです……それでなんかずいぶん長いことはだかだったような気がします、そこにいた間ずっとだったかもしれません。確か寄るだったと思います、だってここに人たちがずっとニュースをつけてたからで、はい、ウォルター・クロンカイトです、あの顔がずっと出てたのを覚えてます……」

いいや、こんなのごめんだよ。あの娘の証言を疑う陪審員はいないだろう、特にそれが涙の霧と、ひわいなLSDフラッシュバックの中から、とぎれとぎれに繰り出されたら。そしておれたちがあの娘になにをしたか、はっきり思い出せないという事実によって、それを否定するのも不可能になってしまう。陪審員は、おれたちがなにをしたか、もう**確信しちゃってる**だろう。連中、二ドル九十五セントのペーパーバック『根本まで挿入』『皮一枚の深み』とかで、おれたちみたいな輩のことは読んでるだろう……そして、五ドルのポルノ映画でおれたちみたいな連中を見てるはず。

そしてもちろん、おれたちとしては自分の弁護に証言台にたつようなことは絶対にできない——ホエールのトランクの中身をやつらがさらった後では絶対にダメ。「裁判長、検察側の証拠AからYまでを陪審に提示いたします——はい、これは被告人たちが逮捕および強制押収の際に保有していた、非合法薬物や麻薬類のすさまじいコレクションでありま

す。この逮捕と強制押収に際しては警官**九人**が動員され、うち六名は未だ入院中であります……さらに証拠物件Ｚは、全米検察官会議の議長が選出したプロの麻薬専門家たち三名による宣誓供述書であります。なおこの議長は、被告たちによる年次会議の潜入、妨害、破壊の試みにをきわめて遺憾かつ恥ずかしく思うものであるとのことです……これら専門家の宣誓によると、この被告らが逮捕時に保有していた薬物の蓄えは、アメリカ海兵隊員の一部隊を丸ごと**殺せる**ほどの量であるとのことです……そして紳士諸君、いま私が「殺す」ということばを使いましたのは、いまこうしてあなたがたの前に恥辱をこらえてすわる、この破滅させられ貶められた、かつては無垢だったティーンエージャーの精神と道徳心を**完全に破壊し尽くす**のに、この**見るのも忌まわしい**強姦魔どもが使用した、無慮大数の薬物について思いめぐらすにつけあなたがた一人残らず身中に沸き上がるのをおさえられぬものとわたしが確信します、恐怖と嫌悪に対する敬意をこめてのことであります……そうですみなさん、やつらがこの少女に与えた薬物は、彼女の脳味噌を恐るべき入念さで混乱せしめ尽くすほどの量であったために、彼女はもはや自分が耐えるべく強要された乱交の醜悪なる細部を**思い出せもしない**のであります……そして陪審員の紳士淑女のみなさん、この連中は己たちの口にするのも忌まわしき目的のために、この少女を**利用しつくした**のであります！」

第17章　とっても危険な薬物によるひっどい体験

もう対処のしようがなかった。おれは立ち上がって、荷物をまとめた。いますぐ街を出るのが肝心だと思われた。

弁護士もやっとこれを認識したらしい。「待てよ！　おれをこのヘビの巣窟に置いてく気かよ！　この部屋は**おれ名義で**借りてるんだぞ！」

おれは肩をすくめた。

「わかったよ、しょーがねーなぁ」と弁護士は、電話に向かった。「じゃあおれからあの娘に**電話すっから**さ。彼女のことはおれがケリつける」とうなずく。「確かに、彼女はおれの問題だもんな」

おれは首を横にふった。「いや、もう事態が進展しすぎてるよ」

「おまえって、カスみてぇな弁護士にもなれないヤツな。まあ見てろって。おれがなんとかする」

ヤツはアメリカーナに電話して、一六〇〇号室につながせた。「よおルーシー。うん、おれだよ。伝言はきいた……え？　いやまさか、あのウンコ野郎、一生忘れないような目にあわせてやっ……え？……おう、そのまま放ってきたよ。ボコボコにして、歯を全部引き抜いてやった……」

ぎゃぁ。ＬＳＤまみれの頭した相手に、なんつーひどいこと聴かせてるんだよ。

弁護士はつづけていた。「でもちょっと困ったことになってさ、おれ、すぐにここを出なきゃならんのだ。あのくそバカ野郎、下で不渡りの小切手切りやがって、しかも保証人として**おまえの**名前を挙げたんだと、だからおまえたち二人とも、追っ手がかかってるんだ……うん、わかるけど、でも人ってホント見かけによらんのよ、ルーシー。もう根っこ

から腐りきったやつってのはいるんだよ……とにかく、絶対にやっちゃいけないのが、ここに電話してくること。すぐに逆探知されて、おまえ、すぐに牢屋に入れられちゃうぞ……いや、おれはすぐにトロピカーナに移る。部屋が決まったらまた連絡するから……うーん、たぶん二時間ほどだな。自然にふるまわないと、**このおれも**捕まっちまう……たぶん偽名を使うけど、それもまた教えるから……うん、チェックインしたらすぐに……え？……もちろんだよ、サーカスサーカスにいって、シロクマの演技を見よう。もう縮みあがっちゃうぞ……」

　やつはしゃべりながら、不安そうに受話器を左右に動かしていた。「いや……なあおい、電話を切らないと。たぶんこいつも盗聴されてる……うん、わかる、ひどい話だけど、もうすんだことだし……**おぉぉまずい！　やつらがドアを蹴破ってる！**」弁護士は受話器を投げ下ろすと、怒鳴りだした。「よせ！　くるな！　おれはなにもしてない！　デュークがやったんだ！　神に誓って！」そして電話機を壁に蹴りとばし、そっちに身をかがめてまたわめきだした。「彼女の居場所？　知らん！　モンタナに戻ったんだろう。ルーシーはおまえらなんかに捕まるもんか！　もう消えたよ！」そしてまた受話器を蹴飛ばし、それを手にとって、口から三〇センチくらいのところに据えると、長く震えるようなうめき声をあげた。「よせ！　いやだ！　**そいつを**おれに使う気か！　やめろぉぉ！」やつは金切り声を挙げた。そして受話器を叩きつける。

「ふう。やれやれ」とやつは静かに言った。「一件落着。いまごろ彼女、焼却炉にでも飛び込もうとしてるだろうよ」そしてにっこり。「うん、ルーシーからは二度と連絡はないはず」

　おれはベッドにひっくり返った。やつの演技で悪いよじれがきた。一瞬、ついにヤツの頭が切れたかと思った——本気で目に見えない敵に攻撃されてると信じてるのかと思ったじゃないか。

　でも、部屋はまた静かだった。ヤツは椅子に戻って、『スパイ大作戦』を見て、ハッシシパイプを暇そうに弄んだ。パイプは空っぽだった。「あの阿片はどこいった？」とやつは尋ねた。

　おれはクスリ袋を投げた。「気をつけろよ。あまり残ってないぞ」

　ヤツは笑った。「弁護士としての忠告だが、心配すんじゃねーよ」そして洗面所のほうにあごをしゃくった。「おれのひげ剃りセットの中に茶色のびんがあるから、一発キメてみろや」

「なんなの？」

「アドレノクローム。あまりいらんよ。ほぉんのちょっとだけ味見ね」

おれはびんを取ってきて、紙マッチの先を中に浸した。

「そんくらいにしとけ。そいつに比べたら、純粋メスカリンがショウガビールみたいに思えるぞ。やりすぎると完全に頭イカレる」

おれはマッチの頭をなめた。「**こんなもん**どこで手に入れたんよ。買えるもんじゃないぞ」

「気にすんなって。純度一〇〇%よーん」

おれは悲しげに首をふった。「信じられねーやつ！　**こんどは**どういう化け物クライアントを拾ってきたわけ？　このブツって、出場所は一ヶ所しかないぞ……」

やつはうなずいた。

「**生きた**人体のアドレナリン腺だ。死体からとってもダメだよな」とおれ。

「知ってる。でもそいつ、現金ぜんぜん持ってなかったんよ。例の悪魔崇拝キチガイの一人で。人血はどうだっていいやがる——一生で一度もないくらいハイになれるとさ」とヤツは笑った。「まさか本気とは思わなかったから、そんなものより純粋アドレノクローム一オンスかそこらのほうがいい——あるいは新鮮なアドレナリン腺をかじるのでもいいやって言ったんだ」

すでにブツが効いてきてるのがわかった。最初の波は、メスカリンとメセドリンの組み合わせみたいな感じだった。一泳ぎしてこようかな。

「うん。そいつは幼児猥褻行為であげられたんだけど、やってないって言うの。『**子供となんか**やるわけないじゃないっすか。だって**小さすぎるもん**！』だと」ヤツは肩をすくめた。「いやあ、返事のしようがないじゃん。救いがたい狼男だって、法的な助言は受けられるんだし……それにその変態野郎を断るなんて、**どう考えても**できないよ。ペーパーナイフかなんかを手にして、おれの松果腺でもえぐりだしかねんだろ」

「えぐりだしゃよかったのに。なんならその役を、メルヴィン・ベッリにでもやらせりゃいい」もうほとんど口もきけ

なくなっていたが、おれはうなずいた。からだは、二二〇ボルトのコンセントにつっこまれたみたいな感じ。やっとの思いでつぶやいた。「そいつを手に入れたらいいよな。一握りくらい喰って、どうなるか見んの」

「そいつって？」

「松果腺を抽出したの」

やつはおれをまじまじと見つめた。「ほう。そいつはいい考えだねえ。そんなもん、一嗅ぎしただけで、なんか医学大百科から飛び出してきたみたいな代物になっちまうぞ！　頭はスイカみたいにふくれあがって、たぶん二時間で体重も五〇キロは増えて……ツメ、イボが血を流して、そして背中からでっかい毛だらけオッパイが六つくらい生えてくる……」そして憐れむように頭をふった。「いやあ、おれはなんでも試すけどね、地獄にいったって、松果腺には手は出さんよ。こないだのクリスマスに、だれかにチョウセンアサガオ丸ごともらって——根っこだけで一キロはあったかな。一年分はもつ量だ——でもおれは、そいつを丸ごと二〇分で喰っちまったぞ！」

おれはヤツのほうに身を乗り出して、熱心に聞き入っていた。ちょっとでもやつが口を止めたら、首根っこを捕まえて、無理にでももっと早くしゃべらせただろう。おれは熱心に尋ねた。「おおっ、そうか！　チョウセンアサガオ！　それでどうなった？」

「幸運にもほとんどはすぐに吐いちゃったけど。でも、それでも三日にわたって目が見えなくなった。歩けもしないんだぜ！　全身がろう人形。最悪の状態だったんで、みんなおれを台車にのせて農場の家までつれて帰ったんだ……おれがしゃべろうとしてたって言うんだけど、でも実際にはアライグマにしか聞こえなかったと」

「すばらしい」とおれ。でも、ほとんどヤツの言うことも聞こえなくなっていた。ビリビリにクスリが効きすぎて、手はベッドのシーツを意識もしないうちにかきむしって、やつがしゃべっている間にそれを全部自分の下からつかみだしていた。かかとがマットレスに食い込んで、膝はどっちも硬直……目玉がふくれあがって、ソケットから飛び出そうとしてるのが感じられる。

「さっさと話を続けろ！」とおれはうなった。「**どうなった**んだよ！　**腺**はどうした！」

やつは後ずさり、部屋を横切りつつもこっちから目を離さなかった。「おまえ、もういっぱい飲んだほうがいいかも」

と不安そうに言う。「ったく、あのブツに完全にやられちまってるだろ、おまえ」

おれはにっこりしようとした。「ああ……もっとひどい……いや、これがひどい……」あごが動かしづらい。舌が燃えるマグネシウムみたいだ。「いや……心配すんな」おれはやっとの思いで歯の間から言った。「おまえちょっと……おれをプールにつっこむとかしてくんない……」

「なにやってんだぁ！　おまえ、やりすぎだよぉ。爆発寸前じゃん！　まったくその顔、見て見ろよ！」とヤツ。

おれは動けなかった。もう完全に全身麻痺。体中のすべての筋肉が収縮。目玉も動かせないくらいで、まして頭を動かしたりしゃべったりなんて、とてもとても。

「そう長くは続かないよ。最初の効きが最悪だから。そのまま逆らわずに流れといて。いまおまえをプールに入れたら、石みたいに底まで沈むぞ」

死ぬ。もう確信してた。肺すら機能してないようだ。人工呼吸がいる、でも口を開いてそれを言えない。死ぬぞ。ベッドに横たわったまま、動けず……まあいいや、少なくとも苦痛はないから。たぶんあと数秒ですべて真っ暗になって、あとはもうどうでもよくなる。

弁護士は、テレビ見物に戻ってた。またニュースをやってる。ニクソンの顔が画面いっぱいに映ったけど、言ってることがどうしようもなく支離滅裂。聞き取れる唯一のことばは「犠牲」の一言だけ。何度も何度も。「犠牲……犠牲……犠牲……」

自分が荒い呼吸をしてるのが聞こえた。弁護士もそれに気がついたらしい。「まあリラックスしとけって」と肩越しに、おれの方を見もしないで言った。「逆らっちゃだめだぞ、脳みそにあぶくができっからな……卒中、動脈瘤……そのまま干からびて死んじまうぞ」そしてこっそり手を伸ばしてチャンネルを変える。

やっと口をきいて動き回れるようになったのは、真夜中過ぎてからだった……が、クスリが完全にぬけたわけじゃない。電圧が、二二〇から一一〇に下がったくらいの話。しゃべりまくる神経衰弱野郎って感じで、野生動物みたいに部屋の中をとびまわり、汗はダラダラ、頭も二、三秒以上は一つのことに集中できない。

弁護士は何件か電話してから受話器を置いた。「新鮮なサーモンが食えるとこって一ヶ所しかないんだって。しかも日曜は休み」

「そうだろうとも！」おれは決めつけた。「あの役立たずのキリストキチガイどもめ！　ネズミみたいに増殖してやがる！」

やつはおもしろそうにおれのことを見やがる。

「プロセスはどうだ？　ここに店出してねーの？　デリカテッセンとか？　奥にテーブルがちょっとあってさ。ロンドンではすんげえメニューが出てくる。一回喰ったけど、食い物はホントに驚異的……」

「しっかりしてくれよぉ」とヤツ。「この街じゃ、プロセスなんて**口にもしない**ほうがいいぜ」

「そうだな。ブロア刑事を呼べ。あいつは味のわかるやつだ。**リストを**持ってるはずだ」

「それよりルームサービスを呼ぼう。カニサンドイッチと、クリスチャンブラザース・ムスカテル一びんで二〇ドルほどだぜ」とヤツ。

「いやだ！　**絶対**ここを出る。空気が吸いたい。レノまで車とばして、でっかいツナサラダを喰おう……ヘッ、大してかからんよ。たった八〇〇キロほどだろ。砂漠じゃ渋滞もないし……」

「よせやい。そこは軍用地だろ。爆弾試験に神経ガス――絶対いきつけないって」と弁護士。

結局おれたちは、ダウンタウンを半ばいったところの「ビッグフリップ」という場所にしけこむことになった。おれは一ドル八八で「ニューヨークステーキ」と称するものと頼んだ。弁護士は二ドル九セントで「コヨーテ・ブッシュバスケット」なるものを……そしてそれが終わると、水っぽい「ゴールデンウェスト」コーヒーをポット一杯分飲んで、飲んだくれたカウボーイっぽい連中四人が、ピンボールマシンの間でおかまを蹴りつけて半殺しにするのを眺めた。

「この街では活動が停まることはないのだねえ」と弁護士は、車に向かう途中で言った。「コネさえあってしばらくここらにいたら、たぶん好きなだけ新鮮なアドレノクロームを手に入れられるんだろうねえ」

おれも同意したが、その時にはもう元気が完全ではなかった。もう八〇時間かそこら、ぜんぜん寝てなくて、あのクスリでのおっかない苦行のせいでクタクタに疲れ切ってった……明日はマジになんないと。ドラッグ会議は正午に開始

予定だった……そしてどう対処したものか、まだよくわかんなかったのだ。だからホテルまで来るまで戻ると、深夜のイギリス製ホラー映画を観た。

第18章　本腰入れてお仕事……ドラッグ会議開会日

「全国の検察官一同になりかわり、みなさんを歓迎いたします」

おれたちはデューンズホテルの大舞踏会室の、千五百人ほどの群衆の最後部の端っこあたりにすわっていた。部屋のずっと前のほうで、後ろからはかろうじて見えるのが、全米検察官協会の専務会長だ——中年の、身なりのいい、出世した共和党ビジネスマンタイプのやつで、名前はパトリック・ヒーリー——そいつが、第三回麻薬等危険薬物全国会議の開会の辞を述べていた。その式辞は、おれたちのコーナーにある、鉄パイプにマウントされた、でっかいローファイスピーカを通じて聞こえてくる。そういうスピーカがほかに一ダースも見られたかな。どれも後ろを向いて、群衆の頭上にぬっとそびえてる……だからどこにすわろうと、あるいは隠れようとしても、いつだってでっかいスピーカの大口をのぞきこむはめになる。

これは変な効果をもたらした。舞踏会場の核部分にいる人は、ずっとずっと前の方の壇上で実際にしゃべってるだれぞをながめるかわりに、最寄りの拡声器を見物するようになっていたのだ。こういう一九三五年式のスピーカ配置のおかげで部屋は完全に非人間化されていた。なにやら不気味で権威主義的なものが感じられた。このサウンドシステムを組んだのがだれか知らないけど、どうせどっかオクラホマ州ムスコギーのドライブイン・シアターから休暇をもらってる、保安官の技術助手かなんかで、そこのシアターでは経営陣が個別の車用スピーカを買えないので、駐車スペースの電柱にのせたでっかいスピーカ十台に頼ってるんだろう。

一年かそこら前に、ワシントンの田舎でやったスカイリバー・ロックフェスティバルに行ってきたけど、シアトル解

放戦線からのド貧乏なガイキチどもが一ダースほど集まって、アコースティック・ギターのどんな小さな音――そして咳やステージ上にブーツが落ちる音――まで一つ残らず、一キロ先の茂みの中にうずくまってる半分つんぼのＬＳＤ廃人どもに聞こえるようなサウンドシステムをつくってたっけ。

　でもベガスの全米検察官会議が手配できたいっちゃんマシな技師でも、どうやらこいつは手に負えなかったらしい。こいつらのサウンドシステムは、南北戦争のユリシーズ・Ｓ・グラント将軍がヴィクスバーグ制圧に際して部隊に演説するときにでっちあげるであろう代物だ。前のほうからの声は、割れちゃってモワモワした甲高い緊急じみた感じになっていて、ディレイのおかげで、壇上の話者の身振りとことばが、ちょうどずっこけるくらいずれるようになってる。

「われわれわぁ、この国のドラッグカルチャァとぉ、折り合いをつけなくてはなりませぇん！……せぇん……せぇん……」こういう残響が、部屋の後ろのほうに混乱した波となって漂ってくる。「大麻たばこの吸い口が『ローチ』と呼ばれるのわぁ、それがゴキブリ（コックローチ）に似ているからでぇす……でぇす……でぇす……」

「こいつらバカぁ？　いったいぜんたいなに言ってんの？」弁護士がささやいた。「ジョイントがゴキブリなんかに見えるとしたら、ＬＳＤで完全に頭いかれきってるよ！」

　おれは肩をすくめた。明らかにわれわれは、先史時代の集会にまぎれこんじまったわけだ。ブルームクイストとかいう「ドラッグ専門家」の声が、近くのスピーカから割れて響いてくる。「……こうしたフラッシュバックですが、患者にはまったくわかりません。かれはそれがすべて終わったと思って、六ヶ月ほど更正して暮らしています……そこへ、なんてことでしょう、トリップがまるごと戻ってきてしまうのです」

　ほっほお、なんてこったい、そんなみょうちくりんなＬＳＤがあるもんかよ！　Ｅ・Ｒ・ブルームクイスト医学博士が基調報告をしていて、こいつは会議の大スターの一人だった。著書に『マリファナ』というペーパーバックがあって、これはカバーによれば――「ありのままを語る」そうな（ああそれと、ローチ／ゴキブリ理論を編み出したのもこいつだってさ……）

　本のカバーによると、このセンセは「南カリフォルニア大学医学部の外科臨床助教授（麻酔学）」だと……そして「危険薬物濫用に関する権威として有名」なんだって。ブルームクイスト博士は「全米ネットワークテレビのパネルにも登

場し、政府機関のコンサルタントをつとめ、アメリカ医学協会の精神健康委員会における薬物中毒とアルコール中毒委員会の委員をつとめた」。出版社によると、こいつの英知は広範に印刷配布されているとか。明らかに、オマワリ集団相手に講演して一発五百ドルから千ドルくらいむしる、二流インチキ学者集団の重鎮の一人ってわけね。

ブルームクイスト博士の本は、国のならべるイカサマ出鱈目集大成って感じ。四十九ページでセンセは、大麻社会における「存在の四段階」について解説なさってる。「クール、グルーヴィー、ヒップ、堅物」——そして後にいくほどランクが低い。ブルームクイスト曰く「堅物はほとんど絶対にクールではない。かれは『わかってない』、つまり『いけてない』のである。しかしながら、もしその人物がなんとかわかってくると、一段あがって『ヒップ』になる。そしていけてることを肯定する段階まで進めれば、かれは『グルーヴィー』になるそしてそれ以降、運がよくて、さらに修行をつむことによって『クール』の位階にまで到達できるようになるのだ」

ブルームクイストの書きっぷりは、大学のカクテルラウンジでティモシー・リアリーと議論して、しかもドリンク代は全部払ってやったヤツみたいだ。そしてたぶん、だれかリアリーみたいなやつが、ドラッグカルチャーではサングラスは「ティーシェード」と呼ばれるんだよ、なんていうでたらめを、いけしゃあしゃあとまじめくさってこいつに教えこんだんだろう。

この本の中身って、警察署のロッカー室に青焼き広報として貼ってあった、危険なごたくと同じだもんな。

こんな具合。**狂乱中毒者に要注意！　諸君の命にかかわります！**　ティーシェードのために目は見られないけれど、心中の緊張のためににぎりしめられた拳は白く、ズボンは強姦相手を見つけられないとすぐに自慰にふけるため、精液でこわばっている。尋問するとよたよたして意味不明の発言を乱射。諸君のバッジにも敬意を示さない。狂乱中毒者にはこわいものはない。手元にあるあらゆる武器を使って、なんの理由もなく攻撃してくる——諸君の武器を奪う場合もあります。**要注意**。マリファナ中毒容疑者を保護する警官は、必要な武器を即座に使用すること。適切なタイミングで一針（相手に）負わせれば、自分の九針の怪我が避けられる。幸運を祈る。

署長

いやまったく。幸運（ツキ）はいつだって大切だよな。特にラスベガスでは……そしておれたちのツキは下がる一方。一目見れば、このドラッグ大会はおれたちの思ってたものとはぜんぜんちがうのがわかる。あまりにオープンすぎるし、参加者もバラバラすぎる。群衆の三分の二は、街の向こう側でやってるフレーザー・アリ再勝負への道中に、ショー目当てで立ち寄ったという風情。あるいはリストンVSキー保安官の、老ヘロイン売人向けチャリティ勝負かな。

部屋にはそこそこ、あごひげや口ひげ面に、超モッズ衣装がたくさんいた。検察会議はどうやら、覆面麻薬捜査官やその他嗅ぎ回り屋稼業の連中のかなりの量を惹きつけたみたい。シカゴからきた検察助手は、うす茶色の袖無しニットスーツを着てる。そいつの連れの女は、デューンズ・カジノのスターになってた。彼女があたりをうろつく様は、フィンチ大学同窓会でのグレイス・スリックまがい。古典的カップルね。いわゆるヘロイン系スウィンガー。

最近だと、オマワリだからって「いけてない」わけじゃない。そしてこの会議には、本物のクジャク連中も集まってた。でもおれ自身の衣装――四十ドルのＦＢＩウィングチップと、パット・ブーン風マドラススポーツコート――はマス・メジアンくらいの平均値としてちょうどよかった。というのも都会のヒップスター一人につき、ミシシッピー州立高校のフットボールコーチ助手でも通りそうな、ださい白んぼ連中が二十人はいたから。

そういう連中を見て、弁護士は非常に不安がっていた。カリフォルニア人のほとんどと動揺に、ヤツはアメリカのど田舎出のこういう連中の、実物を見たことがなかったから。ここに集まったのはアメリカ中部の生え抜きのオマワリども……そしてまったく、そいつらの見かけもしゃべりかたも、呑んだくれのブタ百姓集団まがい！

おれはヤツをなだめようとした。「いやあ、ホントはいい人たちなんだよ。お知り合いになればね」

やつはにっこりした。「お知り合い？　バカ言うんじゃねえ。こういう連中には血を見る思いをさせられてよっく知ってる」

「ここらで血ってことばは口走るなって。こいつら舞い上がっちゃうから」

やつはうなずいた。「確かに。こういうクソどもは『イージー☆ライダー』で見たけど、でもまさかホントにいるとは思わなかった。こんな感じだとはね。しかもこんな何百人もいるとは！」

弁護士は、ダブルブレストの青いピンストライプのスーツを着ていた。おれのよりずっとスタイリッシュな装いだ……が、それがかえってやつを一層不安にしていた。というのも、この群衆の中でスタイリッシュってことは、おそらくそいつは覆面警官ってことで、この弁護士はそういう方面でヒジョーに神経質な連中を相手にして生計を立ててるんだもの。「まったくとんでもねぇ悪夢だ！」とやつはつぶやきつづけた。「こうしてくさったブタの会議に潜入してるけど、たぶんこの街のどっかに、ヤク売人爆弾魔がいて、おれに気がついて、おれが何千人ものオマワリと宴会してるって噂を流すに決まってる！」

おれたちみんな、名札をつけてた。これは百ドルの「登録料」を払うとついてくる。おれの名札によると、おれはロサンゼルスの「私立捜査官」——まあある意味でウソではないな。そして弁護士の名札の肩書きは「犯罪性ドラッグ分析」の専門家になってる。これも、ある意味でホントだな。

でも、だれがなんだろうと、だれも気にしていないようだった。警備も、そういう陰気な被害妄想をつむぐにしては、ちょっとゆるすぎた。それでもおれたちが緊張している理由はもう一つあって、二人の登録料を払うときに、受付で不渡り小切手を渡してやったのだった。それは弁護士のポン引き／ドラッグ裏社会顧客からの小切手で、長い経験に基づいておれの弁護士としては、その小切手がまったく無価値であると判断してた。

第19章　知らなければ、学びにこよう……知っているなら教えにこよう

——一九七一年四月二十五日～二十九日
ベガスでの全米検察官会議の招待状標語

最初のセッション——開会の辞——は、ほとんど午後いっぱい続いた。最初の二時間はおれたちも我慢しておとなしくすわってたけれど、ハナっからおれたちがそこで何も学んだりはしないのははっきりしてたし、ましてなんか教えようとするなんざ狂ってるってのも、同じくらいはっきりしてた。メスカリンまみれの頭をして、何時間も何時間も、どうでもいい御託を聴いてすわってるってのは、まあ楽な話だ……明らかにリスクはまるでない。こいつら、メスカリンとマカロニの差もごぞんじない。

たぶん、これをまるごとＬＳＤづけで過ごすこともできたろうな……ただ、そこにいた何人かがまずい。この集団の一部の顔や体つきは、ＬＳＤやってたら絶対に耐え難かったろう。麻薬映画上映で明かりが消えると、テキサス州ワコからの体重百八十三キロ警察署長が、その百五十四キロ女房（だかなんだか、とにかく連れの女）と公然とネッキングはじめたのは、メスカリンでもかろうじてがまんできるくらいのもんだ——メスカリンってのはおもに感覚的な表面ドラッグで、現実を変えるんじゃなくて誇張するだけだから——でも頭がＬＳＤづけだと、すばらしく肥満した人間二人が公開交接に我を忘れて、そのまわりでは何千というオマワリが「マリファナの危険」についての映画を観てるなんて光景は、感情的に受け入れられないだろう。脳がそれを拒絶する。大脳の髄質が、前頭葉から入ってくる信号から自ら

を遮断しようとする……そしてその間に中脳は、これを髄質に送り返して肉体行動の危険を引き起こす前に、この場面になんとか別の解釈を加えようとして必死。

ＬＳＤは効きという点で、比較的**複雑な**ドラッグだけど、メスカリンはかなり単純でわかりやすい――でもこんな場面の中では、そのちがいなんて理屈でしかない。この会議では、ダウナーの大量消費以外に手はない：レッド、大麻、酒。このプログラム全体が、どうやら一九六四年以来セコナールでボーッとしてたやつらのセットした代物らしいからだ。

千人のトップクラスのおまわりが「**なんとか**ドラッグカルチャーと接点を見つけなくては」なんて言いつつ、どこから始めるべきか見当もつかないわけだ。そいつを**見つけることさえ**できないときた。廊下では、どうやらマフィアが裏にいるらしいという噂。あるいはビートルズが。ある時点で、聴衆のだれかがブルームクイストに尋ねた。マーガレット・ミードの最近の「奇妙な行動」は、私的なマリファナ中毒によって説明できるだろうか、と。

ブルームクイスト、答えて曰く「わたしにもわかりませんが、でもあの歳で大麻を吸ったら、すさまじいトリップを経験することになるでしょうよ」

聴衆はこのコメントを聴いて、大爆笑。

弁護士が身をかがめて、ここを出るぞとささやいた。「カジノにいるから。同じ時間をつぶすんでも、**こんな**クズを聴いてるより、もうちったぁ気の利いた方法いくらでも知ってるぞ」そして立ち上がりつつ、椅子の肘掛けから灰皿をはたき落とし、そして身をかがめて通路をドアに向かった。

座席はこういう任意の動きができるようには並んでいなかった。みんな道をあけようとしたけれど、動きようがない。

「おい、気をつけろ！」とだれかが、ヤツに無理矢理のりこえられて怒鳴った。

「うるせぇバーカ」とヤツは歯をむく。

「おい前見えないぞ！」だれかが叫んだ。

その頃には、やつはほとんどドアにたどりついていた。「どうしても出るぞ！　ここはおれの**居場所じゃねぇ**！」と叫ぶ。

「いいやっかい払いだ」とだれか。

ヤツは動きを止め、見回した――それから考え直したようで、動き続けた。出口にたどりついた頃には、部屋の後ろは大混乱に陥ってた。ずっと前の演壇にいるブルームクイストでさえ、彼方の騒動に気がついているみたいだった。話を止めて、騒音のするほうに不安そうなまなざしを向けている。たぶん、なんか口論が起きたんだと思ったんだろう――それともなにやら人種的な対立か、なんか手のうちようのないものか。

おれは立ち上がってドアのほうに突進した。逃げ出すなら、いまだろうと後だろうと同じに思えた。「失礼、気分が悪いもんで」と踏んづけた最初の脚に言った。そいつはさっと後退し、おれは繰り返した。「失礼、気分が悪くなりそうで……失礼、気分が……すいません、ええ、気分がどうも……」

今回は、とてもあっさりと道が開けた。一言の抗議もない。それどころか、途中で手を貸してくれる人もあったほど。おれが吐くんじゃないかとみんな心配で、だれもそれを望んでいなかった――少なくとも自分の上では。四十五秒ほどでドアに到達。

弁護士は下の階のバーにいて、四十くらいのスポーティーな感じのオマワリとしゃべってた。名札を見ると、ジョージア州のどっかの地方検事だとか。ちょうどこう言っているところだった。「わたしもウィスキー党でねえ。うちの地元では、そんなドラッグ問題なんかあまりないんだよ」

「いずれ出てくる」と弁護士。「いつの日か、夜、目を覚ますとジャンキーがベッドルームをめちゃくちゃにしてる」

「まさか！　**うちの**地元じゃありえないよ」とジョージア男。

おれはかれらに加わって、ラムのトールグラスを氷入りで頼んだ。

「あんたもカリフォルニア連中のおひとりだね。お友だちが、ヤクきちがいの話をしてくれてたんだけど」

「そこらじゅうウヨウヨしてますよ。もうだれも安全じゃない。そして特に南部ではダメね。連中、あったかい気候が好きだから」

「組になって動くんだよ」と弁護士。「時には群なして。あっさりベッドルームにまで入ってきて、こっちの胸の上に

すわってる。でっかボウイナイフ持って」弁護士はこう言うと、荘厳にうなずいた。「それどころか、**女房の胸の上に**すわってるかも——そしてのどを一刺し」

南部男は言った。「ああ全能の神さま、この国はいったい**どうなっちゃって**るんですかい？」

弁護士は語った。「とうてい信じられないだろうねえ。ロサンゼルスでは、もう収拾つかなくなってるよ。まずは麻薬、いまじゃ黒魔術だぜ」

「黒魔術？　まさか冗談だろう！」

「新聞を見てごらんよ。このヤク中連中が人間の生け贄目当てで狂乱してるのとご対面ってなことになったら、これぞおおごとってもんだ」とおれ。

「まさか！　そんなの空想科学小説の話だろうに！」

「**おれたちの**所轄ではちがうんよ。チッ、マリブだけでも、あのしょうもないサタン崇拝者どもが毎日六人から八人殺してんだもん」と弁護士は、ドリンクを一口飲んで続けた。「それでヤツらが欲しいのは血だけ。必要なら、道行く人を無差別にねらうんだぜ」とうなずく。「いやあまったく。ほんのこないだも、マクドナルドのハンバーガースタンドから女の子が拉致された事件があったよ。ウェイトレスの娘。十六歳くらい……しかもみんなの見てる目の前で！」

「それでどうした？　やつら、その子に何をした？」とわれらが友人。耳にしていることのせいで、非常に気を高ぶらせている。

弁護士が言った。「**した**？　なに寝ぼけたことを。駐車場でその娘の頭をズバッとチョン切ったんだよ！　それでからだにいろんな穴を切って、血を吸い出しやがった！」

「**全能の神さま！**」とジョージア男が驚愕の声……「それで、だれも何も**しなかった**ってのか？」

おれは言った。「なにが**できるってんだい**。頭をちょん切った男ってのは身長二メートルで、体重百五十はあったかな。ルガー二丁身につけてて、ほかの連中はM－一六を持ってる。みんな帰還兵で……」

「そのでっかいヤツはもと海兵隊の少佐で」と弁護士。「住まいはわかってるんだけど、家に近づけない」

「まさか！」と叫ぶわれらが友人。「まさか少佐が！」

「そいつは松果腺目当てだった。それでそんなにでかくなったんだ。海兵隊をやめたときには、そいつは**ほんのチビ**だったんだよ」とおれ。

「なんてぇこったい！」われらが友人は叫んだ。「ひどいじゃないか！」

「もう日常茶飯事だよ。ふつうは一家丸ごと。夜中にね。ほとんどは、頭と胴体が生き別れになるまで目をさまさない——そしてそのときには、もちろんもう手遅れだわな」と弁護士。

バーテンが動きを止めて聞き入っている。おれはこいつの方を見物していた。そいつの表情は穏やかではなかった。

「ラム三つ追加ね。氷たっぷり、あとライムのスライス一握りほど」とおれ。

バーテンはうなずいたが、頭が仕事にむいていない。おれたちの名札を見ている。「上の警察会議の方たちですか？」とやっと口を開いた。

「その通りだよ、ご同輩」とジョージア男は大きくにっこりした。

バーテンは悲しそうに首をふった。「そうだと思った。このバーでは、その手の会話は聴いたことないですよ。いやはやまったく！　あなたたち、よくまあそんな仕事に**我慢**できるもんだ！」

弁護士はバーテンに微笑みかけた。「おれたちゃ**好きで**やってんのよ。グルーピーだぜ」

バーテンは、後ずさった。その顔は、一面の嫌悪の表情。

「どうかしたかい。だって、**だれかが**やるしかないだろが」とおれ。

バーテンはしばらくおれを見つめると、向きを変えた。

「さっきのドリンクはどうしたい。急いでくれよ、のどカラカラ」と弁護士は笑い、バーテンがそっちを見ると、白目をむいてみせた。「ラムは二つな。おれのはブラディ・メアリーにして」

バーテンは身をこわばらせたが、われらがジョージアの友人は気がつかないようだった。心ここにあらずという感じ。

「いやあ、いまのは聴きたくなかった。だってカリフォルニアで起こることは、いずれこっちに下りてくるみたいだからね。ほとんどはアトランタだが、でもそれってたぶんあのろくでもないヤク中クズどもが**おとなしかった**頃なんだろう。昔は、連中を見張っとけばそれですんだんだが。そんなうろつきまわったりしなかったんだが……」と方をすくめる。

「でもまったく、いまじゃだれも安全じゃないのか。どこに現れるやらわかりゃしない」
「その通り」と弁護士。「それはカリフォルニアで思い知ったよ。マンソンがどこに姿を見せたか、覚えてるだろ。デスバレーのど真ん中だよ。セックスきちがいの大軍団を囲ってやがった。ほんの数人しか捕まえられなかったよ。一味のほとんどは逃げおおせた。でっかいトカゲまがいに砂丘を越えて走ってって……しかも一人残らずすっぱだかで、武器しか身につけてない」
「いずれそこら中に顔を出すぜ」とおれ。「そのときにはこっちの準備もできてるのを祈ろうじゃないか」
ジョージア男は、バーをげんこつで殴りつけた。「でも、家に閉じこもって囚人まがいにしてろってのか！　そいつらがだれかもわからんのに！　どうやってそいつらを**見分けるんだ**？」
「見分けられないよ」と弁護士が答えた。「唯一のやりかたは、牛の角をつかまえてやることった――あのクズどもと同じ土俵にあがんのよ！」
「と言いますと？」とかれ。
「**わかってる**だろうに。前にもやったし、これからだってやってやる」と弁護士。
「やつらの腐った首をちょん切る。一人残らず。カリフォルニアではそうしてる」とおれ。
「**なんだとぉ**？」
「いやそうだよ」と弁護士。「みんなQTに書いてあるけど、**それなりの**人物はみんな、とことんおれたちの味方だよ」
「なんと！　そこまでひどいことになってるったぁまるで知らなかった！」とわれらが友人。
「あまりおおっぴらにはしないからね。たとえばこの上の階ではしたい話じゃないよな。あんなマスコミがうろついてちゃあ」とおれ。
ご友人も同意した。「そりゃそうだ。収拾つかない事態になっちまう」
「ドーベルマンは口をきかない」とおれ。
「え？」
「ときどき、脊椎をむしり出すほうが楽なんだよ。犬を使わずに首をはねようとすると、むこうも死ぬ気で抵抗する

からね」と弁護士。

「いやはやなんと！」

おれたちは、ジョージア男をバーに残して去った。そいつはグラスの中の氷をまわして、表情をかたくしている。いまのを細君に話すべきか心配してるのだ。「あいつにゃわからん。女ってのはそうだろう」

おれはうなずいた。弁護士はすでに失せていて、スロットマシンの迷路をコソコソぬけて正面入り口に向かっていた。

おれは友人に別れを告げ、いまの話はだれにもするなと警告しておいた。

第20章　コーモン女……そしてついに目抜き通り（ストリップ）で本気の公道レース

深夜あたりに、弁護士がコーヒーをほしがった。大通り（ストリップ）を乗り回してる間にもかなりしょっちゅうゲロってて、ホエールの右サイドはひどくゲロまみれになってた。シルバー・スリッパの前の赤信号で、オクラホマ・ナンバーのでっかい青いフォードの横でアイドリング……その車内には、ブタじみたカップル二組。たぶんマスコギーかどっかのオマワリどもが、ドラッグ会議を機会に、女房たちにベガス見物させてるんだろう。どうやらシーザーズ・パレスで三十三ドルばかし勝って、さてこんどはサーカス・サーカスへ向かってそれをドンッと増やそうとしてる……

……ところがいきなり、気がつくと横にゲロまみれの白いキャデラック・コンバーチブルがいて、体重百五十キロのサモア野郎が黄色いメッシュのTシャツ姿でこんなことを怒鳴りかけてくる：

「よおみんな！　ヘロイン買わない？」

返事なし。完全黙殺。この手のクズについては警告を受けているらしい。無視しろ……

「おいイモ兄ちゃん！」弁護士は金切り声をあげてやがる。「こんちくしょう、おれぁマジだぜ！　混じりっけなしの純粋**ブツ**を売ってあげたいのよ！」車から身を乗り出して、向こうに顔を思いっきり寄せてる。でもまだだれも答えない。ほんのチラッと見てやると、アメリカ中部人四人の顔がショックで凍り付いたまま真正面を見てる。

おれたちは中央車線にいた。急に左折[1]は違法だ。信号が変わったら直進するしかない。それで次の角で逃げ出す。お

---

[1] 訳注：日本的感覚では右折ね。

れは待ちながら、不安げにアクセルの上で足踏みしてた……

弁護士は抑えが効かなくなってきてる。「安いヘロイン！　本物だぜ！　カモったりしないから！　まったくよぉ、おれはここにあるもんが**わかってんのよ！**」怒鳴りつつ、車のサイドを叩いて関心を引こうとする……でも向こうはいっさいこっちと関わり合いにはなりたくない。

「あんたら、**帰還兵**と話したことねーの？」と弁護士。「おれ、ヴィエート・ナームから帰ってきたばっかなんよ。ヘロちゃんだぜ、みなさん！　混じりっけなしのヘロ！」

いきなり信号が変わって、フォードはロケットみたいに飛び出した。おれはアクセルを踏みつけて、二百メートルほどぴったり併走して、ミラーでパトカーがきてないのを確かめてる横では、弁護士が連中にわめき続ける。「注射！　ファック！　ヘロちゃん！　血まみれ！　ヘロイン！　強姦！　安い！　共産主義者！　目玉にずぶっとつっこんで！」

おれたちは高速でサーカスサーカスに接近しつつあり、オクラホマ車は左へ寄せてきて、なんとか左折車線へと無理に入ろうとしてる。おれはギヤを追い越しに叩きこんで、しばらくフェンダーをこすりそうにしつつ併走。ぶつけてくる心配はない、目に恐怖が浮かんでる……

後部シートの男は、完全に頭に血がのぼってた……女房ごしに身を乗り出して、おっかなそうに歯をむきだす。「この薄汚いケダモノども！　車を停めろ、ぶっとばしてやる！　この野郎！　クズどもが！」もう怒りで我を忘れてて、いまにも窓から飛び出してこっちに飛び乗ってきそうだった。ありがたいことにそのフォードはツードアだった。やつは出られない。

次の信号にさしかかろうとしてて、フォードはまだ左に寄ろうとしてる。どっちもアクセル全開。肩越しにちょっと見ると、ほかの車ははるか後ろだ。右側はがらがらに空いてる。そこでおれはブレーキを踏み込み、弁護士をダッシュボードにたたきつけて、フォードがこっちの鼻先をぬけたとたんにそのテールをかわし、脇道に飛び込んだ。三車線越えて急な右ハンドル。でも成功。フォードは交差点の真ん中で、タイヤをきしらせつつ左折中。うまくいけば、無謀運転で逮捕されちゃうよ。

弁護士は笑ってた。車はローギヤで、ヘッドライトを消して、デザート・インの裏のごちゃごちゃしたほこりっぽい裏通りをぬけて、車体をゆらしつつ猛スピード。「いやぁまったく。あのオクラホマ連中も興奮してきてたなぁ。後ろにいたあの野郎、かみつきそうだったろ！　泡ふいちゃってんの」と弁護士は荘厳にうなずいた。「あのオヤジには目つぶしでもかけてやるべきだった……犯罪性の精神異常者、完全に正気を失ってる……いつなんどきキレるかわかったもんじゃない」

　迷路の出口らしきもののほうへ、思いっきりハンドルを切った——が、このバカ車、スキッドするかわりに横転しかけやがる。

「おわぁなんだぁっ！」弁護士が絶叫。「ヘッドランプつけろったら！」やつはフロントガラスのてっぺんにしがみついてた……そしていきなり、横に身を乗り出してゲロ吐き。

　おれは、だれも後から追ってきてないのを確かめるまで、断固スピードを落とさなかった。特にあのオクラホマのフォード。あの連中は危険だ。少なくとも落ち着くまでは。あのすさまじく短時間の邂逅を、警察に通報するかね？　たぶんするまい。なんせ短すぎたし、目撃者もいないし、そのみちだれにも信用されない可能性がかなり高い。白いキャデラック・コンバーチブルに乗ったヘロイン売人二人が、大通り（ストリップ）を流していったりきたりしつつ、赤信号でまったくの素人をいびるなんてのは、明々白々にキテレツすぎる。ソニー・リストンですら、そこまでとんでもなくイカレたりはしなかった。

　もう一回曲がろうとして、また横転しかける。クーペ・ド・ヴィルは、住宅地域で高速コーナリングするのに理想的とは言い難い車だ。ハンドリングがあまりにゆるゆる……レッドシャークなら、急に四輪ドリフトを必要とする状況でも、すごくきれいに反応してくれる。でも、ホエールは——あの肝心な瞬間に、後輪がきれいにすべるかわりに——**鼻ヅラがつっこむ**傾向があって、このおかげであの不愉快な「ほぉらきたぁ」的感覚が生じる。

　最初、これはタイヤの空気がゆるいだけだと思ったので、フラミンゴのとなりのテキサコ・ガソリンスタンドにもってって、空気圧を五十ポンドまであげてもらった——これはスタンド係をビビらせたが、おれはこれが「試験用の」タイヤだと説明。

　でも五十ポンドずつでもコーナリングは相変わらずだったので、数時間で戻って、七十五まであげてくれと頼んだ。係

は猛然と首をふった。「ぼくはいやですよ」とおれに空気のポンプをわたす。「ほら、お客さんのタイヤなんだから、**自分で**やってくださいよ」

「どうしたんだよ。こいつに七十五は**入らない**とでも思うわけ？」とおれはきいた。

係はうなずいて、おれが左前のタイヤに空気を入れはじめると、後ずさった。「まさにその通り。そのタイヤ、前なら二十八、後ろなら三十二のタイヤですよ。いやあ、五十でも**危険だ**ってのに、七十五なんて**狂ってます**よ。爆発しまっせ！」

おれは首をふって、前の左に空気を入れ続けた。「言っただろう。サンドス研がこのタイヤを設計したんだって。特別なんだ。百までだいじょうぶだよ」

「うっひゃー。でもここじゃやんないでくださいよ」と係。

「今日はしないよ。七十五でどんなコーナリングか見てみたいから」とおれは返事。

係は笑った。「旦那、そもそもコーナーにまで**つけるか**どうか」

「まあどんなもんかね」とおれは、空気のホースを持って後ろのタイヤにまわった。実は、おれも心配だった。前のタイヤ二本は、スネアドラムなみにカンカンになってた。圧力計でたたいて見ると、チーク材みたいな感じ。でも、まいっか。爆発したらどうだっての？　まっさらのキャデラックで、八〇ドルの新品タイヤで限界テストができるチャンスなんてなかなかない。ひょっとしたらひょっとしてロータス・エランみたいなコーナリングを始めてくれるかもしれないではないの。しなくても、ＶＩＰエージェンシーに電話して新品をよこせといえばすむ……タイヤ四つとも、交通量の多いとこのど真ん中で破裂したといって、訴えてやるとでも脅かすか。それでこんどは、エルドラドにミシュランＸ四本つけろと要求すんの。それもみんなカードにチャージ……セント・ルイスのブラウンズ球団に払わせる。

ふたを開けてみると、タイヤの空気圧を変えたホエールは非常に快適な動きを見せるようになった。乗り心地はいささか荒っぽい。高速上の小石が一つ残らず感じられて、つまりは砂利置き場でローラースケートをするようなもんだ……でも、コーナリングはなかなかスタイリッシュにこなしてくれるようになった。まるっきしバイクを土砂降りの中でトップスピードで飛ばすみたいな感じ。スリップ一発でバーン、てっぺんからこけて、頭を手で抱えたまま風景の中をコロコロ転げてく。

オクラホマ連中との一もめから三十分後くらいに、トノパ高速の深夜営業ダイナーに入った。「北ラスベガス」なるイモ／カスどものゲットーのはずれだ。実はここ、正式にはベガスの市境からはずれてるのだ。北ベガスってのは、目抜き通り（ストリップ）でちょいとばかりヘマをやりすぎて、カジノセンターまわりの大ディスカウント地帯でさえ白い目で見られるようなときにくるとこだ。

ここはネバダ版東セントルイスだ——スラム兼墓場、イーライやウィネミュカへの永遠追放前の、最終停車場。北ベガスってのは、娼婦で四十過ぎて、目抜き通り（ストリップ）のシンジケート連中に、超金持ち連中相手の商売にはもう使えねーなと判断されたときにくるとこ……あるいはサンズでツケのたまりすぎたポン引きか……あるいはベガスで未だに「頭飛んでる」と言われるヤツなら。これは呑んだくれからジャンキーまでいろんな意味にとれるけれど、商業的な信用力って点では、まともな場所にはもう入れないってこった。

でっかいホテルやカジノは、大金持ち連中が「望ましからぬ連中」と、一瞬たりとも面倒なことにならんように、腕っ節の強い連中にたくさん金を出してる。シーザズパレスみたいなとこでの警備ってのは、厳重厳格もいいとこだ。いつをとっても、フロアの連中の三分の一は、サクラか番犬だろう。おおっぴらに呑んだくれた連中や名の知れたスリは、すぐに対処される——秘密警察式の筋肉男どもに駐車場へ追い立てられて、歯医者がいかに高いかとか、両腕おられると生活大変だ、といった点について、すばやく非常な講義をしていただけることとなる。

ベガスの「上の方」は、たぶんシチリア島から東でいちばん閉鎖的な社会だろう——そしてその場所の日々のライフスタイルという点では、トップの人物がラッキー・ルチアーノだろうとハワード・ヒューズだろうとなんのちがいもない。トム・ジョーンズがシーザースで毎晩二回ずつショーをするだけで週に七万五千ドル稼げる経済では、宮殿の警備は欠かせないし、警備員の方としては給料の小切手を切るのがだれだろうと知ったこっちゃない。ベガスみたいな金鉱脈は、ほかのどんな金鉱脈でもそうだけど、独自の軍隊を産み育てるもんだ。雇われ筋肉ってのは、金と権力の極を中心にすぐさま層をなす……そして大金ってのはベガスでは、それを守る権力ってのと同義だ。

というわけで、どんな理由だろうと目抜き通り（ストリップ）でブラックリストに載ったら、道は二つしかない。街を出るか、あるいは引退して自分の芸を安手で温存しに、北ベガスのうらぶれた辺土にやってくるか……拳銃使い、詐欺師、ヤクでイカレた連中などなど、各種の負け犬すべてといっしょに。たとえば北ベガスは、深夜前に紹介なしでヘロインをどうしても手に入れたいときにくるようなとこだ。

でもコカインがほしいなら、そして前金出してちゃんと符丁も知ってるなら、目抜き通り（ストリップ）にいて、コネのある娼婦の隣に立とう。一見さんからは札一枚は取るだろうけど。

そしてそういうのはそれっきり。おれたちはベガスの型にフィットしなかった。いつの間にやらベガスにいて、ドラッグ満載の白いキャデラックに乗って、入ってける場がぜんぜんない。フィルモアスタイルは、ここではまるで人気が出てない。シナトラだのディーン・マーチンだのが、ベガスじゃいまだに「きてる」とか思われてるんだから。ここの「アングラ新聞」――ラスベガス・フリープレス――は、ピープルズエコーやナショナルガーディアンをさらにびくびくコピーした代物だ。

ベガスで一週間過ごすのは、タイムワープに転がりこんだみたいなもんだ。五〇年代末の生きなおし。ここにくるような連中を見れば、それはまあもっともなことだってのがわかる。デンバーだのダラスだのからきた、大盤振る舞い連中。それに全米エルクスクラブ大会（黒んぼお断り）、西アメリカ・ボランティア神の羊飼い集会みたいな。こういう連中は、婆さん娼婦が乳首隠しだけ残してすっぽんぽんになって、お立ち台にぴょんぴょん飛び出してくるのを見ただけで興奮のるつぼにたたっこまれるようなやつら。そのＢＧＭは、五〇歳のジャンキー一ダースほどが「セプテンバーソング」をジャムってる大ビートね。

北ベガスのダイナーの駐車場におれたちが入ったのは、三時あたりだった。おれは外界で何が起きてるか知りたくて、ロサンゼルスタイムズかないか探してたんだけど、新聞の棚をチラッと見ただけで、そんなの期待したって冗談にもならんのがわかった。北ベガスではタイムズなんていらない。ニュースのないのがいい報せ。

「新聞なんか死ね。いまおれたちがほしいのは、コーヒーだ」と弁護士。

おれも同意したが、それでもあいさつがわりにベガス・サンをがめた。どうせ昨日のやつだったけど、かまわん。新聞を持たずにコーヒーショップに入るって思っただけで不安になる。最悪でもスポーツ面がある。野球の得点やプロフットボールの噂話に没頭。「バート・スター、シカゴ酒場で暴漢に襲撃、パッカーズ、トレードを公表」……「ネイマス、ジェッツ引退、アラバマ州知事に」……そして四十六面には、グランブリング出身の話題のルーキー、ハリソン・ファイヤーについての見込み記事。百メートルを九秒台で走り、体重百八十キロで増加中。

コーチ曰く：「このファイヤーという男はまちがいなく見込みありますよ。昨日なんか練習前に、グレイハウンドのバスを素手で潰しましたし、昨晩は地下鉄を殺しましたからね。テレビ映りも最高。わたしはお気に入りとかつくらない主義ですが、こいつの場合は例外って感じですかね」

いやまったく。九秒台で人をハンバーグにまでぶちのめせるやつは、さぞテレビ映りもよかろうよ……でもその晩、ノーススター・コーヒーラウンジには、そういうのはあんまし集まってなかった。客はおれたちだけ——これは運がよかった、というのも道中でメスカリンをもう二錠ほど喰ったからで、その効きがだんだんあらわれてくるとこだったから。

弁護士はもうゲロしてなかったし、気分悪い様子さえなかった。すばやいサービスに慣れてますってな顔してコーヒーを注文。ウェイトレスは、やっと人生で安住の地を見出しましたという老娼婦といった風情。彼女がどう見てもここを**仕切って**いて、おれたちがスツールにすわると、明らかに不快の色をあらわにしてこっちを見た。

おれはあんまし注意してなかった。ノーススター・コーヒーラウンジは、おれたちの嵐からの逃げ場としちゃそこそこ安全そうだった。一部のとこだと——特にこの手の仕事してると——しんどいのがわかっちゃうような場所がある。細かいとこはどうでもいい。わかるのは、確実にわかるのは、入り口のドアに近づくにつれて脳みそが壮絶なうなりをあげ始めるってこと。なにやら面倒で邪悪なことが始まるぞ。そして**このおれも**巻き込まれるぞ、と。

でもノーススターの空気には、おれを警戒させるようなものはなにもなかった。ウェイトレスはこっちが気にくわない様子だが積極的になにかしてくるわけでもなし、そういうのには慣れてた。でっかい女だ。デブじゃないけど、いろんな意味ででかい。長くてたくましい腕と、豪快そうなあご骨。ジェーン・ラッセルの燃え尽きカリカチュア版。黒髪のでっかい頭、口紅切り込みの入った顔、EEカップ四十八の胸は、二十年前にヘルズ・エンジェルズのベルドー支部

ママさんでもやってた頃にゃ、たいしたもんだっただろう……でもいまは、でっかいピンクの収縮自在ブラをぴっちり着込んでて、それが制服の汗にまみれた白いレーヨンから透けて見える。

たぶんだれかと結婚してるんだろうけど、でも見当つける気にならなかった。今夜、おれが彼女からほしいものといえば、ブラックコーヒー一杯と、二十九セントのハンバーガーにタマネギとピクルスつきのやつだけ。面倒なし、しゃべりもなし——ひたすら休んで落ち着くための場所。腹が減ってさえいない。

弁護士は、注意を向けておくべき新聞その他なにも持ってなかった。そこで、退屈しのぎに、ウェイトレスに注意を集中した。彼女はロボットみたいにこっちの注文をとってたけど、弁護士は「氷水二つ——氷つきで」という注文で、ちょっとは殻を破って関心を引いたみたいだった。

弁護士は自分の氷水を長い一息で飲み干すと、もう一杯頼んだ。ウェイトレスがぴりぴりしてるようなのがわかった。知るかよ、とおれは思った。ちょうどユーモア欄を読んでるとこだったし。

十分ほどして、ハンバーガーがきたとき、弁護士が何か書いたナプキンをウェイトレスに渡すのが見えた。すごくさりげないやりかたで、顔はまったくの無表情。でも、場の雰囲気で、おれたちの平穏が砕け散ろうとしてるのはわかった。

「いまのなんだ？」とおれはきいた。

やつは肩をすくめて、ウェイトレスのほうに薄ら笑いを浮かべてる。ウェイトレスは三メートルほど離れて、カウンターの端のとこで、ナプキンを検分しつつおれたちに背を向けてる。そして、ふりかえってこっちを見つめた……そして憤然と前進して、弁護士にナプキンをなげつけた。

「これ、**なんのつもり**？」彼女はぴしゃりと言った。

「ナプキンだよ」と弁護士。

険悪な沈黙が一瞬流れて、そして彼女はわめきだした。「ふざけんじゃないよぉ！　これの意味くらいわかるわよ！　このくそデブポン引きのチクショウ野郎が！」

弁護士はナプキンを手にとって自分の書いたものを眺め、それをカウンターに戻して平静に語った。「これ、おれが昔持ってた馬の名前だよ。あんた、**どうかしちゃってんじゃ**ないの？」

「このサイテー男が！」とウェイトレスは絶叫した。「ここじゃいろいろクズみたいな扱いも受けるけどね、あんたみたいな**スペ公ポン引き**から受ける筋合いはないんだよ！」

あちゃー、どうなっちゃってんの？　おれは女の手を見て、とがったものや重いものを手にしないでくれよー、と祈ってた。そしてナプキンを手にとって、このクソ野郎がていねいな赤い字で何を書きやがったかを見た。「コーモン女？」この疑問符が強調してある。

女はまた絶叫してた。「さっさと勘定すませて出てきな！　オマワリ呼んでほしいか！」

おれは財布に手をのばしたが、弁護士が女から目を一瞬も離さずに、すでに立ち上がっていた……そしてポケットではなく、シャツの下に手をつっこむと、いきなりガーバー・ミニマグナムを取り出した。邪悪な銀の刃（やいば）はウェイトレスにもすぐに理解できたらしい。

彼女は凍りついた。目は見開かれて、その刃を注視。弁護士はまだ女を見つめたまま、通路を二メートルほど歩いて公衆電話の受話器を手にした。そしてそれを切り取ると、受話器を自分のスツールまで持ってきて、すわった。

ウェイトレスは不動。おれはショックでバカになってて、逃げ出すべきか爆笑すべきかわかんなかった。

「あのレモン・メレンゲパイはいくら？」と弁護士。声はさりげなくて、まるでいまここに迷い込んで、何を注文しようか議論してるみたいだ。

「三十五セント！」女は口走った。目は恐怖に濁ってたけど、脳みそはどうもなにやら基本的な運動レベルの生存本能にしたがって活動してるらしい。

弁護士は笑った。「いやいや、パイ**丸ごと**」

女はうめいた。

弁護士はカウンターに札を置いた。「まあ五ドルってことにしとこうか。いい？」

彼女は、まだ凍りついたまま、うなずいた。そしいて弁護士がカウンターをまわって、パイをディスプレイケースから出すのを見ていた。おれは店を出る準備をした。

ウェイトレスは明らかにショック状態にあった。口論のさなかに抜かれたヤッパの光景は、どうも悪い記憶を呼び起

こしたらしい。その目の焦点があわない様子だと、のどが切り裂かれたって感じ。おれたちが店を出たときも、まだ全身麻痺状態。

第21章　パラダイス大通りで神経衰弱

編者註

年代記のこの時点で、デューク博士は完全に神経衰弱を起こした模様である。もとの原稿はあまりに支離滅裂であり、もとのテープ録音を探し出してそのまま転記するより他に手がなかった。この章に関しては一切編集は行っておらず、デューク博士はこれに目を通すことさえ拒絶。博士と連絡をとる方法もなかった。我々の手元にある唯一の住所／連絡先は、高速六十一号線のどこかにある移動電話装置だけだった――そしてその番号でデュークと連絡をとろうとあらゆる手はつくしたものの、すべては徒労に終わったのであった。

ジャーナリズム上の純粋性を保つ意味合いから、われわれは以下の部分を、テープから起こしたそのままで出版する――原稿とともに、デューク博士が確認のため提出した数多いテープの一つである。このテープによれば、この部分はデュークと彼の弁護士、そしてウェイトレスが登場する、北ベガスの深夜営業ダイナーに関するエピソードに続く。以下のやりとりを行うための根拠は、アメリカンドリームは、麻薬および危険薬物に関する全米検察官会議の陰気な環境を、どこか遠く離れたところで探すしかないという感覚――デュークと弁護士共通の感覚――に基づいているらしい。

以下の転記は、どこかラスベガスの北東郊外で始まる――白ホエールでパラダイス通りを突進しつつ……

弁護士：ボウルダー市は右側。あれって町だっけ？

デューク：うん。

弁：ボウルダー市にいこう。

デ: わかったよ。どっかでコーヒー買おう……

弁: すぐそこ、テリーズ・タコス・スタンド、USA。おれ、タコスくらい喰えそう。五個一ドルだって。

デ: ろくでもなさそ。一個五十セントのまともなとこ行こうぜ。

弁: ダメ……タコス喰えんのはここが最後かもしんないし。

デ: ……おれはコーヒーがほしいんだって。

弁: おれはタコスがほしい……

デ: 一ドルで五個って、そんなの……まるで**一ドルでハンバーガー五個**みたいなもんじゃん。

弁: そんなことないって……タコスを値段で判断すんなよぉ。

デ: なんか交渉する気?

弁: かも。ハンバーガーも二十九セントだって。タコスも二十九セント。安めの店だってだけだよ。

デ: 値引き交渉でもしてこいや……

（編註：ここで音が雑音のみ）

弁: ……すいませーん。

ウェイトレス: いらっしゃいませ。

弁: うん、ねえタコスある? メキシカンのタコスなの、それともふつうの? てぇか、チリとかさ、そういの入ってんの?

ウェイトレス: チーズとレタスはあるしぃ、ソースもあってぇ、それをかけるとか。

弁: だからさ、それがホントに本物のメキシカン・タコスだって保証してくれるの?

ウェイトレス: ……ちょっとあたしでは。ねえルウ、ここってホントに本物のメキシカンタコスあるんだっけ?

厨房から女の声: なに?

ウェイトレス: 本物のメキシカンタコス。

ルウ: タコスはあるよ。どんだけメキシカンかは知らないけど。

弁: あっそう、いやね、自分が何に金出してるのか確かめときたかっただけ。だって五個で一ドルだろ？　五個もらう。
デ: タコバーガーっての、あれなに？
（編註：ディーゼルエンジンのトラックの音）
弁: ハンバーガーでタコスのはさまったやつだろ
ウェイトレス: ……シェルじゃなくて。
デ: バンズにタコスが乗ってるのね。
弁: あんたらのタコスってのもどうせ、バンズのかわりにシェル使っただけのハンバーガーなんだろ。
ウェイトレス: 知らない……
弁: ここにきたの最近？
ウェイトレス: 今日から。
弁: そう思った。いままで見たことない顔だから。ここらの学校いってるの？
ウェイトレス: ううん、学校はいってないけどぉ。
弁: ほう、どうして？　病気かなんか？
デ: そんなのいいからさ。ここはタコス喰いにきたんだろ。
（間）
弁: 弁護士としての忠告だが、チリバーガーを注文するように。ハンバーガーにチリがかかってんの。
デ: おれには重すぎるなあ。
弁: では、タコバーガーを注文すること。試してごらん。
デ: ……タコスには肉が入ってる。それいってみよう。それとコーヒーをすぐ。いますぐ。注文待ってる間に飲めるから。
ウェイトレス: それだけ？　タコバーガー一つ？
デ: まあ試しにね。二つ目いくかもしんないし。

弁: きみの目って青いの、緑なの？
ウェイトレス: え、なぁに？
弁: 青、緑？
ウェイトレス: 変わるのぉ。
弁: トカゲみたく？
ウェイトレス: ネコみたいに。
弁: ああそうか、トカゲは肌の色を変えるんだっけ……
ウェイトレス: お飲物はなにか？
弁: ビール。それと車の中でもビール。山ほど。後部シートはビール山積み。
デ: ココナツをビールやハンバーガーと混ぜるのは嫌いだな。
弁: じゃあそのクズを潰そうぜ……高速のどまんなかで……ボウルダー市ってどっかここらへん？
ウェイトレス: ボウルダー市？　お砂糖いります？
デ: うん。
弁: おれたちもうボウルダー市に入ってるんだろ、え？　それともあとちょっと？
デ: 知るかよ。
ウェイトレス: ほらあそこ。あの看板にボウルダー市って書いてあるでしょ、ね。あなたたち、ネバダの人じゃないの？
弁: いや、ここはじめて。通りがかっただけ。
ウェイトレス: この道まっすぐよ。
弁: ボウルダーではなんかおもしろいことある？
ウェイトレス: あたしに訊かれてもぉ。あたし別に……
弁: ギャンブルはできんの？
ウェイトレス: 知らない。ほんの小さな町だし。

弁: カジノはどこ?
ウェイトレス: 知らない。
弁: ちょっと待った、きみってどっからきたの?
ウェイトレス: ニューヨーク。
弁: それでここは今日一日いただけなんだ。
ウェイトレス: ううん、しばらくはいたけどぉ。
弁: ここらだとどこで遊ぶの?　たとえば泳ぎにいくとかそういうのだと?
ウェイトレス: うちの裏庭。
弁: それってどこ?
ウェイトレス: まずそこの……えーと……プールはまだ開いてないんだけど。
弁: ちょっと説明させてくんな?　よかったら、ほんの手短に説明させてさせてよ。われわれは、アメリカンドリームを探してるわけ。それでここらのどっかにあるって言われてて……そんなわけでここにきて探してるのね、サンフランシスコからはるばる探しに送り出されてきたもんで。だからこの白いキャデラックもくれて、これならそいつに追いつけるかなって連中が思って……
ウェイトレス: ねえルウ、アメリカンドリームってどこか知ってる?
弁: (デュークに) アメリカンドリームのありかを、コックに訊くもんなー。
ウェイトレス: タコス五つ、タコバーガー一つ。アメリカンドリームってどこにあるか知ってる?
ルウ: なにそれ?　どんなもの?
弁: うーん、おれたちも知らんのよ。サンフランシスコから派遣されて、取材しろって雑誌に言われててさ。
ルウ: ああ、なんか場所みたいなとこか。
弁: アメリカンドリームって場所。
ルウ: むかしの精神分析医クラブかな。

ウェイトレス: そうじゃない?
弁: むかしの精神分析医クラブ?
ルウ: むかしの精神分析医クラブ。パラダイス通りにあって……あんたたち、本気でマジ?
弁: マジって、いや冗談抜きにあの車見てよ。ほら、おれがあんな車持てるように見える?
ルウ: むかしの精神分析医クラブかも。むかしはディスコだったんだけど……
弁: それかも。
ウェイトレス: あれってパラダイス通りのどこだっけ?
ルウ: ロス・アレンが昔の精神分析医クラブを持ってたんだけど。いまもオーナーだっけ?
デ: おれは知らん。
弁: おれたちが言われたのは、アメリカンドリームを見つけるまで帰ってくるなってことだけ。この白いキャデラックを持ってアメリカンドリームを探してこい、どっかラスベガスあたりにあるぞって。
ルウ: それってぜったいむかしの……
弁: ……確かにまぬけな取材ではあるんだけどね、うん、でもおれたちそれ金とってるわけで。
ルウ: そこに写真撮ったりすんの、それとも……
弁: いやいや——写真はなし。
ルウ: ……それともだれかが、あんたらに完全なガセネタつかませたとか?
弁: まあガセっぽいのはある程度はあるけど、でも個人的には、おれたち大マジだよ。
ルウ: どう考えてもむかしの精神分析医クラブだけど、でもあそこでウロウロすんのって、売人どもや物売りや、アッパーやダウナーや、あの手のばっかよ。
弁: それかも。そこって夜型の場所、それとも一日中……
ルウ: ああんた、もう**一日中休みなし**よ。でもカジノじゃないわね。
デ: どういう場所なの、そこって。

ルウ: パラダイス通りにあって、うー、パラダイス通りのむかしの精神分析医クラブ。

弁: そういう名前のとこなの、むかしの精神分析医クラブって?

ルウ: ううん、昔はそうだったんだけど、だれかがそこを買って……でもアメリカンドリームって名前じゃ知らないなぁ、むしろなんていうか、ふつうに思われてるのは、えー……キチガイ場所よ、ヤク連中のたむろしてる。

弁: キチガイ場所って?　キチガイ病院みたいな?

ルウ: いいえあんた、ヤクの売人とかプッシャーとか、そういうみんながたむろしてるの。若い子とかがいって大麻づけになってとか、そういうとこで……でもあんたの言ったような名前じゃないわ、アメリカンドリームなんて。

弁: どういう呼び名かわかんない?　あるいはもっと具体的にどこにあるとか?

ルウ: パラダイス通りとイースタンのとこ。

ウェイトレス: でもパラダイスとイースタンって並行してるわよ。

ルウ: そうだけどさ、でもあたしはイースタンはずれて、それからパラダイスに入るから……

ウェイトレス: うんうんわかる、でもそれだとフラミンゴのとこでパラダイスに入ってきて、ずっとここまでくんでしょ。あなたたちだれかにだまさ……

弁: おれたちフラミンゴに泊まってるんだよ。たぶんあんたらの話してるその場所と、その話の様子からして、たぶんそこかもしれないような気がする。

ルウ: 観光客のいくとこじゃないわよ。

弁: うん、だからおれもついてきてんの。書くのはこいつね。おれはボディガード。だってたぶんそういうとこって……

ルウ: この人たち、どうかしちゃってるよ……この子たち、どうかしちゃってるよ。

弁: まあいいではないの。

ウェイトレス: うん、新しい法律もできたし。

デ: 一日二十四時間暴力沙汰?　そういう話なわけ?

ルウ: その通り。で、フラミンゴがここでしょ……あら、こんなの見せられないわ。あたし式だともっとうまく説明で

きるわね。ずっときてここの最初のガソリンスタンドのとこにトロピカーナがあるから、そこで右ね。

弁: トロピカーナで右と。

ルウ: 最初のガソリンスタンドがトロピカーナ。トロピカーナで右で、こっちにいって……トロピカーナで右、パラダイスで右で、でっかい黒い建物が見えるから、もう一面真っ黒に塗ってあって、ホントに不気味で。

弁: トロピカーナで右、パラダイスで右、黒い建物……

ルウ: それで建物の横んとこに看板が出てて精神分析医クラブって書いてあるけど、でも完全に改装してぜんぶ変えちゃってるから。

弁: うんうん、なかなかそれらしいね。

ルウ: あんた、なんかほかにあたしにできることがあれば……それがお目当ての建物かどうかもわかんないんだけどね。でもそれらしいね。たぶんあんたら、外してないと思うよ。

弁: いやまさに。二日で最高の手がかりだよ、もうみんなに訊いてまわってたんだけど。

ルウ: ……二、三電話をかけて、ズバリ確かめてあげてもいいけど。

弁: お願いできる?

ルウ: もちろん、アレンに電話してきいてみる。

弁: いやあ、そうしてもらえるとホント助かるわ。

ウェイトレス: トロピカーナまでいったらぁ、最初のガソリンスタンドじゃなくて、二番目のやつだからね。

ルウ: ここんとこにでっかい看板が通りに出てるから、トロピカーナ通りって。右折して、パラダイスに出たらもう一回右。

弁: わかった。でっかい黒い建物、パラダイスを右。一日二十四時間暴力沙汰、麻薬……

ウェイトレス: だからね、ここがトロピカーナでぇ、こっちがボウルダー高速でドーンとおりてくるでしょ。

デ: ってことは、かなり街中に入るわけだ。

ウェイトレス: うーんと、このパラダイスが、どっかそこらで二つにわかれてんのよ。これがパラダイス。うん、いま

はあたしたちここよね。で、これがボウルダー高速で……それでトロピカーナ。

ルウ: でもそいつはちがうから、そこにいるバーテンは完全な大麻中毒で……

弁: へえそうなの、でも手がかりにはなる。

ルウ: ここに寄ってよかったと思うはずよ。

デ: そこが見つかりゃね。

弁: それで記事を書いて入稿すりゃあね。

ウェイトレス: とにかく、中に入ってすわったら?

デ: こうしてなるべく太陽を浴びるようにしてるんだよ。

弁: 彼女、電話してそこの場所をきいてくれるってさ。

デ: あそっか。わかった。そんなら、中入ろうか。

編者注（続き）**続く場面のテープカセットは、ヘッドになすりつけられた有害な液体のために転記が不可能であった。しかしながら判別不可能なサウンドにはある種の一貫性があり、そこから判断して約二時間の後にデューク博士とその弁護士は、ついに「むかしの精神分析医クラブ」の残骸を見つけだすことができたと判断される——それは背の高い雑草に覆い尽くされた空き地の中の、巨大な割れ焦げたコンクリートのスラブであった。通り向かいのガソリンスタンドのオーナーの話では、その場所は「三年ほど前に焼け落ちた」とのこと。**

第22章　空港でしんどい騒動……醜悪なペルーのフラッシュバック……「やめろ！　手遅れだ！　よせ！」

弁護士は夜明けに発った。ロサンゼルス行きの一便をほとんど逃すところだった。空港が見つからなかったもんで。ホテルからは三十分かかんない。それは絶対わかってた。だからフラミンゴを七時半ちょっきりに出た……が、どういうわけかトロピカーナの前の信号んとこで曲がるのを忘れちゃったのだ。フリーウェイをまっすぐ進み続けて、それは空港の主滑走路と併走してるんだけど、でもターミナルとは反対側を通ってる……そして合法的に向こうへ横切る方法はない。弁護士が怒鳴ってる。「チクショウメ！　迷子だ！　こぉんな呪われきった道路なんかで、おれたちゃ**なにしちゃってん**だぁ！　空港はすぐそこじゃないの！」とヒステリックにツンドラの向こうを指さす。

「心配すんなって。おれはこれまで飛行機を逃したことはないんよ」そこで記憶がよみがえっておれはニッコリして追加した。「でもペルーで一度だけあったか。もう出国審査も税関も終わってたんだけど、バーに戻ってボリビアのコカイン・ディーラーとしゃべってて……すると突然あのでっかい七〇七のエンジン起動音がして、だからおれは滑走路にとびだして飛行機に乗ろうとしてたんだけど、でもドアがエンジンの真後ろで、もう梯子はしまっちゃっててさ。いやぁ、あのアフターバーナーでおれなんかカリカリのベーコンになっちゃったはずなんだけど……こっちも完璧に正気じゃなくなってて。とにかく乗んなきゃとか思ってたわけ。

空港オマワリども、おれが突進してくるのを見て、ゲートのとこでスクラム組んでんの。おれはろくでなしみたく、まっすぐそれに向かって走る。おれといっしょの男は絶叫だ。『やめろ！　手遅れだ！　よせ！』

オマワリどもが待ちかまえてるのを見て、おれは速度を落として、気が変わったかなと思わせたのね……でも連中がほっと緊張を**ゆるめる**のを見て、すかさず速度を変えて、うすらバカどもの**上を**越えようとしたわけ」おれは笑った。「いやいや、まったく全速力で、アメリカドクトカゲだらけの押入に飛び込むみたいなもんだったよ。連中、おれを半殺しにしやがった。思い出せるのは、特殊警棒が五つだか六つだか、同時に振り下ろされるのを見たと子までで、いろんな声がわめいてたよ。『ノーノー！　自殺行為だ！　あのイカレたグリンゴを止めろ！』

目を覚ましたらもう二時間たってて、リマのダウンタウンのバーだったよ。例の半月形の革製ブースに寝かしてくれてて。荷物は全部、おれの横に積んであったよ。だれも荒らしたりしてなくて……だからおれ、そのままま寝て、翌朝の一便で発ったわけ」

弁護士は、半分上の空だった。「なあおい、おまえのペルーでの大冒険の話をききたいのは山々なんだがね、**いまじゃない**。いまのおれには、あのクソ滑走路の向こうへいくこと以外どうでもいいんだよ」

おれたちはかなりいい速度で流してた。おれが探してたのは、なにか開口部、アクセス路みたいな、滑走路を横切ってターミナルへ続く通路だ。手前の赤信号からはもう八キロはきてて、Uターンしてそこまで戻る時間はもうない。

間に合う手は一つだけ。ブレーキを踏み込んで、フリーウェイの上下線の間の、草だらけの溝にホエールをゆっくり下ろした。溝は直角に越えるには深すぎたので、斜めに入る。ホエールは横転しかかったけれど、タイヤをまわし続けて、反対の斜面をあがって対向車線に出た。運良く、ほかに車はなかった。おれたちは、車のノーズを空中に思いっきり突き上げて、水中翼機みたいに溝から飛び出してきた……そしてフリーウェイでワンバウンドして、そのまま反対側のサボテン原野に進み続けた。なにやらフェンスを引き倒して、それをそのまま何百メートルひきずってたような記憶があるけれど、滑走路についたころには、万事順調……ローギヤで時速百キロの大轟音、そしてあとはターミナルまでなんのじゃまもなさそうだ。

唯一心配だったのは、着陸中のDC－8にゴキブリみたく潰されることで、向こうはこっちの真上にのっかるまでは気がつくまい。管制塔からはおれたちが見えるかな？　たぶんね、でも心配してどうする？　おれはアクセルを床まで踏み込み続けた。ここで戻ったってしょうがない。

弁護士は、両手でダッシュボードにつかまっていた。ちらっと見ると、目に恐怖の色が浮かんでやがる。顔面灰色で、この動きをありがたくは思っていないのが感じられたけれど、でも猛スピードで滑走路を突っ切ってるところでもあったし——そしてサボテン、そしてまた滑走路——やつがおれたちの立場を理解しているのはわかってた。もう、この動きが賢いかどうかを議論する段階は過ぎてる。もうやっちゃったんだから、唯一の希望は向こう側までたどりつくことだけ。

おれはスケルトン・フェイスのアキュトロン腕時計を見て、離陸まであと三分十五秒あるのを見て取った。「十分間に合う。荷物まとめろ。飛行機のすぐ横でおろしてやる」でっかい赤と銀色のウェスタン・ジェットライナーが、前方一〇〇〇メートルほどのところに見える……そしてこの時点でおれたちは、なめらかなアスファルトの上をびゅんびゅんとばし、もう着陸用滑走路は越えていた。

弁護士は叫んだ。「よせ！　出られるもんか！　オレ、はりつけになって殺されちゃうよぉ！　おれが責任しょいこまされる！」

「ばかおっしゃいな。空港までヒッチハイクしようとしておれに拾われたって言えばいい。初めて会うヤツだったって。ケッ、この町は白いキャデラック・コンバーチブルだらけだし……それにおれ、思いっきり早くあそこを通過して、だれもナンバープレートをチラとも見られんようにするから」

飛行機に接近中。搭乗中の乗客が見えたが、いまのところだれもこっちに気がついていない……こんな変な角度から接近してるからだろう。「用意はいいか」とおれ。

ヤツはうめいた。「好きにしろぃ。でも頼むから、さっさとすませようぜ！」そして積み込みエリアをきょろきょろしてから、指さした。「あそこだ！　あのでっかいバンの裏で下ろしてくれ。とにかくあの裏にまわってくれたら、死角のとこで飛び降りる。そしたらおまえはさっさと逃げ出せ」

おれはうなずいた。いまのところ、場所は充分にある。警報を鳴らしたり、追いかけてきたりする様子もない。ひょっとしてこれって、ベガスじゃ日常茶飯なんだろうか——遅れてきた乗客が滑走路を、タイヤをならしつつ走ってきては、目のつりあがったサモア人を下ろし、そいつが変なカンバスバッグを握りしめて、最後の一瞬に飛行機に飛び乗ると、また朝日の中へと走り去る。

かもね。そういうのって、この街じゃ標準のやりかたなのかもね……

おれはバンの後ろで急ハンドル、弁護士が飛び降りるのにギリギリの時間だけブレーキを踏んだ。「あのブタどもになめた口きかせんじゃねーぞ。いいか、なんかもめたら、すぐにでもその筋の連中に電報うてばいいんだからな」とおれは怒鳴った。

やつはニヤリ。「そうかい……Explaining My Position（立場を説明する）ってか？　どっかのクソ野郎がその件で詩を書きやがったよな。頭にウンコが詰まってるなら、それもいい忠告だろうよ」そして手を振っておれを追い払った。

「そうだな」とおれは、そこを離れだした。でっかいハリケーン用のフェンスに切れ目を見つけてあった――そしていまや、ホエールをローギヤに入れて、おれはそこ目指して一直線。ミラーを見ると、弁護士は飛行機に乗り込むところで、もめた様子はない……そしておれはゲートをぬけて、パラダイス通りの早朝の交通にまぎれた。

ラッセルをさくっと右、そして左折でメリーランド・パークウェイに乗った……そしていきなりおれは、あったかい匿名にのっかって、ラスベガス大学のキャンパスを通過中……こいつらの顔には緊張感皆無。赤信号で止まったら、横断歩道の肉体が放つ日差しで、一瞬居場所がわかんなくなった。みごとな筋肉質の太もも、ピンクのミニスカ、売れた若い乳首、ノースリーブのブラウス、長いさらさらのブロンドヘア、ピンクの唇に青い目――すべて危険なほどに無垢な文化の面目躍如。

おれはついふらふらと車を停めて、ひわいなナンパ文句をつぶやきだしたい誘惑にかられた。「よほほーい、おねいちゃん、あんたとおいらとでいっちょ、ヘロヘロになろうではないのよ。この超ホットなキャデラックちゃんに飛びのりなさぁい、ズバッとフラミンゴのおれのスイートまでのりつけて、エーテルしこたまきめて、プライベートの腎臓型プールでケダモノみたいにふるまおうぜぃ……」

まあすてき、しびれちゃうわ。でもそう思った頃には、おれはパークウェイをずっと下って、フラミンゴ通りで左折レーンにゆっくり入っていった。ホテルに戻って、腹をくくるぞ。自分が面倒に向かっていると信ずべき理由は、いくらでも揃ってた。ツキをちょっと過信しすぎた。ベガスの身上たるルールをすべてぶち破ってきたもんな――地元民を

だまして、観光客をいたぶって、助けをおどかして。

いまの唯一の希望は、おれの感じでは、おれたちの振る舞いがあまりにやりすぎで、だからおれたちに鉄槌を下すべき立場の人物はだれ一人、それがホントとは信じられないだろう、ということだった。特に警察大会に登録してることでもあるし。この街で一騒ぎする気なら、でっかくねらうのが得策。安手の詐欺やケチな小物犯罪なんかで時間を無駄にするんじゃない。のどぶえ一直線。凶悪犯罪まっしぐら。

ラスベガスの心理ってのはあまりに派手な先祖帰りをおこしてるもんで、ホントに派手な犯罪が、まるで気づかれぬままに見逃されたりする。おれのご近所が最近、ベガスの牢屋で「放浪」の罪で一週間過ごすはめになった。こいつは二十歳（はたち）くらい。長髪、リーバイスのジャケット、ナップサック——どこから見ても**流れ者**、純粋旅人。人畜完全無害。ひたすら全国をうろついて、おれたちがみんな六〇年代につきとめたと思ったあの何かを探してる——いわば初期のボブ・ジマーマン型トリップ。

シカゴからロサンゼルスへの道中、こいつはベガスにちょっと色気を出して、一目見てやろうと考えた。単に通りすがり、大通りを流して、風景を楽しんでる……急がない。何をあわてる?　サーカスサーカスの近くの街角に立って、多色の噴水を眺めているところへ、パトカーがやってきた。

ガッチャーン。まっすぐ牢屋行き。電話もなし、弁護士もなし、罪状もなし。「車に乗せられて、警察署につれてかれた。人だらけの部屋に入れられて、収容前に服を全部脱げっていわれたよ。こう、でっかい机の前に立っててね、その机は高さ二メートルくらいあって、そこにオマワリがすわってぼくを見下ろしてて、なんか中世の裁判官みたいだった。

部屋は人だらけで。囚人が一ダースかそこらかな。その倍の警官と、婦警が十人くらい。そこで部屋のまんなかに出てって、ポケットの中のもの全部出して机にのせて、それから素っ裸になるんだよ——みんなの見てる前で。

ぼくは二十ドルほどしか持ってなくて、放浪罪の罰金は二十五だったから、ぼくは牢屋行きの人たちといっしょのベンチにまさわれたね。だれにも嫌がらせとかはさなかったよ。まるでベルトコンベア式の組立ラインみたいで。

ぼくのすぐ後ろの二人は長髪。ＬＳＤ連中。この人たちも放浪罪でつかまったんだけど。でもこの人たちがポケットを空にしだしたら、部屋中が縮み上がった。この二人で、全部で十三万ドル持ってて、ほとんどがでかい札ばかり。オ

マワリども、自分の目が信じられないようだった。この連中、とにかく次から次へと札束を引っぱり出しては、それを机にぶちまけてって――二人とも裸でちょっと背が丸くて、どっちも何も言わなかった。

オマワリたちはそんな大金を見て、完全に舞い上がってたっけ。みんなひそひそ話を始めちゃってて。いやぁ、こんな連中を「放浪」なんかで引き留めとけないよね」とこいつは笑った。「だから、『所得税脱税容疑』で逮捕したんだ。

それでみんな牢屋につれてかれて、さっきの二人の連中は完全にあわてきってたよ。もちろん売人でさ、ブツがホテルの部屋に置いてあって――だからオマワリどもが泊まってるホテルをみつけるまでに、ここを出なきゃなんないわけ。

看守の一人に百ドルやって、外にいってこの街最高の弁護士をつれてこいと頼んだ……そして約二十分ほどしたらその弁護士がやってきて、habeas corpus とかなんとかクズみたいなことをわめいてる……いや、このぼくだってそいつと話そうとするとかはしたけど、ホントに頭の引き出しが一つしかないみたいで。ぼくは、自分の保釈が用意できる、あんたの取り分もある、ただシカゴの父に電話させてくれ、と頼んだんだけど。でもこの弁護士は、さっきの二人のために張り切ってて、相手にしてくれなかった。

二時間ほどしたらそいつが看守をつれてまたやってきて、『行きましょう』って言う。二人は出てった。その一人が待ってる間に話してくれたところでは、この弁護士は三万ドルかかるんだって……そしてたぶんホントにそのくらいしたんだろうね。でもそれあどうした？　釈放されない場合に起きたはずのことを考えれば、そんなの安い安い。

やっとぼくも、オヤジに電報を打たせてもらえて、オヤジは百二十五ドル送金してくれた……でもそれが七、八日かかったんだ。自分がどんだけ入ってたかははっきりしない。そこは窓もなくて、飯も十二時間おきで……太陽を見ないと時間の感覚がなくなるでしょ。

囚人房にはそれぞれ七十五人ぶちこまれてて――でっかい部屋で、真ん中に便器がすえてある。入るときにマットをくれて、好きなとこで寝る。ぼくの隣の男は、ガソリンスタンド強盗をやって三十年くらってた。

やっとぼくが出たとき、デスクのオマワリは、放浪罪の罰金の足りない部分に加えて、もう二十五ドル、オヤジの送ってくれた金からぬきやがった。ぼくはなんにも言えなかったよ。もう**堂々と**とりやがった。それから残り七十五ドルをくれて、外で空港までのタクシーを待たせてある、と言うんだよ……そしてぼくがタクシーに乗り込むと運転手曰く『途

中はどこにも寄らないからな、それであんたも、ターミナルにつくまで**身動き一つ**するんじゃねーぞ』だって。

ぼくは筋肉一つぴくりとも動かさなかったよ。さもないと、ありゃ絶対に運転手に撃たれたはず。もうそれは確実。ぼくはすぐ飛行機にのって、ネバダから出たと確信できるまで、だれにも一言も口をきかなかった。いやあ、もうあの場所だけは、**絶対二度と**戻らないね」

第23章　詐欺罪？　窃盗罪？　強姦罪……リネン係のアリスと荒々しきコネクション

この物語について思案しつつ、ホワイト・ホエールをフラミンゴの駐車場にゆっくりと入れた。街角にたってちょっと変わった振る舞いをしただけで、五十ドルに牢屋一週間……ひょえー、そしたら**このおれには**、どんなすさまじい罰則がおっかぶせられることか。いろんな罪状を一つずつ考えてチェックしてえった――が、形骸的な法律用語にしてみると、そんな悪そうには聞こえなかった。

強姦罪？　こいつは確実にかわせる。あのバカ娘に欲情なんかしてないし、ましてその肉体に手をかけたおぼえもない。詐欺罪？　窃盗罪？　これはいつでも「精算する」の一言だ。払っちゃえ。『スポーツ・イラストレイテッド』に送り込まれたと言って、タイム　の弁護士どもを悪夢じみた訴訟沙汰にひきずりこむ。訴状や答弁書の吹雪で何年もかかりっきりにさせとけ。そいつらの資産をすべてジュニューやヒューストンみたいなとこに登記して、絶えず裁判をキトー、ノーム、アルバなんかに移すように動議を出し続ける……コトを動かし続けて、連中をてんてこまいさせて、会計部門と衝突するようにさせるんだ。

主任弁護士アブナー・H・ドッジ殿
経過報告書

項目：四万四〇六六ドル一二セント……特別支出、すなわち：検察団は被告Ｒ・デュークを西半球一帯にかけて追跡し、ついにカリブ海のクレブラなる島の北浜に潜伏中のところを発見。この地で被告弁護団は、今後の公判はカリブ部族の言語において行うべしという裁判所通達を獲得。このため当方は三人をベルリッツ語学院に派遣したものの、公判開始の弁論が行われる予定時間の十九時間前に、弁護人はコロンビアに逃亡、ベネズエラ国境に近いグアヒラなる漁村に居をかまえたが。この地における裁判用公式言語は「グアヒロ」なる辺境方言であった。数ヶ月かけてわれわれはこの地に訴追体制を構築したものの、その頃に被告人は、実質的に到達不可能なアマゾン川源流の港湾に居を移し、「ヒバロ」と呼ばれる首狩り族と強力なコネクションを確立していた。ヒバロ語に堪能な現地弁護士を発見雇用すべく、マナウスから当方の通信員が上流に派遣されたものの、この探索は深刻なる意志疎通問題により不首尾に終わっている。これにとどまらず、当方のリオ事務所において深刻に憂慮されている事態として、前出の通信員未亡人が法外なる賠償金請求を――現地法廷における偏見のため――勝ち取ってしまい、その額たるやわが国の陪審員が正当と判断するどころか、正気とすら判断しないようなものになることが懸念されている。

いやまったく。でも、正気ってなんだ？　特にこの「わが国」なるところで――このニクソンの呪われた時代で。いまのおれたちは、みんな**サバイバル**トリップで頭がいっぱいだ。六〇年代に勢いをつけてたスピードはもうなし。アッパーはもう時代遅れだ。これがティモシー・リアリーのトリップにおける致命的な欠陥だった。あいつはアメリカ中をまわって「意識拡張」を売って回ったけど、それをマジに受け取りすぎた連中を手ぐすねひいて待ち受けてた、陰気な肉つるし鉤みたいな現実については、まるっきり考えてなかった。陸軍士官学校と司祭稼業のあとでは、ＬＳＤはやつにとって完全に理にかなってるように思えただろうけど……でも自分が派手にヘマこいたと悟ったら、あんまし気分はよくないだろうね、特にあんだけ他人を道連れにしてると。

もちろんその道連れ連中は自業自得ではあった。まちがいなくそいつら、「当然なるべくしてなるようになっただけ」ではある。みんな、哀れなまでに物欲しげなＬＳＤキチガイで、平和と相互理解が一発三ドルで変えると思ってやがる。でも、こいつらの喪失と失敗は、おれたちのものでもあるのだ。リアリーが失墜したときにいっしょに持ってったもの

は、やつがつくるのを手伝ったライフスタイル丸ごとの、中心となる幻想だったんだ……回復不能のカタワども、失敗した探求者たちは、アシッド文化が根本的に持つ、昔ながらの神秘的誤謬が絶対理解できなかった。その誤謬ってのは、だれかが——あるいは少なくとも、なんらかの**力**が——トンネルの彼方にあるはずの光の番をしてくれてる、という絶望的な仮定だったんだ。

これは何世紀にもわたってカソリック教会を何世紀も保たせてきた、残酷でありながら優しいという、パラドックスめいたデタラメと同じものだ。これはまた軍隊の倫理でもある……もっと高次の賢き「権威」に対する盲目的な信頼。法皇、将軍、首相……ずっとあがって「神」まで。

六〇年代の決定的瞬間の一つは、ビートルズがマハリシに入れ込んだあの日にやってきた。ディランがバチカンにいって法皇の指輪にキスするようなもんだ。

まずは「導師（グル）」。それから、それがうまくいかないと、イエス・キリストに逆戻り。そしていまや、マンソンの原始的・本能的な先導に従って、部族タイプのコミューン神のニューウェーブが丸ごと。アヴァタールの指導者メル・ライマンに、「魂と肉体」を運営してるあのなんとやら。

ソニー・バージャーはその勘所がぜんぜんつかめてなかったけど、でもあいつは自分が閻魔さまもんの大ブレークスルーにどれほど近かったか、気づくことさえないだろう。エンジェルスは一九六五年のオークランド・バークレー線で、バージャーの頭コチコチ親分もどきの本能で動いて、反戦デモ行進の前線を攻撃したときに終わった。これは、六〇年代の若者運動の上昇気流にとって歴史的な分裂であることが示された。グリースまみれ連中と長髪連中との間の露骨な亀裂が初めて見えたのがこれで、この決裂の重要性はＳＤＳの歴史からも読みとれる。ＳＤＳは後に、下層労働者階級バイカー落ちこぼれ連中の利害と、上中流階級バークレー学生活動家の利害とで折り合いつけようという呪われた努力のあげくに、やがて崩壊することになる。

あの現場に、当時かかわっていた人間のだれ一人として、ヘルズ・エンジェルスをバークレーからのラディカル左翼勢力に協力させるべく説得するというギンズバーグ・キージーの努力が失敗して、どういう結果が生じるかについては予

測できなかっただろう。決定的な分裂は四年後のアルタモントだったけれど、そのときには一握りのロック産業イカレポンチどもと、全国マスメディア以外の万人にとって、その亀裂はずいぶん昔からはっきり見えてた。アルタモントでの一大暴行乱闘は、単に問題を**劇的に描いて**みせただけだった。現実はすでに固定されてた。すでに病は末期段階に達してると判断され、「運動」のエネルギーは、以来ずっと、自己保存へのなだれこみの中で、精力的に使い果たされちまった。

うー。なんてろくでもねぇ御託。陰気な思い出に悪しきフラッシュバックが、スタンヤン通りの時間・霧の中からぬっと顔を出す……難民の心休まることはないし、振り返っても意味はない。問題は、いつもながら、**これからは**……？

おれはフラミンゴでベッドにつぶれて、環境と危険なほどシンクロしてない気分。なんかろくでもないことが起きる。もう確信できた。部屋は、ウィスキーとゴリラを使った悲惨な動物学実験の現場みたいな様相。高さ三メートルの鏡は割れてたけどまだ枠におさまってた——弁護士が狂乱してココナツ用ハンマーで鏡と電球をすべて割って回ったあの午後の悪しき証拠だ。

電球は、セーフウェイで赤と青のクリスマスツリー用照明セットを買って、それと入れ替えたけど、鏡は交換のしようがない。弁護士の鏡は焼け落ちたネズミの巣みたい。上半分は焼けこげ、残り半分は、針金と焦げた詰め物のかたまり。ありがたいことに、あの火曜日のひっでえ対決以来、メイドたちはこの部屋には近寄らなくなってた。

その朝、メイドが入ってきたとき、おれは寝てた。「Do Not Disturb」の表示を出しておくのを忘れたのだ……だから彼女は部屋に迷い込んで、弁護士を驚かせたわけ。その弁護士は、戸棚の中で、すっぱだかでひざまずいて、靴の中にゲロ吐いてた……当人は実は洗面所にいるつもりだったんだけど、いきなり目をあげると、ミッキー・ルーニーみたいな顔の女が見下ろしてて、口もきけず、恐怖と混乱で震えてる。

やつは後で語った。「モップの柄を斧みたいな感じで握っててさ、だからクラウチング・ランみたいな感じで身をかがめて、戸棚から出てきて、ゲロ吐き続けながら、おばちゃんのひざを攻撃したんよ……もう純粋な本能。だってこっちを殺そうとしてるんだと思ったから……それでおばちゃんが悲鳴をあげて、そのとき氷嚢で口をおさえつけたわけ」

うん、その悲鳴は覚えてる……聴いたこともないような身の凍る音。起きあがると、弁護士がおれのベッドのすぐ横

の床で、どうみても**婆さん**にしか見えないものと、必死の格闘を演じてやがった。部屋は強烈な電気ノイズだらけ。テレビはボリュームいっぱいで、空きチャンネルでノイズを流してる。氷嚢を顔からどけようともがく女の、もごもごした叫びはほとんど聞こえない……が、さすがに弁護士のはだかの重量の前にはかなわず、やっと弁護士はテレビの後ろのすみっこでおばちゃんを押さえ込み、のどを両手でしめあげる一方で、おばちゃんは哀れっぽい声で口走り続けてる。

「後生です……後生です……あたしゃただのメイドです、**そんなつもりじゃ**なかったんです……」

おれは一瞬でベッドから飛び出して、財布をひっつかむと金色の警官慈愛協会のプレス証を、おばちゃんの顔の前にふりかざした。

「逮捕する！」とおれは叫ぶ。

「ひぃーっ！　あたしゃ部屋の掃除にきただけですぅ！」おばちゃんはうめく。

弁護士は荒い息をしながら立ち上がった。「合い鍵を使ったらしい。おれが戸棚で靴を磨いてると、こいつが忍び込んでくるのが見えた——だから**しとめた**」ヤツは震えてて、ゲロをあごから滴らせてる。一見して、この状況の深刻さが理解できてるのはわかる。おれたちの行動は、今回は、個人的な変態行動の範囲をはるかに超えちまった。おれたち二人とも、こうしてすっぽだかで、スイートの床に横たわって恐怖とヒステリーの合併症を引き起こしてる、おびえた婆さん——しかもホテルの**従業員**——を見下ろしてる。この女、始末せねば。

「なぜこんなまねを？　だれに金をもらった？」とおれ。

「だれもですよぅ！　あたしゃ**メイドですぅ**！」彼女は泣き叫んだ。

「うそつけ！」と弁護士が怒鳴った。「あの証拠物件目当てだろう！　だれの差し金だ——支配人か？」

「ホテルで働いてるだけですぅ、部屋の掃除するだけですぅ！」

おれは弁護士にむきなおった。「つまりおれたちの手の内が知られてるわけだ。だからこの哀れな老婆を送り込んで盗ませようとした」

「そんな！　なんのことだかさっぱり！」とおばちゃん。

「ふざけんな！」と弁護士。「連中同様、おまえも一味だろうが！」

「一味って**なんの**？」

「ヤク集団だよ。このホテルで何が起こってるか、**知ってるはずだ**。なぜわれわれがここにきたと思ってる？」とおれ。

おばちゃんはおれたちを見て、しゃべろうとしたが支離滅裂。「でもお客さんがた、あの大会できてるんだと。誓います！　あたしゃ部屋を片づけたかっただけで、**ヤクのことなんか**なーんも知りませんったら！」

弁護士は笑った。「その手は喰わんよ。グランジ・ゴーマンの名前を知らんとは言わせないぜ」

「知りません！　絶対！　イエスさまに誓って、そんなもん聴いたことないです！」

弁護士はしばらく考え込むふりをして、それから身をかがめて、おばちゃんを助け起こしてやった。「ひょっとして、ウソじゃないのかもしれん。**一味ではない**のかもしれないぞ」とおれに向かって言う。

「ちがいます！　誓って一味なんかじゃないです！」おばちゃんは吠えた。

「ふーむ……」とおれ。「その場合には、この人を処分する必要もないな……むしろ**手伝ってもらえる**かも」

「はい！　もう好きなだけお手伝いします！　ヤクなんか**大嫌い**ですから！」とおばちゃんは熱意をこめて言った。

「ああ、われわれもだ」とおれ。

「雇ったほうがいいと思うね」と弁護士。「裏を洗ってから、もってくる情報にもよるけど、毎月大枚用の列に入れて」

婆さんの顔は目に見えて変わった。すっぱだかの男二人としゃべってて、しかもその一人が数瞬前には彼女を絞殺しようとしてたことについても、もう気にならないようだ。

「手に負えると思うか？」とおれは尋ねた。

「と言いますと？」

「毎日電話一本。見たことをありのまま話してくれればいい」と弁護士はおばちゃんの肩を叩いた。「つじつまがあわなくてもいい。それはこっちの問題だから」

おばちゃんはにんまりした。「そんなことでお金が**いただける**んですか？」

「もちろんそうとも。でもこれについて**だれかにちょっとでも**しゃべったら——そのまま終身刑だぞ」とおれ。

おばちゃんはうなずいた。「もうどんなお手伝いでもしますよ。でもだれに電話を？」

「それは心配するな。きみの名前は？」と弁護士。

「アリスです。リネン係のアリスを呼び出してもらえれば」

「あとから連絡がいく。一週間ほどかかるだろう。でもその間も、目をあけておいて、自然にふるまうように。できるか？」とおれ。

「はいもちろんです！　旦那さんたちにはこの先お目にかかれますか？」とおばちゃんは、内気そうに微笑んでみせた。「つまり**これが**終わってからってことですが……」

「いや。われわれはカーソンシティから送り込まれている。きみは、ロック捜査官から連絡を受けるはずだ。アーサー・ロック。政治家に変装しているが、きみならすぐに気がつくだろう」と弁護士。

おばちゃんは、不安そうにもじもじしている。

「どうした？　まさか何か**隠してること**でもあるのか？」とおれ。

おばちゃんはあわてて言った。「いえいえ！　ただ、ふと思ったんですけど——お支払いはどうやって**受け取る**のかな、と」

「ロック捜査官がそれは面倒みてくれる。すべて現金。毎月九日に千ドルずつ」とおれ。

「ああ神さま！　そのためだったら、あたしなんでもしますよ」と感極まっておばちゃんが叫ぶ。

「きみも、それにほかのいろんな連中もな。われわれが雇っている人間を知ったら、きみも驚くだろう——このホテルの中にだっている」と弁護士。

おばちゃんはこわばった。「あたしの**知ってる人**もですか？」

「たぶんな。でもみんな隠密でやってる。だからきみがそれをはっきり知るのは、なにか本当に深刻な事態が発生して、だれかが公の場できみにコンタクトすることになった場合だけだ。そのときは合い言葉を使う」

「なんなんです？」とおばちゃん。

『世の中持ちつ持たれつ』」とおれ。「それを聞いたらすかさず、きみはこう言う。『こわいものなし』。そうすれば、きみだというのが向こうに**わかる**」

おばちゃんはうなずき、符丁を何度か繰り返した。われわれはそれを聞いて、おばちゃんがそれを覚えたか確認。

「よし。いまはそれだけだ。たぶん、鉄槌が下るまできみに会うこともないだろう。この先、われわれが発つまで、こちらのことは無視するように。部屋も片づけなくていい。毎日深夜ちょうどに、タオルと石鹸を一山、ドアの外に置いといてくれ」と弁護士はにっこりした。「そうすれば、こういうちょっとした出来事のリスクもなくなろうってもんだ。ちがうかね？」

おばちゃんはドアに向かった。「はいはい、なんでもおっしゃる通りに。さっきの一件は本当に申し訳ありません……でもホントに**わかって**なかったもので」

弁護士は彼女を送り出し、優しく言った。「それはよくわかる。でももうすべて過去のことだ。**まっとうな**人々を神に感謝しよう」

おばちゃんはにっこりして、背後でドアを閉めた。

第24章　サーカスサーカスへ戻る……オランウータンを探して……アメリカンドリームくそくらえ

あの変てこな邂逅以来ほぼ七十二時間がたっていて、メイドは一人たりともこの部屋に入ってきていない。アリスはみんなに何と話したんだろうか。あのおばちゃんとは一回だけ、洗濯物のカートを押して駐車場を横切ってるときに、おれたちがホエールで戻ってきてみかけたけど、気がついた様子はまったくみせず、向こうも理解したようだった。

でもこれが長続きするはずがない。部屋は使用済みタオルだらけ。そこらじゅうにぶら下がってる。洗面所の床は、深さ十五センチはあるせっけんとゲロとグレープフルーツの皮に割れガラスの混じったものが積み上がってる。小便するにもいちいちブーツをはかなきゃならない。まだらのグレーのじゅうたんは、大麻の種が毛足に詰まりすぎて、緑になりかけてるように見えた。

このスイートの、全般に裏通りじみた雰囲気はあまりにひどくて、とんでもなく醜悪で、たぶんこれはハイト・ストリートから持ってきた「実態展示」の一種で、全国のオマワリたちに、ドラッグ連中を放置したらどこまで汚物と退廃の深みにはまるかを示すものだと主張して、たぶん言い逃れられるんじゃないかと思ったほど。

でも、こんな無数のココナツの殻だの、つぶれたハニーデューの皮だのを必要とする中毒者って何もん？　ジャンキーがいたら、だれも手をつけてないフレンチフライの存在は説明可能であらふか。この寝室たんすについて干上がったケチャップの山は？

説明可能かも。でもそしたら、これほどの**酒**はなぜ？　それとこういう安手のポルノ写真、「スウェーデンの娼婦」だ

の「カスバの乱交」だのパルプ雑誌から破り取られたもんで、割れた鏡にマスタードを塗りたくって貼られて、そのマスタードが乾いて硬い黄色いカスカスになってる……それといたるところに暴力の跡、変な赤と青の電球に、壁のしっくいに埋め込まれた割れたガラス片……

うんにゃ、これはそこらの普通の神を畏れるジャンキーの足跡なんかではありえないね。この部屋には、一五四四AD以来の文明人に知られたありとあらゆるドラッグ過剰消費の証拠がある。これを説明しようと思ったら、**モンタージュ**だというしかない。一種の誇張した医療展示で、深刻なドラッグ犯罪者二十二人——それがみんなちがった薬物に中毒——が同じ部屋に五日五晩、休みなしでカンヅメにされたらどうなるかを示すために、慎重に構築されたものなんだ、とでも説明しよう。

いやまったく。しかしながら、紳士諸君、かようなことは現実の人生においては決して起きない者なのであります。これを作り上げたのは**実演目的**というそれだけでありまして……

いきなり電話が鳴って、おれは妄想ぼんやり状態から蹴り戻された。電話をながめる。ジリリリリリリリリィィィンンンンン……やれやれ、こんどはなんだ？　ついにここまで？　支配人ヒーム氏の甲高い声が、いまにも聞こえてくるようだ。警察がそちらのお部屋に向かっておりますので、ドアが蹴破られそうになっても、それを撃ったりしないようなにとぞお願いするしだいで。

ジリリリリリリリリリィィィンンンンン……いいや、連中が先に電話なんかするもんか。こっちをパクると決めたら、エレベータで待ち伏せかけるはずだ。最初は目つぶし、それからいっせいに飛びかかる。事前警告一切なしでくるはず。

というわけでおれは電話に出た。するとそれは友だちのブルース・イネスで、サーカスサーカスからかけてる。おれが興味を持ってたオランウータンを売りたがってる男を見つけたそうな。言い値は七百五十ドル。

「それっていったいどういう種類のごうつくばりだよ。昨日の夜には四百だったじゃないか」とおれ。

「なんかちょうど家が荒らされたとか言ってて。昨日、トレーラーでヒヒを寝かせてやったら、そいつはシャワー室でウンコしたんだって」とブルース。

「それがどうしたっての。オランウータンは水が好きなんだ。こんどは流しでウンコするだろうよ」

「じゃあさ、こっちにきてこいつとかけあってみてよ。ぼくといっしょにバーにいるから。おまえが本当にこのオランウータンをほしがってて、立派な家も与えるから、って話してあるからさ、たぶん交渉の余地はあるよ。こいつ、ホントにこのくっせえサルにご執心なの。サルもいっしょにバーにいて、スツールにすわっちゃって、ビール・シューナーなんかでベロベロよ」とブルース。

「わかった。十分でいく。そいつが酔いつぶれないようにしてくれ。しらふでそいつと会いたいから」

サーカスサーカスについてみると、年寄りをメインの入り口横の救急車に運び出してるところだった。「なにがあったの？」と駐車係にきいてみた。

「いやあ、わたしもよくわからないんですけどね。なんか卒中だって話もきいたし。でも、見たら後頭部が切り刻まれてるんですよ」と係はホエールに乗り込んで、チケットを渡してくれた。「ドリンクはとっときましょうか？」と車のシートのでっかいテキーラのグラスを持ち上げた。「もしよかったら冷蔵庫に入れときますけど」

おれはうなずいた。ここの連中は、おれのクセをよくわきまえてる。ここにはしょっちゅう、ブルースやその他楽隊員たちと出入りしてたから、駐車係はおれの名前まで知ってる——自分では自己紹介したこともないし、だれもおれに名前をきいたりしてないのに。たぶん、ここでのやり口の一部なんだろう、とおれは思った。グローブボックスをあさって、おれの名前つきのノートでも見つけたんだろう。

本当の理由は、そのときは思いつかなかったんだけれど、おれは実はまだ全米検察官会議からのＩＤ／バッジをつけっぱなしだったのだ。迷彩鳥撃ちジャケットのポケットカバーからぶら下がってたんだけど、すっかり忘れてた。たぶんみんな、まちがいなくおれを、超イカレた隠密捜査官かなんかと思ってたにちげぇねえ……かな。それとも単に調子をあわせてくれてただけかも。ベガスを白いキャデラックコンバーチブルに乗ってドリンク片手に走り回りつつ、オマワリのふりをするほどイカレたヤツは、間違いなくかなり重症で、ひょっとして危険かもしれないと思われたか。なんらかの野心を持ったヤツが、すべてまったく見かけによらない場所では、閻魔さま級のイカレポンチみたくふるまったっ

て、大したリスクはない。監督者たちは顔を見合わせてしたり顔でうなずき、「まったく下品なフリ連中ときたら」とかつぶやく。

同じコインの裏側が、「おっとぉぉぉ！　**ありゃあ**いったい何者？」症候群だ。これはドアマンやフロア警備員なんかからくるもので、キチガイじみたふるまいでもチップをはずむヤツは、絶対重要人物にちがいない、という想定からくる――そうなるとそいつは調子をあわせてやるか、あるいはお手柔らかな扱いをする、ということになる。

でも、こういうのは頭がメスカリン漬けだとなんのちがいにもならない。単にふらふらして、よさげなことをなんでもやって、するとそれがたいがいはいいことだ。ベガスはあまりに自然なキチガイだらけで――つまり根っこからよじれきった連中だらけで――ドラッグなんて問題でもなんでもない。ただしオマワリやヘロインシンジケートは気にするだろうけど。幻覚剤は、この街ではどうでもいい。昼夜問わず、一日いつでもカジノに迷い込んで、ゴリラの十字架はりつけが見られるようなとこでは――燃え上がるネオンの十字架が、いきなりピンホイールに変わって、それがケダモノをぱくちに興じる群衆の頭上で派手にぶんまわす。

ブルースはバーにいたけど、オランウータンは見あたらない。「どこだ？」とおれは要求した。「いますぐ小切手を切るぞ。あのサルを飛行機でいっしょにつれて帰るんだ。ファーストクラスのシートを二つ予約してある――R・デュークとその息子ってな」

「あれを**飛行機で**つれて帰んのぉ？」

「ああ当然。なんか文句言われると重う？　わが息子の不具合なんかをあげつらうとでも？」

ブルースは肩をすくめた。「あきらめな。ちょうど保護されちゃったよ。年寄りをまさにこのバーで攻撃してね。ジジイがバーテンに『はだしのエテ公を店に入れるとは何事か』とかなんとか、ぐたぐたケチつけはじめて、ちょうどそのとき、オランウータンがキィィィッと鳴いて――だから爺さんがビールを投げつけたら、もうオランウータンが暴れ出して、席からびっくり箱みたいに飛び上がって、爺さんの頭を思いっきりかじって……バーテンがしょうがなくて救急車を呼んで、おまわりがオランウータンを連れてったよ」

「なんてえこった。保釈金はいくらだ？　あのオランウータンは**是非とも**欲しいんだ」

「いい加減しっかりしろよ。あの牢屋には近づくな。それだけでおまえ、手が後ろにまわるぞ。サルのことは忘れろって。別にいらないだろうが」

　ちょっと考えてみて、ブルースの言ってることがたぶん正しいと判断した。暴力的なオランウータンごときですべてをふいにするなんて、意味がない。会ったこともないサルなのに。保釈なんか積んだら、ひょっとして**おれの**頭をかじりやしないか。檻に入れられて、サルが落ち着くまでにしばらくかかるだろうし、そんなに待ってる余裕はない。

「出発はいつ？」とブルース。

「もうすぐにでも。この街でこれ以上ウロウロしててもしょうがない。欲しいものは全部そろった。これ以上あっても混乱するだけだ」

　ブルースは驚いた様子だった。「じゃあアメリカンドリームを**見つけた**わけ？　この街で？」

　おれはうなずいた。「いままさに、おれたちはその中枢にすわってるんだよ。支配人が、ここのオーナーの話をしてくれただろ？　ガキの頃はいつも家出してサーカスに入りたかったって？」

　ブルースはビールを二つ追加で頼んだ。しばらくカジノを眺めてから、肩をすくめた。「うん、あんたの論点はわかるな。いまやそのチクショウめは、自前のサーカスを持ってて、さらには金を巻き上げる免許さえいただいてる、と」ブルースはうなずいた。「確かに。あいつこそ鑑ってか」

「まさにその通り。まさにホレーショ・アルジャーそのもの、態度の細部にいたるまで。そいつと話をしたいと思ったんだけど、秘書重役だとかいうえらそうなレズの男役（タチ）が出てきて、とっとと帰れだと。やっこさん、アメリカで何よりいちばんきらいなのがマスコミなんだって」

「やつとスピロ・アグニューね」とブルースはつぶやいた。

「二人とも正しいよ。おれはその女に、そいつの主義主張すべてに賛成してるんだって言ったけど、我が身がかわいいならこの街をさっさと出て、ボスをつつこうなんて**考えも**しないほうがいいよ、と言いやがった。『ボスは本当に記者連中が嫌いなのよ。警告めいたことを言うのは嫌いなんだけれど、でもあたしがあんたなら、いまのを警告としてきい

とくけどね……』」

ブルースはうなずいた。ボスはブルースに週千ドル払って、レパード・ラウンジで毎晩二回ステージをやらせて、グループには週にもう二千払ってる。連中の仕事といったら、毎晩二時間ずつ、大音量をたてるだけ。ボスはどんな曲を連中がやろうとクソのかすほども気にしなかった。ビートがヘビーでアンプが十分に大音量にしてあって、みんながバーにおびき寄せられればいい。

こうしてベガスにすわって、ブルースが「シカゴ」「カントリーソング」みたいな強力なのを歌うのを聞いていると、変な気分だ。経営陣が歌詞をきちんときいたら、バンド丸ごとむしられてボコボコだろう。

その数ヶ月後に明日ペンで、ブルースは同じ曲を、観光客と元宇宙飛行士[1]で満員のクラブで歌った……そして最後の曲が終わると、この宇宙飛行士ＸＸがこっちのテーブルにやってきて、呑んだくれた超愛国的ご託をわめきだして、ブルースに「ろくでもない**カナダ野郎**がここまで下りてきて、**この国を侮辱するとは**どういう神経をしておるのだ」とかなじり始めた。

おれは言った。「おいおっさん、おれは**アメリカ人だ**。ここに住んでる。そして、こいつの言う一言半句すべてに同意してるんだけどね」

この時点で、フロア係たちが現れて、お愛想笑いを浮かべつつこう言った。「今晩は、旦那さんがた。易経によりますとそろそろお静かにしていただく頃合いかと。それと、ここでは**だれ一人**、ミュージシャンにあやをつけたりはしないんでして、おわかりいただけますか？」

宇宙飛行士は立ち去ったが、自分の影響力を使って、移民の地位について「すぐにでもなんとか手を打ってやる」と陰気につぶやいている。「**あんたの名前は？**」とフロア係が低調にお引き取り願われつつ、そいつはおれに尋ねた。

おれは答えた。「ボブ・ジマーマン。そしておれがこの世で唯一嫌いなものといったら、ろくでもねえ頭の固いポーランド移民よ」

---

[1] 原注：出版社の弁護士の強硬な主張により実名削除。

「このわたしが**ポーランド系**だとぬかすか！　この薄汚い**のらくら者**めが！　おまえたちみんな、**クソみたい**な連中だ！　おまえたちなぞ、この国を**代表する者**なんかじゃないわ！」

「やれやれ、**あんたが**代表でないことを祈るばかりだよ」とブルースはつぶやいた。ＸＸＸは、フロア係に通りへ引きずり出されつつ、まだわめきたてていた。

　次の晩、別のレストランで、その宇宙飛行士は己の飯を喰っていた——しかもぜんぜんしらふで——が、そのとき十四歳の男の子がそのテーブルに近づいて、サインしてくれと言った。ＸＸＸはちょっと引っ込み思案なふりをして、恥ずかしがるポーズをしてから、男の子がわたしした小さな紙切れにサインをしてやった。男の子はそれをしばらく眺めてから、細切れに引きちぎると、ＸＸＸのひざにそれをぶちまけた。「あんた、みんなに好かれてるわけじゃないんだよ」と言った。そして、二メートルほど離れたテーブルに戻った。

　宇宙飛行士ご一行は口もきけなかった。八人か十人——奥さん、経営者、お気に入りの主任技師がＸＸＸにアスペンを目一杯楽しんでもらおうとしていたのに。いまの連中は、だれかがウンコスプレーをテーブルにふりかけたとでも言う感じ。だれも一言も言わなかった。そそくさと食べて、チップなしで去った。

　アスペンと宇宙飛行士はこれまで。ＸＸＸも、ラスベガスではそんな面倒には絶対にあわなかったろうよ。

　この街は、ちょっと味わっただけでずいぶん尾を引く。ベガスに五日間いると、五年もいたような気分になる。それが好きだという人もいる——でもまあ、ニクソンが好きな人もいるくらいだから。ニクソンなら、この街の市長として完璧だっただろう。それで保安官にジョン・ミッチェル、下水道長官にはアグニューね。

第25章　旅路の果て……ホエールの死……空港で汗みどろ

バカラのテーブルにすわろうとすると、フロア係がおれに腕をかけた。「ここは居場所じゃないでしょう」と一人が静かに言う。「表に出ましょう」

「そうしようか」とおれ。

そいつらはおれを正面入り口から連れ出して、ホエールを出してくるように合図。「お友だちはどこだね？」と待っている間に尋ねてくる。

「友だちって？」

「あのでっかいスペ公」

「おいおい、おれはジャーナリズム博士だよ。ろくでもないスペ公なんかと、こんな場所でつるんでるものかね」

そいつらは笑った。「じゃあ**これは**どう説明する？」そしておれと弁護士がフローティングバーで同じテーブルにすわってる、でっかい写真をつきつけた。

おれは肩をすくめた。「人違いだ。これはトンプソンという男だ。『ローリングストーン』の記者だ……本当に凶悪で発狂したような人物でね。それとその隣の男は、ハリウッドのマフィアの殺し屋だよ。やれやれ、きみたちこの写真を**観察してみた**のかね。ベガスで、**片手だけに黒手袋して**うろつくなんて、どういうキチガイだと思うね？」

「そのくらい気がついてる。**いま**こいつはどこに？」とそいつら。

おれは肩をすくめた。「足が速いからねえ。セントルイスから指令を受けてるんだ」

そいつらはおれを見つめた。「**あんたは**なんだってそんなにいろいろ知ってるんだ？」

おれはそいつらに黄金のＰＢＡバッジを見せた。群衆に背を向けて、一瞬だけひらめかす。「自然にふるまえ。おれの立場をまずくするな」とささやいてやった。

おれがホエールで走り去ったときも、そいつらはまだそこに立ったままだった。駐車係は見事なタイミングでそれを出してきてくれた。おれは係に五ドルやると、スタイリッシュにタイヤのゴムをきしらせて、通りに出た。

もうおしまいだ。おれはフラミンゴまで運転して、荷物を全部車につめた。プライバシーのためにトップを戻そうとしたが、モーターがなんかおかしい。発電器のランプがつきっぱなしで、真っ赤のままだ。水中性能テストでミード湖にこいつを突入させたとき以来こんな具合。ダッシュボードをさっと見てやると、車の中の電装系が完全にいかれてるのがわかる。何も効かない。ヘッドライトさえ——そしてエアコンのボタンを押すと、ボンネットの下でいやな爆発音がした。

トップは半分くらいのところでつっかえていたが、そのまま空港まで行くことにした。もしこのろくでもねぇ屑鉄がうまく走らなければ、うっちゃってタクシーを呼ぶまでだ。こんなデトロイト産のゴミクズにはうんざり。こんなガラクタ作ってるとは、なんてぇ連中だい。

空港についたら、ちょうど日の出だった。ホエールはＶＩＰ用駐車場に置いてきた。それを引き取ったのは十五歳くらいのガキだったけど、こいつの質問におれは一切答えなかった。この子は車全体の状態について、とても興奮していた。「こりゃまた！　なんで**こんなことに**？」とこの子は叫び続け、車のまわりをぐるぐるまわっては、いろんなへこみや裂け目、つぶれたところなんかを指さしていった。

「ひどいもんだよねえ。あいつら、ほんとにボコボコにしやがった。コンバーチブルを乗り回すのに、こんなろくでもない街だとは。最悪だったのが、サハラの正面の大通りのとこｒで。ほら、ジャンキーたちがたむろってるじゃないか。連中が**一度に**トチ狂ってきて、おれはもう信じらんなかったよ」

この子はまるで頭がいいとはいえなかった。顔はかなり早めに完全に無表情になって、いまやものも言えない恐怖状態という感じ。

「心配すんな。ちゃんと保険がかかってる」とおれは、その子に契約を見せて、小さな字で書かれた契約条項で、一日

たった二ドルで**あらゆる被害**に対して保険が効く、というところを見せた。

　おれが逃げ出したとき、ガキはまだうなずいていた。あいつを車の後始末に残したのは、ちょっと後ろめたくはあった。あれだけ派手なダメージを説明するのは不可能だ。もう完全におしまい、ポンコツ、まったく完全役立たず。ふつうの状況下でなら、返却のときに身柄を拘束されて逮捕だったろう……でも朝のこの時間ならだいじょうぶ、しかも相手にするのがあんなガキ一人じゃ。なんといっても、おれは「VIP」だもん。さもなければ、そもそもおれにあの車をあてがったわけがない……

　オンドリどもが戻ってきたら、勝手に鳴けばいいのだよ、と思いつつ、おれは急いで空港に入った。まだふつうにふるまうには時間が早すぎたから、コーヒーショップで、LAタイムズに隠れて潜伏。どっか廊下の奥の方で、ジュークボックスから「One Toke Over The Line」が流れてきてる。しばらく聞いてみたけれど、おれの末梢神経はもう受容能力がなくなってた。この時点でおれがちょっとでも身をいれて聴ける曲ってったら、「ミスター・タンバリンマン」くらいだろう。それと「メンフィス・ブルーズ・アゲイン……」

「Awwww, mama... can thei really ... be the end ...?」

　飛行機は八時発だ。ということは、二時間つぶすことになる。どうしようもなくむきだしの気分。連中がおれを探してるのはまちがいない。それにはまったく疑問を感じてなかった。包囲網が閉じてきてる……病気持ちの動物かなんかみたいに狩りたてられるのも、もう時間の問題だ。

　おれは手荷物を全部シュートでチェックインした。ただし、ドラッグいっぱいの皮カバンだけは別。それと〇・三五七も入ってる。この空港には、あのろくでもねぇ金属探知器はあるのかね？　おれは搭乗口のあたりをうろついて、さりげないふりをしつつ、黒い箱を探し回った。どこにも見あたらない。冒険してみようか——顔にでっかい笑みを浮かべて、あっさりゲートを通過する。心ここにあらずという感じでブツブツと「ハードウェア市場がさえなくて……」とかつぶやく……

　ヘマしたセールスマンがもう一人チェックアウト中。すべてはあのろくでなしのニクソンのせいだ。まったく。だれかとしゃべってたりしたら、もっと自然かな、と思った——乗客間の、お約束のおしゃべり。

「いやあご機嫌いかがですか！　なんでわたしがこんな汗ダラダラなのか、不思議にお思いでしょう！　いやあ。それがまた**とんでもない**話でして！　今朝の新聞、お読みになりましたか？……あの薄汚い連中が**こんど**しでかしたことときたら、もう信じられませんよ！」

それでごまかせるだろう、と判断……が、しゃべって安全そうなヤツがだれも見つからない。空港全体が、もし動きを一つまちがえば、おれのあばらでもねらってきそうなやつばっか。すごい被害妄想気分……スコットランドヤードの追っ手を逃れてきた、なんか犯罪性脳みそ吸い野郎みたい。

いたるとこと、イヌどもだらけ……というのもその朝、ラスベガス空港はホントにおまわりだらけだったから。全米検察官会議のクライマックスが終わって、大脱出の真っ最中。これにやっとこさ気がついて、おれは自分の脳みその健康状態について、ずっと気分がよくなった……

なにもかも準備万端だぞぅ。きみも用意はいいかぁ？

いいかぁっ！

ふん、いいんじゃねーの？　今日はベガスでも重い一日。千人ものオマワリが街からチェックアウト中、空港から三人六人の群になって、コソコソと脱出。おうちに帰りましょう。ドラッグ会議はおしまい。空港のラウンジは、おっかなそうな口振りと体躯だらけ。ショートビールにブラディ・マリー、そここには、分厚いショルダーホルスターの腋の下ストラップにメクサナを塗りこんで起きた、胸の炎症の被害者たち。この商売をいまさら隠してもしかたないか。もう全部見せちまおう……あるいは少なくとも、ちょっとは空気にあてよう。

はいはい、ご指摘ありがとう……どうもズボンのボタンを一つとばしちまったようでして。ズボンが落っこちないといいですけど。わたしのズボンが落っこちたら、あんただっていやでしょう？

いやに決まってるだろがバーカ。少なくとも今日は。このラスベガス空港のど真ん中で、汗だくのきつい朝、麻薬類

や危険薬物の巨大会議のいちばん尻尾んとこでは願い下げ。

「When the train … come in the station … I looked her in the eye …」

空港に流れる陰気音楽。

「Yes, it's hard to tell it's hard to tell, when all your love's in Vain.... (そう、わからない、わからない、愛がすべて無駄になったとき……)」

ときどき、**なにもかもが**無駄になったというような日がやってくる時がある……最初から最後まで完全な骨折り損。そして何が身のためか知ってるなら、いわば安全な隅っこに引っ込んで、**見物**してるほうがいい。ちょっと考えるとか。安手の木の椅子にもたれて、交通から遮断されて、バドワイザーのプルタブを狡猾に五本か八本むしりとる……キングサイズのマールボロを吸い尽くし、ピーナツバターサンドを食べて、最後に晩近くになったら、上等のメスカリンの束を飲み込む……それからあとで車で浜辺にでかけよう。渚に出て、霧の中へ、そして麻痺した凍りそうな足で、潮のところから十メートルくらい出てく……野生スナムシの群を踏みつけつつ……田舎者、女郎漁りども、まぬけなちいさい鳥だのカニだの塩吸いだの、そしてそこここにはでっかい変態か、もさもさしたつまはじき野郎が遠くでよたついて、砂丘や流木の後ろでたった一人でうろついてる……

こういう連中は、正式に紹介を受けることは一度もない連中だ——少なくともツキがそれなりに続けば。でも浜辺は、ラスベガス空港のうだるような早朝よりもややこしくはない。

なんか非常に見透かされてる気分だ。アンフェタミンの神経症？　パラノイア性痴呆症？——どうしたってての？　アルゼンチンの荷物か？　かつて海軍ＲＯＴＣを除隊になった、このびっこのヒョコヒョコした歩き方か？

いやまったく。**この男は二度とまっすぐには歩けんのです、艦長！　というのも足の長さがちんばだからでして……**

といってもそれほどじゃない。一センチほどだけど、でもそれは艦長の我慢範囲を五ミリほど上回ってたわけ。

そこでおれたちは袂をわかった。やつは南シナ海での任務を引き受け、おれはゴンゾー・ジャーナリズム博士になった……そして何年もたって、このひどい朝にラスベガス空港で時間をつぶしているとき、新聞を手にとると、あの船

長がかなりひどくヘマをこいたことがわかった。

艦長、原住民により虐殺
グアムで「事故による」攻撃の結果

（ＡＯＰ）――ＵＳＳクレージーホース艦上：太平洋上のどこか（九月二十五日）――この最新のアメリカ航空母艦の乗組員三千四百六十五名すべては、本日暴力的な追悼式に入っている。艦長を含む船員五名がホンセーの中立港湾でヘロイン警察とのもみあいに妻子、パイナップルのように賽の目切りにされてしまったためである。艦づきの牧師であるブロア博士が、離発着デッキ上での緊張につつまれた葬儀を夜明けに執り行った。第四艦隊合唱団が「親指トムのブルース」を歌った……そして艦の鐘が狂ったように鳴らされる中、五人の以外はフラスコの中で炎につつかれて、「指揮官」としてのみ知られるフードをかぶった高官により、太平洋に投げ込まれた。

葬儀が終わってまもなく、船員たちは乱闘を開始して、この船との通信は無期限に遮断された。グアムの第四艦隊本部の公式スポークスマンによると、海軍はこの件について公式コメントはないとのこと。もとニューオーリンズ検察官率いる民間専門家による調査団からの、高次調査の結果が入り次第なんらかの発表を行うとのこと。

……こんなのしか読めないなら、新聞なんか見る価値もないではないの。アグニューの言うとおり。マスコミなんてのは、残酷なおかまどもの集団でしかない。ジャーナリズムなんて、職業でも商売でもないのだ。つまはじき者や不適応者のための、安手のなんでもござれでしかない――人生の裏側への偽の戸口、汚らしいしょんべんまみれの小さな穴

で、建物検査官が封をしたんだけど、でもアル中が通りから入り込んできて丸まって、動物園の檻のチンパンジーみたいにせんずりこくだけの場所はあるってなもんだ。

第26章　ベガスにさよなら……「神も憐れむブタどもめ！」

空港をうろつきながら、ふと自分がまだ警察のバッジをつけたままなのに気がついた。平たいオレンジの長方形で、透明プラスチックのラミネートがかかってて、「ラウール・デューク、特別捜査官、ロサンゼルス」と書かれてる。小便器の上の鏡で見た。

こんなの始末しろ、と思った。むしりとれ。ギグは終わり……そして何一つ証明されなかった。少なくともオレには。まして——同じくバッジを持ってた——弁護士には絶対なにも。でもいまではヤツはマリブに戻って、自分のパラノイア性の傷口をなめてる。

時間の無駄だった、いい加減なサル芝居で——いまになっての岡目八目で言えば——オマワリ千人がラスベガスで何日か遊んで、そのツケを納税者にまわすための安手の口実でしかない。だれも何も**学んでなんか**いない——少なくとも目新しいことは何も。ただしおれは例外かも……そしてそのおれでさえ、学んだことといえば、全米検察官協会っての は、連中が最近のこの薄汚ねぇ神のご生誕一九七一年目になって「ドラッグカルチャー」と呼ぶことをやっとこさ覚えたものの、陰気な真実や力学的な厳しい現実から一〇年は遅れてるってことだけだった。

あいつら、未だに何千ドルも納税者を食い物にしつつ「ＬＳＤの危険性」についての映画なんか作ってるんだけど、いまの時期、ＬＳＤはドラッグ市場ではぜんぜん捌けてないなんてことはだれでも——ただしオマワリ以外は——知ってる。幻覚剤の人気は急激に下がりすぎてて、大量にさばいてるディーラーはもう、質のいいＬＳＤやメスカリンなんか、

特別なお客相手以外には扱いもしない。特別な客っていうと、くたびれた三〇超のドラッグ好き者――たとえばおれとか、あの弁護士とか。

最近のでっかい市場ってぇと、ダウナーだ。レッドやヘロイン――セコナールとヘロイン――と、質の悪い国内産大麻に、砒素から馬用精神安定剤からなんでもスプレーしたろくでもない代物。今日では、売れるものってったら、完全にイカレる代物ならなんでも――脳をショートさせて、それをできるだけ長いこと抑えこんどくみたいな。ゲット市場は、郊外にまでキノコみたいに増殖。ミルタウン男は、すさまじい勢いで、皮下注射や静脈注射にまで手を出すようになって……そしてもとコカインきちがいが落ち着こうってんでヘロインに手を出したの一人につき、ガキ二〇〇人ほどが直接針でセコナールに言ってるはず。このガキどもは、スピードなんか**試そうとすら**思ってない。

アッパーなんかもうださいのだ。メセドリンは、一九七一年市場では、純粋ＬＳＤやＤＭＴとほとんど同じくらい珍しい。「意識拡張」はリンドン・Ｂ・ジョンソンとともに落ち目に……そして歴史的に見て、ダウナーがニクソンとともにやってきたことは記憶しておいていい。

おれは飛行機にヨタヨタと乗り込んだ。問題いっさいなし、ただし他の乗客からは汚ねぇ電波が飛んできやがったが……でもおれの頭は、そのころにはあまりにヤキがまわってて、素っ裸になって全身うみの滴る性病まみれで搭乗するハメになったとしてもぜんぜん気になんかしなかっただろう。おれをこの飛行機に乗せないようにするためには、えらい物理的な力が必要になったはずだ。単純な疲労の段階をあまりに超えすぎてて、ほとんど永続ヒステリーという考え方にもかなりしっくり馴染みだしてたほど。スチュワーデスとほんのちょっとでも意志疎通に問題があったら、自分が泣き出すか発狂するんじゃないかという気分……そして相手の女性もそれを感じ取ったらしく、えらくいい扱いをしてくれた。

ブラディ・マリー用にもっと氷が欲しいときには、すぐ持ってきてくれた……そしてタバコを切らすと、自分のバッグから一箱出してくれた。スチュワーデスが不安そうだった唯一のときは、おれがかばんからグレープフルーツを出して、それをハンティングナイフで切り刻み出したときだ。彼女がおれをじっと観察していたので、おれはにっこりしようとした。「グレープフルーツなしじゃどこへもいかない主義でね。ホントにいいやつってなかなか手に入らないでしょ

う――よほど金持ちでもないと」
　彼女はうなずいた。
　おれはまた、ひきつり顔というか微笑を浮かべてみせたが、向こうの考えを判断するのはむずかしかった。デンヴァーについたら、おれを檻にいれて連行させる腹をすでに決めてる、というのはまったくあり得る話だ。おれはしげしげと彼女の目をしばらく見つめたが、彼女は自制心を保っていた。

　飛行機が滑走路に着地したときには寝ていたけれど、ショックですぐに目が覚めた。窓の外を見ると、ロッキー山脈だ。おれは**こんなとこで**いったいぜんたいなにしてるんだ？　まるっきり筋が通らん。できるだけすぐに弁護士に電話をしよう。金を送らせて、でっかいアルビノのドーベルマンを買うのだ。デンバーは全米で盗まれたドーベルマンのクリアリングハウスみたいなもんだ。全国いたるとこからやってくる。
　どうでここにきちまったんだから、おっかないイヌでも手に入れようかい。でもまず、おれの神経用に何かを。飛行機が着陸した直後に、おれは空港のドラッグストアまで廊下を駆け上がり、係員にアミル一箱頼んだ。
　彼女はもじもじして首をふった。そしてやっと言う。「だめです。**その手の代物**は、処方箋がないと売れません」
「わかっているとも。でもつまり、わたしは**医者なんだ**。だから処方箋はいらないんだよ」
係はまだもじもじしていた。「それでしたら……なにか身分証明書を見せていただきませんと」とうめく。
「もちろんだよ」とおれは財布をとりだして警察バッジをさりげなく見せながら、カードの束を探して、エクレスティカル教会ディスカウントカードを見つけた――そこでのおれは、神学ドクターってことになってる。新真理教会の公式司祭だ。
　彼女はそれを慎重に調べて、返してよこした。その態度に、これまでにない敬意が感じられた。目つきに暖かみが出ている。おれに触れたいみたいだ。「お許しください、先生」と彼女はにっこり笑った。「でも決まりなもので。こういうところでは、**ホンットにイカレた**連中もくるんです。危険な中毒患者とか。もう信じていただけないくらいの」
「ご心配なく。すべてわかるとも。でもわたしは心臓が悪くて、だからなるべく――」

「はいいますぐ！」と彼女は叫んだ——そしてものの数秒で、アミル十二錠持って戻ってきた。おれは、エクレスティカル教会の割引はないのか、と文句をつけることなく、おとなしく支払いをした。それから箱を開けると、一つ鼻の下で割った。彼女の見ている前で。

「あなたは心臓が若くてしっかりしてらっしゃる。感謝することですな」とおれ。「もしわたしがあなたなら、決して……ああ……ちくしょうめ！……え？　ああ、ちょっと失礼させていただきますよ。症状が」とおれは背を向けて、全体としてバーの方向によろよろと立ち去った。

「神も憐れむブタどもめ！」と男便所から出てきた海兵隊員二人におれは怒鳴った。

やつらはおれを見たが、なにも言わない。この頃には、おれは狂ったみたいに笑ってた。が、それで話が変わるわけでなし。おれは、心臓の悪いイカれた司祭の一人ってだけのこと。いやぁ、ブラウンパレスではさぞ歓迎されるだろうよ。アミルをもう一発派手にキメると、そしてバーについた頃には、心は喜びに満ちていた。おれって、まるでホレーショ・アルジャーの化け物じみた生まれ変わりみたいな気分……動中の男、ほどよくビョーキで威風堂々。

第III部

訳者あとがき

本書は Hunter S. Thompson **Fear and Loathing in Las Vegas: A Savage Journy to the Heart of the American Dream** 全訳である。

26・1　時代背景

時代は一九七一年。六〇年代の熱狂がおさまり、すでにヒッピー革命もドラッグ革命も、みんなが期待したような形では起こらないのが明らかになりつつあった。まだ、敗北感というほどのものではなかったかもしれない。でも、すでにピークは過ぎた雰囲気は確実にあった。楽屋裏では、ニクソンが民主党本部の盗聴をやったりして、さらにキッシンジャーがニクソン訪中の手はずを整え、一方でベトナム戦争も本格的に泥沼化。きれいなすっぱりした勝利があり得ないのは、もうだれの目にも明らかになってきて、国内でも反戦運動が盛り上がっていたころ。さらにニューヨークでは、本書の不肖訳者めが小学校に通っていたりしたのだが、それはまた別の話だ。　もちろん日本では、大阪万博が終わってなんだか日本が本格的な経済発展を遂げ始めていた頃

ラスティとかカリー軍曹というのは、いわゆるソンミ村虐殺事件の

また、ローリングストーンズの「悪魔を憐れむ歌」は　ジェファーソン・エアプレーンの「ホワイトラビット」

クスリについての基礎知識もあらまほし。特にこの中で「吸い取り紙」というのがしつこく出てくるのは、全部LSDのことだ。LSDは、ふつうは吸い取り紙にしみこませて、それを口に入れて

また、是非とも留意してほしいのが、経済状況の差である。七〇年代にアメリカはすさまじいインフレに見舞われており、それにともなって物価水準がかなりあがってしまっている。感覚としては、ここに出てくるお値段をおおむね十倍くらいすると、いまの感覚に近くなるだろうか。本書ではしきりに「七十五ドルのホテルスイート」というのが出てくるが、いまはラスベガスのどんなぼろ宿でも、こんな値段ではすまない。しかし本書での七十五ドルというのは、これが超高級ばか高スイートだったんだ、ということを伝えるための数字だ。いまの感覚だと、七五〇ドルのスイート、という雰囲気である（それでも安いな）。

26・2　ハンター・トンプソンについて

P・J・オローク

ゴンゾー・ジャーナリズム　客観・公正・中立を旨とする　ヘルズ・エンジェルスの中に入って、主観的に、かれらのことばで　見るのではなく、やること。報道するのではなく、語ること。ゴンゾー・ジャーナリズム。

ただし、それ以降のハンター・トンプソンは見るべき成果をまったく挙げていない。トンプソンは、別に主義主張があってそれを論理的に展開する人物ではない（それはまあ、この本読んだらわかるよねえ）。政治的にも見るべき論点を持たないし、哲学的に深みのある思考ができるわけでもない。行き当たりばったりの身勝手きわまる　そしてそのある程度の長さで、その自分の主題の雰囲気を味合わせるのがトンプソン最大の醍醐味である。逆に、読者がその雰囲気に染まって、さらにその主題について何事か読みとれるようになるまでには、ある程度の長さがどうしても必要になってくるわけね。ところが、まあこんだけ酒をふくむドラッグをやりまくってるせいかどうかしらないけれど、だんだん短いものしか書けなくなってきて、結果としてただの支離滅裂のくだまき駄文集ばかりとなっている。最近では、すでにまともにタイプライターすらうてなくなっているようで、手書きの書き殴りファックスを集めただけの、それはそれはシドイしろもの。ぼくが見かけたいくつかの書評も、「ウィリアム・バロウズもやきがまわってナイキのコマーシャルなんかに出てるし、憐れみをもよおすしかないねえ。もう六〇年代から七〇年代にかけてのドラッグカルチャーは、もうなんの衝撃力も持てなくなっているんだねえ」という感じだった。

邦訳はすでに「また　誤訳まみれであり、まったく信用できないし、訳者による我田引水の「解説」がそれをいっそうわけのわからないものにしている。　また本書にも「ラスベガスをやっつけろ！」という邦題で

26・3　いまのラスベガスについて

26・4　謝辞その他

既訳「ラスベガスをやっつけろ！」については　絶版で手に入らないし、いちいち参考にするようでは新訳をする意味がないし、だいたいほかの訳を参照しなきゃならないような不明個所って、まったくないんだもの。

読んでもらえればすぐわかるだろう。本書の最大の持ち味は、ノリだ。　じゃまな註は、最低限以下におさえてある。カリー軍曹のなんたるかを知ってるにこしたことはないけれど、ホワイトラビットなんか聞いたことがなくても、

白を黒ととりちがえたようなところは一ヶ所もないはずだが、